

叡山に登つて地勢を利用し、頑強に信長の軍に抵抗した。これより先き叡山の僧衆は信長が日宗の僧侶朝山日乗を重用し、基督教徒和田惟政に異教の宣布を許可したことを快らさ思つてゐたが、信長の部下たる明智光秀が山門の領地を掠めて、一山の存立を危ふくしたので、信長に對して反抗的氣分を懷き、寧ろ淺井朝倉に黨して信長の勢力を挫き、自分達の生活の基礎を鞏固にするに若くはないと考へてゐた。そこへ恰ど兩氏から聯合すべき旨の勸誘があつたので、渡りに舟と快諾を與へ、直ちに起つて信長に弓を彎まいたのであつた。信長は無慘の流血を見るを遺憾とし、佐久間信盛等をして山徒を説き、淺井朝倉聯合軍に敵對するならば山門領を還附するし、それが出来ねば中立をせよと云つたが、山徒はその何れにも應じなかつたので、信長は持久策を探り、壘を諸處に設けて叡山を包圍した。横山城からは木下秀吉、百々からは丹羽長秀が應援に來て、信長の軍容は日に／＼整ふのに、山上の敵は糧道を斷たれて給養が次第に缺乏して來たのみならず、氣候が漸々寒くなつて凍綬が一山を襲はうとした。防禦軍は死物狂になつて、京都の北白川口で毎日のやうに攻圍軍と戦つた。戦争はいつも猛烈で、西軍の死傷が多かつたのみならず、京都の平安はこれが爲めに攪亂せられ、士民は安んじて生業に就くことが出来なかつた。

近江の一向宗徒は、領主淺井氏が常に一向宗を擁護し、また越前の朝倉氏が本願寺と姻戚の關係にあるところから、常に兩氏を徳としてゐたが、そこへ顯如上人の教書が來たので、愈々兩氏の徳に酬いる日が來たといつて、俄かに一揆軍を組織して箕作觀音の二城に據り、持久戦によつて叡山を屈服せんとする信長を背後から攻撃した。その時、六角義賢もまた甲賀に兵を募り、菩提城に據つて一揆軍に應じた。また三好の殘黨は、この好機會を逸してはならぬと、本願寺と同盟を結んで河内に進入し、信長の與黨たる遊佐信教の據つてゐる高尾城、及び畠山昭政の據つてゐる烏帽子城を襲つたが、その計畫は失敗に歸したので、方面を轉じて京都に向はうとした。義昭は驚いてその動靜を信長に報告したので、信長は秀吉を大將として三好黨を撃退せしめ、また伊勢長島の一揆軍に對しては、瀧川一益に命を發してこれを控制せしめたけれども、敵は少しもひるまなかつたのみならず、尾張に進出して織田信興の占據せる鯛浦城を收め遂に信興をして進退谷まつて自殺せしめた。かうした一向一揆の蜂起は、信長をして左顧右盼して専ら前面の敵に當ることを得ざらしめたが、流石に彼れは英邁の資を持つてゐて、時に應じ機に臨んで適宜の處置をした。けれど形勢は不良であつた、環境は必ずしも彼れに取つて都合のよい、有利の状態ではなかつた。一步を誤れば、彼れはそ

義昭の調停
と勅使の下
向

の勢力を支持することの出来ない境遇に在つた。

義昭はかうした有様を見て静としてゐる譯には行かず、どうかしなければならぬと思つてゐたが、幸ひ義景から調停の依頼があつたのを機會に、十一月二十九日三井寺に入つて信長を説き、更に淺井朝倉兩氏を説いて戰を收めしめようとした。信長は容易にその勸説に應じなかつたが、正親町天皇が勅使を遣はされたので、三氏は直ぐ和睦の事に取り決め、十五日義景はその國に就き、十七日信長は岐阜に歸つた。しかしこの媾和の來した平和は永久的のものではなくて、ほんの一次的のものに過ぎないのであつた——いはゞ無期限の休戰のやうなものであつた。その媾和の背後からは、戰爭が既に覗いてゐた。

- (一)『信長公記』卷三參照。
- (二)『石山退去錄』參照。
- (三)『總見記』——「十六日兩陣鐵砲をやめ、大阪方より和睦の囑有けれども、信長公御承引なし。是はとても落城の義程有まじく候とて、一體に御取合なし。」「足利季世記」參照。
- (四)『石山退去錄』參照。
- (五)『足利季世記』參照。
- (六)『信長公記』卷三。

(七)『史林』第四卷第一、二、三號所載、三浦博士の「土一揆」と題する論文は、この土一揆について詳論してゐる。參照せられ度い。

(八)『蓮如上人御一代記問書』——「よろづ御迷惑にて、油をめされ候はんにも御用脚なく候間、やうく京の黒木をすこしづつ御とり候て、聖教など御覽さふらふ由に候、又少々は月の光にても聖教をあそばされ候。御足をも大概水にて御洗候、又二三日も御膳まいり候はぬ御事候由承りおよび候」。

(九)『本願寺誌要』九五頁參照。

(一〇)同上、九六頁參照。

(一一)『富樫記』參照。本願寺と富樫氏との關係を論じたものには、故山路愛山氏の『富樫氏と門徒一揆』、『武家時代史論』所收がある。

(一二)『朝倉始末記』卷之二「加州富樫滅亡事」。

(一三)『言繼卿記』永祿十三年九月二十日の條參照。

今度大樹天下靜謐のため出陣候、信長同前の處、一揆をおこし敵對のよし其間候。不相應の事しかるべからず候。早々干戈を相休候へき事肝要候。存分候はゞ仰出され候べく候。猶兩人に仰合候也。

本願寺僧正どのへ

(一四)『信長公記』卷三參照。

(一五)『御湯殿上日記』元龜元年十二月十四日の條參照。

第五節 叡山の焼討

浅井朝倉と
信長との熾
和破る

信長は義昭の勸告と勅使の下向とによつて、已むなく浅井朝倉と和したけれども、彼等は信長の根據地と京都との間に介在して、彼れの交通線を脅す一大障害であつたから、いつかは難を構へてそれを滅ぼさうと考へてゐた。そこで色々工夫をして、浅井氏の部下を招致することに努めた。その結果、元龜二年二月には佐和山の磯貝員昌が降参し、朝妻城も亦守を撤するといふ風に、浅井氏の形勢は、日に日に危険の度を増して來た。長政はこれを見て大に憂へ、決定的の一決戦を試みて士氣を鼓舞しようと思ひ、江北十箇寺の門末二萬餘人を召集し、浅井七郎を箕浦城にさし向けて、信長に降服した堀氏を攻めしめ、自らは姊川に進んで横山城にゐる木下秀吉に備へた。ところが秀吉は迂回して背後より箕浦城を助け、七郎らを追ひ捲くつた。これで信長對浅井朝倉の熾和は破裂した事になつたので、信長は誰に遠慮もなくこれらの敵に攻撃を加へることが出來た。信長は焦燥の性格を持つてゐたが、事に當つては落ち着き拂つて、ぢり／＼と目的に向つて詰め寄せる持久力をも持つてゐた。それらの日に浅井の小谷城は孤立してゐたけれど、長い年月に互つて扶植した勢力は容易には衰へさうにも

叡山攻撃の
作戦

なかつた。そこで徐ろにその勢力を削ぐ計畫を立てたが、それには先づ叡山を襲つてこれを滅ぼし、山徒が浅井を援けることの出來ないやうにするが可いと考へた。

信長は曾て叡山に對して、浅井朝倉を捨て、信長に味方したならば、分國內の山門領を返還することにすべく、若し味方もせず中立もしないならば、一山を焼き拂ふことにすると申し送つたことがあつたので、それを口實にして、元龜二年八月柴田勝家を先鋒として近江に侵入し、小谷附近に放火して浅井氏を脅威した後、自分は十二日陣を勢田に進めて叡山攻撃の作戦を立てた。叡山は日本史の上の一つの宗教的奇蹟であつた。その發達の歴史が立派であるだけに、その勢力はなかく侮ることが出來なかつた。それは單に宗教上の權威のみならず、軍事上の實力をも持つてゐて、久しい前から一獨立國の如き觀があつた。猛烈な信長もこれに敵對するのには、非常な決心と自信とを要したのであつた。

僧兵の歴史

回顧すれば僧兵の出現したのは、まだ皇室の威力の盛んであつた平安朝時代の事であつた。源平對抗時代、鎌倉時代を経て室町時代に入り、政治の局に當るものは度々變つたけれど、その威力の直接に及んだのは、たゞ部下に屬してゐた大名武士だけで、その大名武士の下に屬してゐた民衆の多數は、關係の淡い間接の位地に立つてゐた。

然るに僧侶はその總てに深い交渉があつて、社會の上層を占めた將軍も、執權も、管領も、武士も、その下層に在つて農業生活をしてゐた民衆も、僧侶とは密接な離れる



〔合歌番一十七〕 裝服の兵僧

ことの出来ない關係を持つてゐた。政治上に於ける武士階級と農民階級との關係は、單に外的に過ぎなかつたけれども、宗教上に於ける僧侶階級と農民との關係は内的で、そこに手と手套との如き接觸があつた。宗教は實に普遍的の力であつた、その擴がつてゆく所は、政治上の被治者たる農民ばかりではなく、治者たる武士の階級にも及ぶのであつた。それ故、或意味に於いて、僧侶は最高權力の代表たる如き傾きがあつた。かうした僧侶が宗教の力以外に武力

騎士團、チ
ユートン隊
の比較

僧兵の發達

を帶ぶるとになれば、そこに誰も防ぐことの出来ない威力が備はらなければならなかつた。しかも、さうしたものが發生した。それが即ち「僧兵」であつた。僧兵はその名が示してゐるやうに、僧侶と武士とが結び附いて出来上つたものであつた。その一半は宗教的であり、他の一半は武士的であつた。フランスの一學者は、これを歐洲の騎士團(Templars)や、チユートン隊(Teutonic Order)に比較して、その侮るべからざる勢力を持つてゐたことを説き、宮中に北面の武士を置かれたのは、皇室がその權力の絶頂に在る時でさへ、これを制馭することが出来なかつた爲めだと云つてゐる。最も初めに祈禱書を劔に替へた僧侶を出したのは、比叡山延曆寺であつて、その威力は實に素晴らしいものであつた。白河法皇が「世の中に思ふ儘にならぬものはないが、たい加茂川の水と、雙六の采と、比叡山の僧侶とは手におへぬ」と云はれたのを見ても、そのの猛しさ、強さ、凄まじさが想像せられるのであつた。

その後僧兵は三井の園城寺、南都の東大寺、興福寺などにも現はれた。紀伊の高野山にも強力な僧兵の一團が養はれてゐた。室町時代には、これら古い寺々のみならず、新興の法華宗や一向宗でも、必要に応じてそれ／＼多くの土兵を集めるやうになり、かくて英僧の最善の記號は、武器の熟練といふことになつた。主人のない武士、零落

した大名、その外いろいろの追放人は、皆これらの寺院に入つて、寺院は一時失敗者の避難所たる觀があつた。彼等はそこに安全な隠れ家を見出したのみならず、そこで豊富なる食糧をも見出した。これら失脚した武士と、生産力を持つてゐる農民とは、寺院に武力と財力とを供給して、寺院を扨護したのみならず、また地方の大名に對する大きな威嚇ともなつた。つまり寺院は一つの小さな獨立國であつた。寺院の助を藉らなければ、どんな大事も議せられず、どんな紛争も解かれぬやうな日が來た。天皇も、將軍も、大名も、寺院の前にはその光りを失つた。

僧侶の墮落

僧侶の現はれ始めた頃には、云ふまでもなく、それは宗教が主で武力は従であつた。——武力は單に護教の目的を達する爲めの非常手段に過ぎなかつた。それらの日には彼等は屢々眞理の爲め、正義の爲めにその干戈を動かし、または弱者の爲めに強者を挫く勢力均衡の保障ともなつたことがあつた。南北朝時代にすら、叡山の僧侶は官方に屬して勤王的行動に出たことがあつた。然るに室町時代の中頃から、世の中が亂れ社會の秩序が壞れて、因襲的な血統崇拜や、傳統的な長上尊敬や、さうした一切の形式が減んで、實力を尊ぶといふ純裸體的の觀念が一般民衆の頭を占めるに至り、物質的な武力や財力やが歓迎せられて、精神的な道義や恩愛の力といふものは、全く顧み

僧侶の權勢

られなくなつた。そこには嚴肅な徳行も不必要であつた、深遠な學問も不必要であつた。人はたゞ食つて寢て生きて行きさへすればそれで可かつた。現實生活に執着して過去の追憶、未來の憧憬をおろそかにするところに、それらの日の民衆の生活理想が横はつてゐた。それはまことに淺ましい、憐れなものであつた。

しかし、かうした時代の民衆の頭にさへ、尙ほ宗教的觀念は残つてゐて、彼等は折々死後の生命といふやうな問題に脅かされた。我儘な大名、殺伐な武士、無學な農民、どんな階級にゐる者も、晝間は名利の爲めに一切を忘れて無我夢中に蕩擻してゐるけれど、夜が來て手を胸に置いて靜かに瞑目すると、尊い良心が頭を擡けて烈しい反省に襲はれずには居られなかつた。極樂へ行きたい、地獄へは墮ちたくない。地獄極樂の鍵を握つてゐるのは僧侶で、それから功德のある呪文を誦へて貰はなければ、この世の罪業は消滅するものでない。この尊い救濟者たる僧侶を支へるものは布施である。布施さへすれば、僧侶は責任を帯んで一切の罪を償つてくれる。自分達は手を拱ぬいて靜としてゐても構はない。——かう人々は信じてゐた。かうした簡易な道德組織が一般民衆の精神を支配してゐた爲め、嚴肅な徳行や、深遠な學問を追求する必要はなく、僧侶はたゞ他人が聞いても分らぬやうな呪文を誦へさへすれば可かつた。呪文に

伴ふ布施は決して少額でなく、祈禱その他で年々増加してゆく領地からの収入もなかく、多かつたから、大きな寺院の経済は極めて豊かであつて、それは優に一國の大名に匹敵するほどのものであつた。この富がまた僧侶を墮落せしむる一大動因ともなつた。

それらの日に叡山はたゞ一個の化石に過ぎなかつた。そこには開祖たる傳教大師の大理想の影もなく、殿堂も寺坊も徒に形骸をとめてゐるのみであつた。昔、輪奐の美を極めた本堂は檜皮葺となり、そこには、二三の燈明が上つてゐただけで、本尊は拜まれるべくもなかつた。どの坊もくゞ荒れ果て破れ果て、まことに淺ましい有様であつた。しかも僧衆はそれらには拘はりがなく、いつも坂本へ下りて往つては、働ける限りの亂暴を働いた。經典を讀んだり、學問を勵んだりするものは一人もなかつた。南都の一僧はそれを見て「一山は滅亡した」と歎いた。叡山の荒廢は、それらの日に於いて高潮に達してゐた。その僧衆の破戒は口にするさへも忌はしいほどであつた。かうして叡山は淺井朝倉に黨することがなくとも、自から破滅すべき日が來てゐたのであつた。

九月十二日、信長は總攻撃を開始し、部下をして山門に迫らしめたが、山徒は死力

を盡して防戦し、容易に陥るべくも見えなかつた。けれども攻撃軍は百戦の勇士から組織されてゐる精銳の軍であるし、山徒は云はゞ、義勇軍のやうなものであるから、遂には打ち破られて、根本中堂、山王二十一社を始め、殿堂、屋舎、一字も残らず敵の爲めに焼き拂はれた。山上山下の老若男女は取る物も取り敢へず、悉く徒跣で八王寺山へ遁け延びると、織田軍の兵士は、四方からそれを追ひ詰めて、觸る、を幸ひ頸を刎ね飛ばし、僧侶と俗人と兒童とを問ふ違がなかつた。叡山の名譽を雙肩に荷して恥かしからぬやうな高僧も、矢張り名もなき雜兵の刃に懸つて死んだ。捕獲したものの中には、美しい婦人や稚兒もゐたので、「惡僧は致し方も御座いませんが、これらはお助けを願ひます」といふと、信長は「いや許されぬ」と、一々その頸を刎ねさせた。かうして數千の屍は谷を埋めるばかりであつた。何といふ果敢ない大團圓であつたらう！ 同時代の人はこれを「天下の爲め笑止の事だ」と批評した。信長は山門領を取り上げて部下に分與したが、この時明智光秀は志賀郡を得たので、坂本に築城してそこを根據地と定めた。

(一)『信長公記』卷四参照。

(二)『淺井三代記』卷十六『淺井大阪顯如上人を頼一揆を催す事』参照。

(三)同上、『信長卿江北へ押寄給ふ事』參照。

(四)『The Christian Daimyōs』, pp. 9, 10. 叡山の衆徒が武士も敵し得ないやうな勢力のあつたこと、何事があれば日吉の神輿を擁して京都に入つたことは『日吉御輿御入洛見聞略記』を見ればよく分る。

(五)『多聞院日記』元龜二年三月十九日の條參照。

(六)同上。——「山相果式也ト、各被_レ語_レ之。諸寺併此式也。可_レ悲可_レ悲」。

(七)『信長公記』卷四。——「山門山下僧衆、雖_レ爲_レ王城之鎮守、行法出家之不_レ拘_レ作法、天下嘲弄も不_レ恥、不_レ顧_レ天道之恐、姪亂魚鳥令_レ服用、耽_レ金銀賄」。

(八)『東寺執行日記』、元龜二年九月十二日。——「比叡山中堂。本尊藥師如來。其外十六谷堂塔坊中悉焼失」。

(九)『信長公記』元龜二年九月十二日の條參照。この記述の中で最も注意すべきは、捕虜の中に婦人のゐたことであつた。これは淺井朝倉軍の士卒を喜ばせる爲めに、特に婦人を稚兒の形に扮せしめて山上に送つたものだといふ記録が残つてゐる。しかし、その裏面には、山徒が婦人を近づけ、且つ常に男色を弄んだといふことがほの見えるやうな氣がする。

(一〇)『御湯殿上日記』——「ち_レ頃、この葉もなき事どもにて、天下のためせうしなる事なり」。

第六節 山の甲州、海の越後

甲斐國はその名が示してゐる通り、南に連る丹澤山脈と、北から東に互る關東山脈と、西に連る赤石山脈との間の峽を占めてゐる廣濶な一盆地で、僅かに南は富士川によつて駿河に、東は桂川によつて武藏に、北は釜無川によつて信濃に通ずるだけ、交通の極めて不便な高地であつた。かうした地は、軍事的には自然の障礙を以て保護せられ、經濟的にはそれ自身の産物を以て支持することの出来るのが、地理學上の通則であつた。自給自足の點に於いても、天險難攻の點に於いても、甲斐は支那の四川省によく似た地位に在つた。

越後は日本海に面した沿海平地で、北から東に互つて出羽山脈が聳峙し、西には焼山群峰が亂立し、海と山とに挟まれて砂礫から成る平地が細長く北から南に伸びた。かうした地勢を持つた地は、海上に發展するか、或は山嶽を超えて他の方面に伸びねばならなかつた。東部朝鮮にゐたツングーズ族、パレスチナにゐたフェニキヤ人などは、越後民衆と同一の運命を以て海上に發展した。しかし荒い日本海を控へた越後民衆は、海上に發展する便宜を持たなかつたので、山岳を越えて南方に出るか、或は西

甲州人と越後人

方に伸びるかするより外に道がなかつた。かうした地理的窘境は、その住民にそれに適はしい通性を作つた。——甲州人は意志強く、死ぬる事を苦痛とは思はなかつた。上は下を愛せず、下は上を敬せず。下に少しでも過失があれば上はこれを咎め、上に些かでも無理があれば下はこれを責めた。彼等は屢々、怨み、且つよく憤つて、是非を辨へぬことが多いけれど、勇氣には富んで、親は子の死骸を踏み越えて、子は親の死骸を踏み込ませて、戦場に骨を暴すことなどを厭ひはしなかつた。越後人は負けず魂を持つてゐて、争へば必らず勝ち、戦へば必らず敵を破らねば置かぬといふ意氣と勇氣との所有者であつた。途で躓つて倒れても痛いと思ふなと教へるのがその兒童教育の理想であつた。義理の念も強ければ、恩愛の情も深く、主人は被官を憐み、被官は主人を信じて、上下一致して事に當るといふ美點はあるけれど、是非を辨へるものは極めて少數であつた。若し彼等にして善惡を辨へて道理に違つたならば、無双の風俗といつても可からう。——これは例の『人國記』の甲州人及び越後人に對する批評であつた。

永正、大永の頃、この甲斐には武田信昌が占據し、その越後には長尾爲景が占據し、共に東北に於ける領主の雄なるものであつた。これらの兩氏は時代の抗争熱に浮かさ

甲越地方の英雄群

れて、各自その領土の擴張に努め、勢力の弱いところに向つてその鋒先を衝つ込んだ。信濃には村上頼國と小笠原貞朝とが居り、上野には上杉憲房と長尾景春とが控へてゐて、兩氏の鋭い鋒先のそれを突くのに任してゐた。天文、弘治の際、長尾氏は景虎が相續して上野及び信濃に出でんとし、武田氏は信虎、晴信が相嗣いで信濃の境を犯さうとした。晴信は學殖の深い、膽力の据つた人物で、北の方信濃に進出して、村上義清、小笠原長時の領地を奪つたので、義清は越後の景虎に請うて救ひを求めた。景虎もまた學問の素養があり、勇敢、任侠の氣象に富んでゐたので、兩氏の請を諾して信濃に進出し、武田氏と兵を交へようとした。それ等の日に、信濃は二つの強國の間に挟まれて、北か南かの一方に屬かねばならぬ破目に陥つてゐた。強國と強國との間には、その直接衝突を避けるべき緩衝地帯といふもの、あるのが軍國の常であつた。今その犠牲に上つたのは信濃であつた。

景虎が信濃進出を企て、ゐる時、晴信は上杉の屬城たる刈羽郡北條の城主北條高廣を誘惑して自分の味方に引き入れたので、景虎は天文二十四年正月兵を率ゐてこれを攻め降し、直ちに南下して信濃の高原に武を試みようとした。晴信はその進出を妨げようとした。南進するものは、北進するものとは、どこかで衝突しなければならな

景虎と晴信

川中島

つた。海を背景とする北軍と、山を背景とする南軍との遭遇地點は、いつも千曲川と犀川との間に挟まれた川中島であつた。川中島は長野平の中央であると同時に、越後、甲斐、上野の三國を連絡する交通輻射線の中心點でもあつた。かうした地點は軍事上重要な地位を占めるもので、南北軍が常に此處で戦つたのに無理はなかつた。この争奪戦は弘治元年七月から始められた。同月、晴信は兵を率ゐて信濃の大塚に進出したが、景虎もまた同じ頃、軍を信濃に進めて、大塚から三十町ばかり手前の善光寺に陣取つた。善光寺の堂主栗田讃岐は旭城に據つて晴信に聲援した。武田軍には八百張の強弓と、三百挺の鐵砲とがあり、それらによつて景虎の軍を困めた。戦は十月十五日まで約百五十日の間續いたが、勝敗はいづれとも決せず、遂に今川義元の調停で休戦した。

景虎の入京

これより先き、京都を落ちて近江の朽木谷に居つた將軍足利義輝は、書を景虎と晴信とに與へて、兩氏が和睦して京都に上り、三好長慶等を除いて幕府の舊業を回復するやうにして貰ひたいと云つたので、景虎は信濃から還ると直ぐ旅程に上り、永祿二年四月京都に入つて正親町天皇に謁し、また義輝にも會つて北陸裁定の策を立て、その八月に歸國した。その間に晴信は兵を飛驒に出して江間氏等を攻めたが、やがて軍を

景虎の關東進出

越後軍小田原を攻む

班して信濃に進出し、頻りに諸城を攻めて越後を威嚇したが、彼れと越中の神保良衛との間には默約があつて、若し景虎が信濃へ進入したならば、直にその背後を襲ふことになつて居り、また加賀、越中の一向一揆は、形勢を觀て起つといふ約束があつたのみならず、相模の北條氏康は晴信の懲懲に應じて上杉憲政を上野の平井より退去せしめ、餘勢を以て關東八州を蕩平し、祕かに越後を窺ふが如き形跡があつたから、景虎は信濃に入つて晴信に對抗することが出来なかつた。そこで先づ三年三月に越中に入つて、武田に與せる神保良衛を富山城に攻めて之を陥れ、さて兵を撤して越後に歸ると、今度は關東方面に出兵することに決め、八月には憲政を奉じて上野に入り、沼田、厩橋の二城を抜き、北條氏康と川越附近で對陣したが、氏康に慊らなかつた足利藤氏兄弟が、安房の里見義堯と聯合して、自分の舊城なる下總の古河に還らうとしてゐたので、氏康は腹背から敵を受けて、心安らかに上野に駐つてゐることが出来なかつた。

景虎は、平井、小幡、名和、伊勢崎の諸城を攻めて之を降したので、近國の諸大名は皆歎を通じた。さながら無人の境を行くが如く、景虎は利根川の流域を南下して古河城を收め、栗橋城に上杉憲盛を留めて、自らは四年三月十三日、氏康のたて籠つてゐる小田原城を攻圍した。急を聞いて晴信は援兵を信濃の輕井澤に出し、景虎の背後

を襲はうとした。小田原城は防備が嚴重で、容易にこれを抜くことが出来なかつたので、景虎は五月に至つて撤兵して歸國の途に就いた。彼れが關東管領の職を嗣ぎ、上杉の姓を冒して、名を長虎(後に輝虎)と改めたのはその時のことであつた。

川中島爭奪戰

永祿四年十月、輝虎は旗鼓堂々として軍を信濃に進めた。その陣地は川中島を眼下に俯瞰し得る西條山であつた。その時の川中島爭奪戰は實に猛烈で、晴信の弟信繁が



武田信玄支花押

陣中で死んだほど、甲斐軍は一時危険なる状況に陥つたが、その猛將小山田備中の手勢が側面から越後軍を攻撃した爲め、辛じて敗走を免れたのであつた。しかし久しく對峙してゐる間に、甲斐軍は次第にその勢力を回復して、結局は越後軍の退却となつたことは事實であつた。かうして信濃の殆ど全部は、武田氏の勢力範圍に歸した。

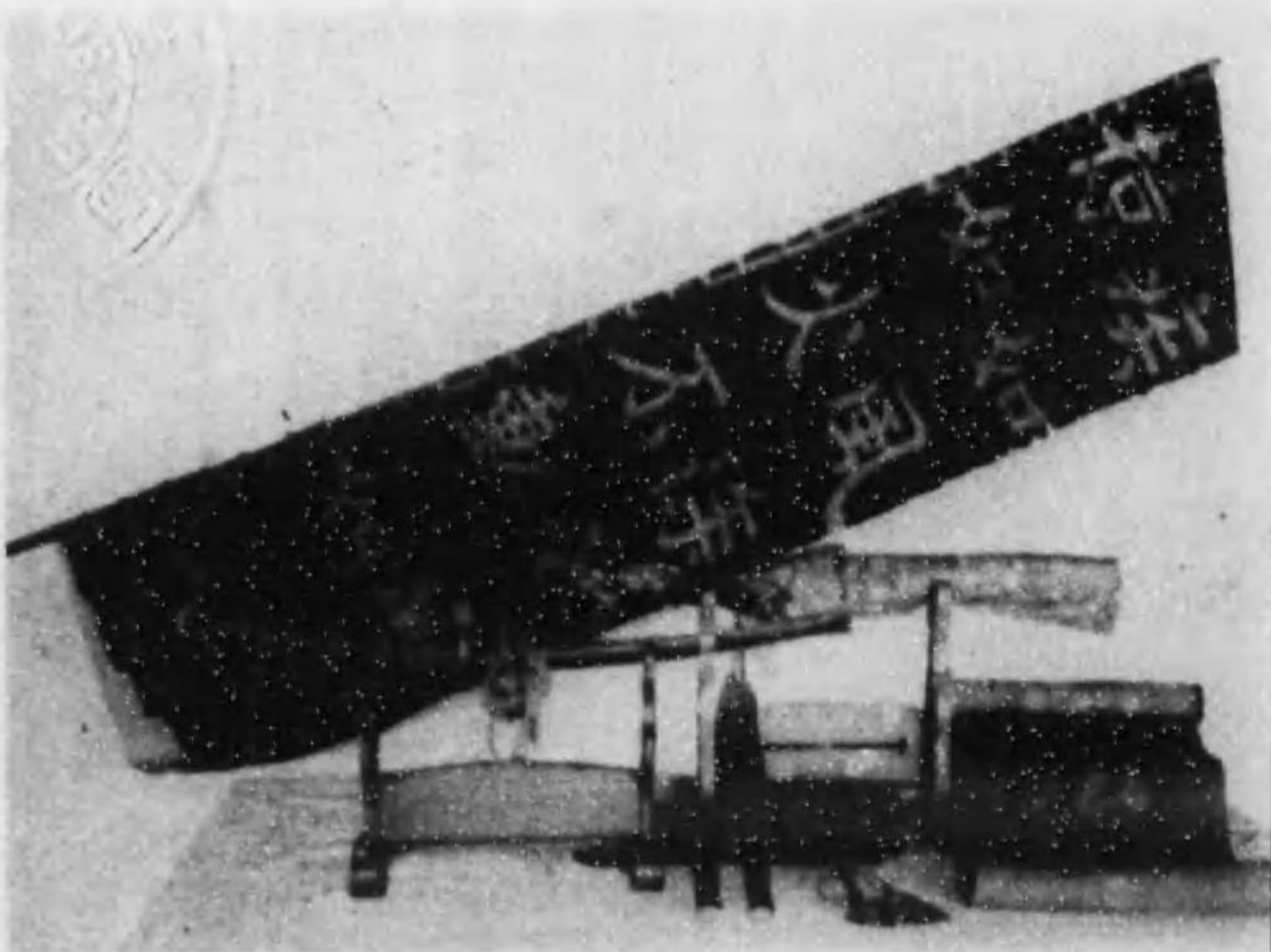
晴信と輝虎の人格

甲州人の心は直ちに晴信の心であり、越後人の心は直ちに景虎の心であつた。上杉武田優劣論は、昔から度々武士や學者の口の端に上つた。謙信は勇敢、信玄は剛毅、彼れに海の如き度量があれば、此れには山の如き信念があつた。此れに溫柔が缺けてゐれば彼れには細心が缺けてゐた。謙信の政治家的手腕は信玄のそれよりも劣つてゐたとすれ

春日山神社と信玄遺物

上圖は越後の春日山神社で、春日山城址に建てられたもの。山は高田市街の後に在り、遠く日本海の蒼波を望んで、光景が甚だ雄大である。英雄謙信の少年の日の餘蔭が想ひ出される。

下圖は甲斐の嘉林寺に藏せられる佩刀、軍配團扇、軍旗で、共に信玄の遺物であると云はれる。軍旗には「疾如風。徐如林。侵掠如火。不動如山。」とあつて、信玄の軍略を想ひ浮べしめる。



春日山轉換る言支巖碑

春日山、言支の軍制が懸心懸けしなる。
 了るる言支の軍制の「表の風。谷の林、野の火、不、龍の山。」
 不圖に甲斐の藤林寺に懸けらるる風、軍頭國、軍制、共に言支の懸心
 卒の日の遺愛を懸心出さる。
 終に終り、懸く日本新の蒼蒼を望み、光景は甚だ壯大なる。英嶽齋の全
 上圖に懸けの春日山轉換る、春日山城址に懸てらるるもの。山は高田市街の



上杉謙信花押

ば、信立の英雄的行動は謙信のそれに優れてゐたとは言はれない。兄たり難く、弟たり難いとは、昔からこの二人を評する際に用ひられる古い成句であつた。まこと、二人に優劣はなかつたかも知れないけれど、そこに動かすべからざる差異はあつた。謙信は美的であり、情的であつた。その行動にはロマンチックな要素が多かつた。たとは、咲き匂ふ櫻花の如く、賑やかな、花々しい趣があつた。これに反して信立は理的であり、智的であつた。その生活にはモナスチックな分子が少くなかつた。たとは、清らかに澄み渡つた秋の光の如く、何となく寂しい、しんみりした趣があつた。こゝに二人の英雄の間の差異が横はつてゐた。加藤清正の侍醫であつた江村專齋は同時代の英雄の比較評論を試みて云つた。「全盛の時、謙信は五個國に手を伸ばし、信立は八箇國に手を伸ばし、信長は十九箇國半に手を伸ばしたが、秀吉は天下を一統して尙ほ餘力があつた」と。成敗の跡を見て人物を軒輊するのは、必ずしも正しいことではないが、そこには人格の影がさいてゐないとは云へなかつた。謙信の領國が五箇國で、信立のそれが八箇國であつたところに、前者の情義に厚かつた義侠的な人格と、後者の

武田上杉二
氏の戦術

成功を急いだ利己的な人格とが、面白いコントラストをなしてほの見えるのであつた。かうして軍談乃至軍記の傳へる甲越の對立は、科學的歴史家の前に幻と消え失せた。金の兜の忍びの緒を切つて犀川の淵に投げ込み、白練の絹を鉢巻にして、武田の旗本の中に放生月毛を乗り入れた謙信も、軍配扇ぐんぱいせんを揮つて敵將の打ち下す太刀を三度までも受けとめた信立のぶたても、共に少年の日に見た夢中の英雄になつてしまふのであつた。しかし、軍談師や軍學者が、武田上杉の對立の中から、自分達の軍談の材料を見出したたり、またはその中に軍學の權威を設定したりしようと試みたところに、兩氏の戦術、戰略の價値があつたと見ることは出来るのであつた。色々の武器の發明、隊伍の編制、戦術の工夫などが、二人を宗とするやうに言ひ傳へたのは眞ではなからうが、少くとも武装を輕快にして行軍を便利にしたこと、輜重を整頓して給養に缺くる所のなかつたことは、上杉軍の小田原攻圍の際に於ける行動を觀れば、直ぐそれと理解せられることであつた。この二つの點だけでも、それらは近世戦術の理想に適つた發明であらねばならなかつた。して見ると、矢張り坊間に傳へられてゐるやうに、上杉武田の兩氏は、わが邦の近世の戦術に改造の第一歩を踏み締めた先驅者であつたかも知れなかつた。

(一)『妙法寺記』——「天文二十二年、信州村上殿、八月鹽田の要害を引のけ、行方不知に御なり候」。

(二)同上、弘治元年の條。——「村上殿、高梨殿、越後守護長尾景虎を奉頼」。

(三)『甲陽軍鑑』及び『川中島五戰記』參照。前者は軍書の類で、その記事に信用すべからざるものが多い。後者は上杉家から幕府の『本朝通鑑』編纂の際、參考材料として提出したものであるが、これまた全部を信する譯には行かない。川中島の戦争については、故文學博士田中義成氏の『甲越事蹟考』、『史學會雜誌』第一號所載に詳しい考證がある。また妻木忠太氏の『甲越川中島合戰の年代に就いて』、『歴史地理』第十九卷第四號)及び『川中島合戰に関する根本史料』、『歴史地理』第十三卷第二號)にも參考すべき記事が多い。

(四)『妙法寺記』——「七月廿三日、武田晴信、信州へ御馬を被出候」けれども『大須賀文書』に、天文二十四年七月十九日附の晴信の感狀があるから、廿三日よりも早くから戦端の開かれてゐたことは知られる。

(五)同上、永祿四年十月十日の條參照。

(六)『上杉輝虎法進狀』、『群書類從』卷第三百九十九所收)及び『甲越軍記』參照。しかし、この二書は共に信するに足らぬものと云はれてゐる。

(七)『甲越事蹟考』、『史學會雜誌』第一號、二八、二九頁)に於ける田中博士の謙信よりも信玄の方が信州北部に勢力の強かつたといふことの論斷は、極めて確實で、それは高井、水内、埴科、更級の四郡内に殘存してゐる朱印は、皆信玄のものであつて、謙信の證文は一つも出

ないといふことで證明せられる。

(八)『老人雑話』巻下参照。

(九・一〇)『甲越軍記』三編、卷第十二『上杉謙信單騎與武田信玄太刀打之事』参照。

第七節 武器の進歩と戦術の變化

戦争の連続は武器の進歩を促がし、戦術の變化を起さしめた。源平抗争の時には、世界に類のない母衣はもえだの、鎧の袖だのを工夫せしめた。室町時代の中葉以後引き続き行はれた内亂は、そこに何物をか産み出さねば止まなかつた。武器としては鎧と小銃、城郭としては天主閣、戦術としては團體的運動——この三つのものが、室町末期から安土桃山時代へかけての軍事的發展を象徴する目ぼしいものであつた。

わが邦の歴史を顧みると、戦術は随分變化發達した。石棒、石斧を以てなぐり合つた先史時代は餘りに遠かつた。歴史の黎明に於いて、私達の祖先は弓矢と劍とで闘つた。平安朝時代には騎兵戦が多く、武器は大方弓矢に限られてゐた。歩兵戦は源兵抗争の頃から現はれたが、團體的戦闘ではなく個人的格力であつた。蒙古軍の侵入した時には、始めて「てつぱう」といふ恐ろしい威力のある武器を見せつけられた。南北朝

武器の歴史

軍事的發展

團體的威力

小銃

時代には大分戦争が發達して、味方と敵との間の距離を大きくしながら、尙ほ敵に損害を與へようといふので、斫截用の刀劍に柄をつけた長刀から衝刺用の鎗といふ新武器が工夫せられた。室町時代の末には小銃がポルトガルから渡來して、わが邦の戦術に甚大なる影響を與へ、個人的格力を戦闘の勝敗の楔子とした考が次第に失せて、團體的威力に依つて敵軍を壓迫しようといふ觀念が現れて來た。即ち一騎打から隊伍戦へ、戦術戦略が年と共に發達變化した。かうした變化は、室町末期の英雄をして從來の陣形を變へ、多數の歩兵を養うて、それに團體的運動の訓練を與へると同時に、武器の使用法を教授せしむるに至つた。兵器の改良は彼等の最も苦心する所であつた。天文十二年八月に小銃が種子嶋に渡來した時、その領主種子嶋時堯が多額の黄金を與へたこと、その使用製造の法を習得する爲めに各國の大名が競つたこと、その青年ならずして全國に分布したことなどを考へると、大名達が如何にして四隣を壓伏して、自分の位地を高め、領土を擴めることに熱心であつたか知られた。信長の如きは在來の慣習を破つて長柄の鎗を造り、また鐵砲の使用法についても研究した。この鎗の發明の爲めに現はれた隊形は鎗隊であり、鐵砲の爲めに現はれた隊形は銃隊であつた。鎗隊は信長から創まつたといふ説もある。銃隊の發生と共に、弓矢は過半その用途を

基本隊形

失つて、たゞ補助的に用ひられるのみとなつた。

基本隊形は、第一線乃至第三線から成つた。第一線は弓隊と銃隊とから成り、先づ敵を攻撃してその士氣を沮喪せしむる任務を帯んだ。第二線は長鎗隊から成り、第一線が破れた時にそれに代つて敵を拒止する任務を帯んだ。第三線は所謂「士鎗」で、短鎗を持つた將校團から成立してゐた。これは敵中に突撃して戰勢を回復するもので、その背後には旗手と輻重とが控へてゐた。大抵の大名は、五十騎を以て士鎗の一隊とし、それを戰術單位として軍團を編制した。大きな軍團に在つては、幾箇かの單位を横に接続し、或はそれを縦に重疊して、主將がそれを率ゐるといふ習慣であつた。しかし戰鬪の状況によつては、多數の小銃を敵前に集合して大銃隊を組織し、準備戰に於いて先づ敵軍を威壓しようとしたこともあつた。銃隊を解散して陣形を改め、側面から敵軍を攻撃する「横鎗」といふこともあつた。また所謂「鎗套」を作つて猛烈なる敵軍の突進を阻止したことも少くなかつた。大銃隊の例は長篠役に於いて、織田信長が武田軍の騎兵攻撃に備へた時用ひた戰術であり、横鎗は姊川役に於いて、徳川家康が朝倉軍に對して用ひた戰術であり、最後に鎗套は川中島の戰鬪に於いて、上杉謙信の先陣が、武田軍に對して施した戰術であつた。これらの戰術は多年の戰亂の爲めに、

鎗套

防禦的武器

自から發明せられたものもあり、また西歐諸國から影響せられたものもあつたであらう。

攻撃用の武器が発達すれば、そこに必ずそれに應じて、防禦用の武器も発達しなければならなかつた。楯はそれまで多く木製であつたが、小銃輸入後その影響を受けて、東國では竹片を列ねた竹束といふものが出来た。また小銃の威力が強大な爲めに、城郭の構造にも變化が起り、脆弱な土壘から堅固な石壁へとその外面が発達したのみならず、壁面に孔を穿つ狭間の形にも變化を來した。

鎗と刀

新しい武器と、多くの訓練せられたる士卒とを得る爲めには、富の力が働かなければならなかつた。鎗は刀に比すれば廉價であつたので、比較的多數の兵卒に、それを給與することが出来た。朝倉敏景の如きは、萬正の太刀一本よりは、百正の鎗百挺の方が有功であると云つたと傳へられる。小銃は最も高價であつたのみならず、それは常に不廉なる火藥と彈丸とを必要としたので、到底多數にこれを供給することが出来なかつた。弘治、元龜の際には、銃隊の員數が三百もあれば、それで敵に對して相當の功果ある威嚇となつたのであつた。また軍隊の員數は、軍記の類には空から雨でも降つて來るやうに、いくらでも人間があつたやうな記述がしてあるが、何萬といふ動

軍隊の員數

員はなか／＼困難であつた。軍記に據れば、今川義元の尾張侵入軍は四萬五千であり、武田信玄の遠江侵入軍は三萬五千であり、徳川家康の長久手出征軍は一萬五千であつたといふが、豊臣秀吉が天下統一の餘勢を以て、國力を渴くして朝鮮に出征せしめた兵數ですらも、二十萬四千五百五十人であつたといふから、分裂時代に於いては五萬十萬といふ大兵を動かすとは殆ど不可能であつたらしく思はれる。江戸時代の初めにでも書かれたものか、著者不明の書に我邦の兵力を論じたものがある。それに依ると、日本の兵數は、國郡の大小に應じてそれ／＼動員數が決つてゐる、假りに一國を四拾萬石宛てとし、十萬石で騎馬二百騎を出し得るとすれば、一國の動員數は合計八百騎である。かうした計算法を取ると六十六箇國の總動員數は、僅かに五萬二千八百騎に過ぎない。それに足輕雜卒を加へたところで、分裂時代の大名の動かし得た兵員の數は大概それと想像することが出来るのであつた。それが爲め、非常の際には、常に扶持してある士分以外に、足輕雜兵を用ひるやうになつたのであつた。つまり傭兵制度の發達も、また武器の進歩、戰術の變化につれて起つた經濟的現象の一つであつたと云ふことが出来る。

社會生活に
與へし影響

十萬石で二
百騎

武器の進歩は、かうした戰術の進歩を來したのみならず、それは一般の社會生活に

も著るしい影響を及ぼして、舊套的な制度は改廢せられ、因襲的な慣習は破壊せられた。かうした社會改造の運動には色々の原因があつたけれど、その主要な原因ともいふべきものは、威力の強い小銃が距離を短縮して、敢死の英雄の個人的勢力が價値を減じたことであらう。室町時代末の小大名が、次第に大大名に併合せられて、終に信長、秀吉といふ英雄の爲めに統一せられるに至つたのは、全く武器の發達の爲めであつた。小銃の渡來は、眞に日本に取つて由々しい事件であつた。

(一)『蒙古襲來繪詞』參照。この「てつばう」については、前々から大分議論があつたが、陸軍中將押上森藏氏の説(國學院大學國史學會講演)によれば、それは燒夷劑の一種であつたに相違ない。『蒙古襲來繪詞』を見ると、黒丸が破裂して、中から黒い煙と紅い火とを噴いてゐる。

(二)鎗は一般に南北朝の頃に出來たと信じられてゐる、即ち建武二年の三井寺合戦の時に用ゐられたのが最古の例であると、『古事類例』などにも書いてある。しかし、石器時代から既に石槍といふものがあつたから、かうした衝刺用のものがその後皆目なかつたとは思はれない。『比古邊衣』には「也利といふ由は、手鋒よりも遠く突遣る義にて、字をも更に鎗と製りたるものなり」とある。室町末期にはこれが非常に發達して、手鎗、長鎗、鉤鎗、鎌鎗、十文字鎗などいふ種類が出來た。十文字鎗は戰國の勇士が好んで用ひた形式であつた。本多平八郎の用ひた鎗は、長さ二丈もある長柄のものであり、信長の用ゐたのは三間半の長さを有

する柄がついてゐた。

(三)『鐵砲記』(『南浦文集』所收)に依ると、小銃の初めて我邦に傳はつたのは、天文十二年であるといふ。これについては史學者の間に一時大分議論が盛んであつたが、一年や二年それが後であり前であつても構はない、要はその渡來の年代が凡そ分れば可いと私は考へる。長沼賢海氏『鐵砲の傳來』(『歴史地理』第二十三卷第六號、第二十四卷第二、四號)、押上森藏氏『長沼賢海君鐵砲傳來論の補説』(同誌、第二十七卷第二號)參照。

(四)『參州長篠戰記』參照。

(五)『江州姉川戰記』參照。

(六)『上杉輝虎注進狀』參照。

(七)『三河物語』參照。

(八)『朝倉敏景十箇條』參照。

(九)『信長公記』卷首。

(一〇)『遠州味方原戰記』

(一一)『尾州長久手戰記』

(一二)伴信友『中外經緯傳』參照。この數字は第九章第一節の『文祿朝鮮役動員計畫表』中の第一軍、第二軍及び水軍の合計である。

(一三)『備前老人物語』參照。

(一四)武器の進歩發達については、工學博士有坂鋸藏氏の『兵器沿革圖説』(『東京帝國大學』

工科大学紀要』第七册第一號)に詳しい解説と圖版とがある。就いて觀られんことをお勧めする。また川住鋸三郎氏の『戰國法沿革の概要』(『歴史地理』第十一卷第一號所載)には戰術の變化についての記述がある、これも参考とする價值がある。

第八節 北條氏の勢圍

小田原の地理

北條の館

函根、足柄の二山が太平洋に迫つて、その裾を白浪に洗はせてゐる小田原には、それらの日に北條氏康が占據してゐた。氏康は長氏の孫であつた。彼れの祖父長氏は、壯年の日に京都から駿河に來て今川義忠に頼つたが、義忠死後、家臣の内訌を調停してその手腕を認められ、新主氏親から三百口の月俸を給せられ、城を八幡に築いてそれに居ることゝなつた。次いで興國寺城に移り、屬領を知行してゐたが、延徳三年に、伊豆の領主足利政知が、その子の茶々丸に殺されたことを聞き、農民を徵發して兵士に仕立て、急に伊豆に討ち入つて茶々丸を殺し、北條の館に旗を立てた。伊豆の農民は駿河軍の侵入と聞いて、老幼を携へて山林に遁れた。そこで長氏は村々に制札を立て、侍でも百姓でも來つて味方につくものは舊領に安堵せしめるが、若し出て來ることを肯ぜぬならば、收穫は沒收し、家屋には放火する旨を揭示した。農民はそれを

見て、皆山林を出で、自分達の家に歸つた。佐藤四郎兵衛といふ侍も、降服するといふ申出をした。長氏のいふには「伊豆の大見郷は、お前の先祖の領地だから、此度お前を其處の地頭にする」。四郎兵衛のことを聞き傳へに聞いて、國中の侍は吾もくと降服し、三十日の間に伊豆一國は悉く裁定した。

長氏の本當の系統は知られないが、始めには伊勢氏を稱してゐた。それが北條氏を稱へるやうになつたのは、關東には北條の勢力が尙ほ残つて居て、それを冒すと萬事都合よく行くからであつた。長氏は從來五公五民であつた年貢を減輕して、六割を民衆の所得としたので、農民は大に喜んで彼れの爲めに死なんとを冀ふものすらあつた。隣國の農民の間には、自分達の國が早く北條の管轄に移れば可いと思ふものが現はれて來た。長氏は頗る心を政治に留め、部下の武士を集めて常に云つた。「國主の爲めには、民は子である。民の爲めには、地頭は親である。親が子を愛しみ、子が親に懐かないで何としよう？ 近年領主の慾心深く、四つもない所を五つと云ひかけて、百姓から年貢を取り立てるのみならず、やれ矢錢だ、やれ棟別錢だと、色々の名目で租税を課して百姓を苦め、しかも自分達は過分の振舞をして、春の花秋の月に浮かれてゐる。之に引き換へ、百姓は藻掻き、苦しみ、煩うて餓死するものがある。わが領地内では

長氏の系統

長氏の施政方針

小田原城陥落

氏綱嗣ぐ

氏康嗣ぐ

所定の年貢の外、一錢たりとも云ひかけしてはならぬ。地頭と百姓とは、水と魚とのやうに和合しなければならぬ」と。それを洩れ聞いて、農民は祝し合ひ、領主の武運の長久を神佛に祈つた。明應四年長氏は相模に侵入して、大森實和の小田原城を陥れ、永正十四年には三浦義同を新井城に攻めて之を滅ぼし、相模一國を悉くその手に收めた。民心は靡然として長氏に歸し、彼れの威名は山東に震つた。間もなく長氏は菑山城に死んだが、その子の氏綱はよく父の志を繼いで政治に勵んだので、農民はまた之にも心服してゐた。彼れは大永四年正月に、豆相二州の兵を率ゐて上杉朝興を江戸城に攻めて捷ち、同六年には里見義弘と鎌倉鶴岡に戦つて勝ち、天文四年には今川氏を援けて武田氏と戦ひ、同六年には上杉朝定と河越に戦つて、河越、松山の二城を抜き、七年には足利義明、里見義堯の聯合軍を鴻臺に邀撃して之を破り、その威名は遠く房總半島にまでも及ぶやうになつた。

氏綱は天文十年に死んで、その子の氏康が後を嗣いだが、これまた父祖に劣らぬ傑で、軍事に於いても、政治上に於いても、非凡なる手腕を發揮した。天文十三年には、上杉憲政、足利晴氏の聯合軍と河越に戦つて之を破り、二十年には憲政を平井城に攻圍し、遂に憲政をして越後に出奔するに至らしめたので、上杉氏の領地たる關

關東公方の
末路

東もまたその勢圈内に入つた。越えて二十三年、氏康は龔に憲政を授けた足利晴氏を古河城に攻めて之を破り、晴氏とその子の藤政、藤氏を相模の秦野に幽閉し、晴氏には末子たる自分の妹の産んだ梅千代玉丸を鎌倉に迎へて元服せしめ、義輝の偏名を請うて諱を義氏と命じた。間もなく氏康は、晴氏の幽閉を解いて、二子と共に關宿城に居らしめたが、晴氏は永祿三年になつて死んだ。實にみじめな一生であつた。關東公方の末路の哀れさを代表するものは、直に晴氏の晩年であつた。その死を傷む妻の耳には、城下を流る、利根川の水音が、亡き夫を吊ふ哀の曲とも聞えた。「なきあとを歎く計りのなみだ川、流れて末の長き瀧つ瀬」は、その時妻の泳んだ六首の歌の一つであつた。氏康から云へば、古河公方を滅ぼしてしまふとは、眞に一舉手一投足の勞であつたが、長らく關東の公方として民衆の尊敬の的となつてゐた足利氏を、さうした無残な手段を以て根絶せしめることは、一般民衆の心を維ぐ上にも都合がよくなく、また公方と關係の深かつた諸大名との間の交渉も圓滿には行かまいといふ老婆心から、出来るだけその勢力を奪つて再起の慮のないやうにし、しかも一縷の命脈を保たせて置いて、人心が自分から離れよとするとするのを防がうとしたのであつた。小田原北條は、長氏以來、民衆の群衆心理を重視し、それを知ることが爲政者の最も大事な務め

の一つであると信じ、少しの不利は忍んでも、民心の歸服懐柔をそこなふやうなことをしなかつた。この一事を見ても北條氏累代の政治理想はほゞそれと窺はれるのであつた。

越後軍の進
出

永祿三年八月龔に出奔した憲政を奉じて、越後の長尾景虎は大兵を關東に進め、上野の沼田、厩橋の二城を抜き、四年三月南下して小田原に逼つた。その勢は贛野を吹きまくる嵐のやうであつた。氏康は部下に命じて出戦を戒め、城に嬰つて敵を倦ましめる計畫を立てた。其時彼れの下した命令の中に、「進むべき時に進むのは勝利を失はない爲め、退くべき時に退くのは、後患を絶つ爲めである。いづれにしても國を治める外に目的はない。先づ籠城の用意をして敵を意想外に出でさせ、馬の足を疲れさせよ、矢種を盡くさせよ。此方から人数を出しては不可い」といふのがあつた。勢鋭く攻め寄せた越後軍は、落ち着き拂つた相模軍の有様を見て張合抜がしたのみならず、懸軍長驅して糧が長きを支へることが出来なかつたので、已むを得ず圍を解いて退いた。氏康はそこで兵を出して敵の後營を焼き、その輜重を奪はしめた。景虎の小田原城攻圍は、かうして全く失敗に終つてしまつた。

氏康と武田
今川二氏

氏康は東方に於いて成功した如く、西方に於いても成功せんとし、今川氏の領地た

駿河にその地歩を占める計畫を持つてゐた。然るに今川義元は夙に西上の志があつたので、甲斐の武田氏と連結して北條氏を牽制し、後顧の憂なからしめようとした。そこで武田氏は甲斐から富士山脈を超えて、箱阪方面若しくは根原方面に出で、北條氏の領地を窺はうとした。天文二十三年に義元が三河に進入した時には、武田氏は兵を駿河に入れて、氏康の駿河侵入軍を刈屋川に撃破し、東國は北條對武田、今川の三角的抗爭の禍亂を以て蔽はれようとした。偶々臨濟寺の僧雲齋兄弟は、三氏の間立つて調停の勞を探り、結婚政略によつて、此の三角抗爭を三角同盟に變形した。即ち一面氏康の嫡子氏政の女を義元の嫡子氏真に嫁せしめ、他面晴信の女を氏政に嫁せしめたので、三氏を姻戚の關係に立つやうにならしめたのであつた。かうして戰爭は一旦収まり、北條氏は主として關東を經略し、今川氏は専ら西上を策し、武田氏は職として力を北方に用ひることになつた。然るに義元が永祿三年桶狭間で戦死して以來、北條氏も武田氏も共に盟約を破つて駿河を蠶食しようとした。氏真は義元には似つかぬ暗愚の性質で、到底これに對抗することが出来なかつた。

氏康が退隠して家督を氏政に譲つたのは、永祿三年十二月であつたけれど、軍國の大事に當ることは依然として變らなかつた。四年九月、上杉輝虎が武田晴信と川中島

三氏の結婚

氏家督を嗣ぐ

景虎と景勝

に對陣した時、氏康は上杉氏牽制の目的を以て兵を松山城に進めて之を抜き、翌七年上杉の奥黨たる里見義弘と鴻臺に戦うてこれを破り、それ以後上總下總の國人は意を北條氏に寄せ、秘かに歎を通ずるものが多かつた。しかし、越後と關東との間に甲斐を隔て、相攻むることは、戰略上から云へば決して上策ではなかつたので、氏康は遂に十二年に至つて輝虎と和し、五男の五郎三郎を人質として越後に送つたが、輝虎は子がない爲めにそれを養子とした。それが後の景虎で、他の養子景勝と家督争ひをする内亂の芽は、此時から萌き始められたのであつた。上杉氏と北條氏とが媾和すれば、武田氏の東面に越え切れない高い障壁が出来るやうなものであり、上杉氏、北條氏から觀れば専ら力を西面に致すことが出来た譯であつた。かうした小康を得たので、氏康は銳意治を圖り、兵力を休養して、他日の大活動に資しようとした。それらの日に、伊豆、相模は勿論、武藏も上野も皆北條氏の命を聽き、里見氏は次第に力を失うて、房

(一)『野史』參照。

(二・三)『北條五代記』卷四參照。

(四)『豆相記』及び『相州兵亂記』卷二參照。

- (五)『相州兵亂記』卷三『義同討死之事』。
- (六)同上、『江戸合戦之事』。
- (七)同上、『義弘合戦之事』。
- (八)同上、『河越城責る事』。
- (九)同上、『小弓義明と合戦の事』及び『國府臺戰記』參照。
- (一〇)同上、卷四『河越之夜軍之事』。
- (一一)『鎌倉九代後記』及び『松隣夜話』上、參照。
- (一二・一三)『相州兵亂記』卷四『公方御他界之事』。
- (一四)同上、『加島合戦之事』。
- (一五)同上、『松山合戦之事』。
- (一六)同上、『高野臺合戦之事』、『北條五代記』卷之三、及び『里見九代記』第一參照。

第九節 小田原と城下町の發達

初代は開拓し、次代は承繼し、三代は成就する。それが一家の興隆に於いて踏まる、道程であつた。長氏の努力開拓したものを、氏綱が承け繼いで支持保存し、氏康がそれを更に發達せしめて完成の域に達せしめたからこそ、關東に北條、小田原といふ代表的の一豪族、一都市が現はれたのであつた。一體北條氏が僅か三代の間に、かうし

北條氏の富

當時の税率

長氏の伊豆侵入

た隆盛を見るに至つたのは、その富が四隣の強國を壓して餘りがあつたからであつた。富は租税の重いところから生れなかつた。富は主として産業から、産業は主として安定から、その各々が因となり果となつて産み出されるのであつた。北條氏は傳説によると、代々租税を軽くしてゐた、民衆を愛撫してゐた。その頃の税率は五公五民——即ち收穫の五割を官に收め、五割を自分で取るのが普通で、ともすれば、六公四民といふやうな重いものも一般に認められてゐた。かうした時に、北條氏は長氏以來みな、四公六民を標準として租税を納めさせ、それ以外には一錢の附加税さへも取り立てなかつた。かうした領主の治下に居る民衆は、安んじて農耕に従事することが出来た。思へば長氏が五百の土兵を率ゐて駿河の清水から船出し、伊豆の松崎、仁科、田子、阿良里の港に着いたのは延徳三年の事であつた。彼等の乗つた十艘の舟が岸に着いた時、農民は海賊が押寄せたと思つて、吾先に山林へ逃げ匿れた。しかし海賊と思つた一集團は、徐々と舟から荷物を陸揚げして、海岸に笹薺の陣屋をかけて、その前に一つの制札を立てた。制札の文句は簡單で、空家に入つて器具へ手をかけてはならぬこと、一錢に當る物は何でも取つてはならぬこと、伊豆國中の武士も土民も、その住所を去つてはならぬことの三箇條であつた。沛公の法三章にも比べられるかうした制札

は、その後次第に數多く在所々に樹てられて、民衆はほつと安心の胸を撫で下した。——かう『北條五代記』は長氏の伊豆侵入について傳へてゐる。それが假作であつても、また傳説であつても、さうした物語の起つて來る所に、北條氏の政治方針を窺ひ得る材料があるのであつた。いくら亂世であつたとは云へ、長氏のやうな電氣的成功は決して容易に收めるとの出來ないものであつた。しかもさうした手柄を彼れがなし遂けたといふとは、彼れの手腕の尋常一様でなく、民心を收攬することに於いて無比の能力を持つてゐたのを證明するものであつた。

小田原は長氏がそこに占據するまで、海邊の小漁村に過ぎない場所であつた。然るに彼れがそこに城を構へてから、網干と千鳥とで名所になりさうであつた場所は、一轉して家屋櫛比する繁昌の都市となつた。室町時代の中頃から、都市は各地に發達しつ、あつた。それまでの都市は多くは宗教的原因によつて出來たもので、社寺を中心として集つて來る民衆の集團に過ぎないのであつた。それらの所謂「門前町」から「城下町」へ、室町末期には都市が變形しつ、ある最中であつた。小田原もまた城下町として現はれ、城下町として發達して、室町時代には、我邦でも有數の大都市となつたのであつた。小田原の都市としての發達は、實に室町時代末の最も重要な一つの出來事であつた。

小田原の發達

つた。

經濟生活

それらの日に於ける經濟生活の基調は云ふまでもなく農業であつた。農業は耕すべき田畑を要した。田畑に缺けてゐる場所では、農民はその生活を營むことが出來なかつた。門前町から城下町へ、都市が次第に各所に發達して來ると、そこには食物、衣服その他生活に必要な物資並びに材料を生産するものがなかつた。しかも農民は米穀その他の原料を生産するだけで、兵器を初め、日用の器具、家屋、衣服などをそれから作ることが出來なかつた。また武士は戰術が進歩し、兵器が複雑になつた爲め、その練習に多くの時間を割かねばならなかつた。勿論彼等は耕耘や工作に従事する暇がなかつた。即ちこゝに一つの武士階級といふ生活形式が現出した。それら多數の生産者が城下町に收容せられることになつて、そこにはそれらの人々に食物や衣服を供給する人々の必要を生じたが、その人々はこれらの原料を武士階級の要求する通りのものに細工することが出來ないので、また別にさうする人々をも必要とした。こゝに於いて商人階級と工人階級とが現はれた。

商業の發達

商業は餘程古い前から發生したが、大きな貿易業者などは別として、初めの間は多くは半商半工の状態にあつた——自分達の家で造つたものを自分達で賣るといふやう

職業の分立

な立場にあつた。職人だけでは食つて行けず、さりとて商賣だけでも口過ぎが出来ないといふ有様であつた。ところが漸々都市が発達して、人口の増加に伴れ、物資の需要が多くなると、商人も工人も二つながら定住して分業的にその業務を営むことが出来た。奈良時代の昔からあつた「市」が、鎌倉時代に「座」に變形し、更に「店」に變形した時には、商人は最早や獨立して營業することが出来た。同時に工人もまた細工ばかりで口を糊することが出来た。室町時代の中葉以後、都市が地方に發達しかけた頃は、最早やかうした分業が立派に行はれて居たらしかつた。

首府であつた京都は、都市として代表的のものであつた。そこには昔から職業の分立が行はれてゐた。職業の分立は、日本民族から云へば、極めて古いことで、かの氏族制度の如きは一面世襲官位であると同時に、他面世襲職業なのであつた。かうした固有の世襲的分業は、ずっと後世までその痕跡を留めて、宮廷の臣僚たる諸家の家業は一定してゐた。しかし、それらは形式と儀典とを重んずる朝廷のとであつたから、さうした現象の起るのが無理ではなかつたとして、何等傳統の脅威もなく、また因襲の剛致もない民衆の間にも、室町時代には早や世襲的な——少くとも固定的な職業の分立があり、その製作と取引とが京都に於ける自給經濟の缺陷を補つてゐた。『七十一

室町時代の民衆の職業

性別

職業別

番歌合』は室町時代の職人盡で、文安、寶徳の頃の民衆生活の状態を、それらがありし儘さながらに私達に語るものであつた。その内容は、二つの類似した職業を一組とし、それらを月と戀とに結びつけて詠んだ歌合で、七十一組百四十二種の職業が繪と歌によつて現はされてゐる。今、それらを性によつて分類して見ると、

性	數	性	數
男	八五	女	三四
中	二二三	合	一四二
性(法體)		計	

の如き割合であつた。その中婦人は、商業殊に衣食に關する品物を賣り販ぐものが多かつた。またそれを職業によつて分類して見ると次のやうであつた。

職業	數	職業	數
工業	五三	宗教	一四
商業	四一	農業	一一
藝人	一六	雜業	七

僧侶文化と
職工保護

この分類は必ずしも正確なものではないが、大體の色彩を示すことは出来た。農業の中には鹽焼、柚なども入れて置いたが、その数の少いのは京都が中心であつたか

らである。これらを観ても

商工業が都市に發達しつ、

あつたことが知られる。

これらの職業の中、工作

に關するものは、プロフェシ

ナルな技巧を要したので、

それが今要ると云つても、

直ぐにそれを供給すること

は出来なかつた。それ故、

建築、彫刻、繪畫などに關

する業務に携はつてゐるも

つた。平安時代の末から室町

時代の初に至る間の、僧侶文化が時代を支配してゐた頃には、それらの職工は京都と

さくら



〔合歌番一十七〕賣魚

のは、比較的早い時代から専門的に發達してゐたのであつた。平安時代の末から室町時代の初に至る間の、僧侶文化が時代を支配してゐた頃には、それらの職工は京都と

城下町

か、奈良とか、鎌倉とか、大きな寺院群のある町に占據してその生活を支へてゐた。それらの日に於ける寺院は、廣大な寺領を有し、且つ守護不入といふ特權を持つた、一個の小さい獨立國のやうなものであつた。それ故、その富は十分にそれらの職工群を保護して、その生活を支持することが出来た。京大工、奈良大工、鎌倉大工などの

稱呼は、かうした日に何時とな

く出来た普通名詞であつた。

室町末期から門前町は衰へて

城下町は次第に發達しつ、あつ

た。相模の鎌倉は關東に於ける

政治の中心であつたが、その半

面は矢張り、鶴岡八幡宮、五山と

いふ大きな宗教的魔力を持つた

門前町の性質を持つてゐた。小田原は全く獨立した城下町で、そこには善政が行はれ

て、生活の安定が保障せられてゐるといふ噂が立つと、近國は勿論遠國からも、多數の

民衆が移住して來た。商業に従事する町人も、工作に従事する職人も、西國や北國か



〔合歌番一十七〕賣餅

第三章 第九節 小田原と城下町の發達

ら遙々と訪ねて来た。特に天文年間に鶴岡八幡宮の造營があつた時には、京、奈良あたりから多数の建築、彫刻、繪畫にたづさはる工人が寄つて来た。それらの日には工人は缺乏してゐて、容易にそれを集めることが出来ず、大建築、大土木の工事が始まると、諸處方々からそれらの人々を驅り集めねばならなかつた。小田原のやうな有数の大都市であつても、その悉くをそれ自身で供給することが出来なかつたものと見える。工事の進行は區劃式であつた。例へば鶴岡上宮の廻廊の工事は、鎌倉番匠、奈良番匠、玉繩番匠、伊豆番匠が、四つの團體に分れて、その部分を擔當し、各部分には二人乃至は三人の奉行が置かれてあつた。これら職工の員數は、場合によつて異つたらうけれど、各部體は十人一團、合計四十人で、番を定めて作業に従事した。これら大工の外に、屋根を葺くべき檜皮師、金具を製造し且つその取附けをなすべき鍛冶、瓦を焼くべき瓦師、金銀細工に従事する筋師、石材を磨いたり切つたりする石工、壁を塗り彩色を加ふべき白壁師、部、縁などを塗る塗師、土石木材などを運ぶべき人夫、炭を焼くべき人夫、木を切るべき大鋸引など一々計へ上げることの出来ないほど多数の人員を要した。しかも、これらの中最も技巧を要する塗師の七郎左衛門尉の如きは、久しき以前に奈良から小田原に移住して、氏綱の保護を受けてゐたものであつた。ま

建築に要する職工

商業都市として的小田原



〔合歌番一十七〕鍛冶と大工

て修繕工事に従事した
 神恩を報謝する改め、
 用途六百匹を寄進して
 その利子を常夜燈の資
 に充てるやうに申し出
 たほどに、工人はすべ
 て眞摯に、熱心に、工
 事に従事した故に、そ
 れらの日の建築にはど
 ことなく力が籠つて、
 見るものに靈魂の顫動

たこの造營工事の終らぬ中に、暇を取つて歸國した奈良大工二人の中、一人は途中で何者かに殺されたのを神罰と思つたほどに、また奈良大工與次郎が三箇年間鎌倉に在つ

を感じしめるのであつた。

かうした自給經濟の缺陷を持つた職人達が、小田原の町に集まつて来たことは、同



『合歌番一十七』師皮槍と師壁白

時にそれらの人々の需用を充たすべき人々の集まつて来たことの傍證でもあつた。かうして東は一色から板橋に至るまで、彼は一里の間には棚を張つて物を賣るものが充満し、山林の産物、河海の産物、琴棋書畫を始め人工になつた日用品に至るまで求められないものはないほどであつた。異國情調に富んだ舶來品、曾て見聞しなかつた器具の類も夥しく積累ねてあつた。交易、賣買は頗る活潑で、その利益は京都の四條五條の辻にも優つた。この一事でも市民が如何に富裕であつたかが知られる。北條氏は小泉某を町奉行に任命したが、正邪を見分くる眼光鋭く、賞罰が嚴重であつたので、市民はよく服

小田原市民の富力

都市形式

して争訟が少なかつた。京都から移住した外郎といふ町人は、透順香を始め様々の藥品を賣つたが、靈藥の評判が立つてよく賣れた。小田原の市民が富んでゐたことは、天正十八年、豊臣秀吉が小田原を攻圍した時、容易に一年間の糧食を準備することの出来たのを見てもそれと窺はれた。その時、松原明神の前の通十町ほどは、毎日市を立て、七座の棚を構へ、また振賣る者もあつて非常に賑ひ、百の賣物に千の買物といふ有様であつた。それで氏政は高札を立て、たゞ一年間だけ支度を整へ、その餘りは悉く市に出して賣れといふ命令を出したので、城中城外は食糧の不足を感じるやうなことがなかつた。その時の町々の賑やかさはまるで戦場の如く、市民が上を下への大騒動をしてゐる間にも、京田舎の遊女は小屋を道端にかけて 秋波を路ゆく武士町人に送つたと書き記されてゐる。かうした傳説は必ずしも全くの假構ではなく、殆ど事實に近いものであつたらうと想像せられる。

それらの日に於ける小田原の都市としての形式については、これを徵すべき史料が備はつてゐないけれど、恐らく長さや廣さを持つた碁盤目式のものではなくて、長さだけを持つた兩側町式のものに近かつたらうと思はれる。しかし領主の居城は勿論、それを周匝して建てられた武士の邸宅には、立派な結構を持つてゐたものが多かつた

宗牧の東遊

に相違ない。北條邸の庭園の壯麗であつたことは、同時代の文學者の記述によつてそれを知らることが出来た。

天文十三年九月二十日あまりに京都を立つて、東國遊歴の途に就いた連歌師宗牧は、翌年二月二十四日、熱海から小田原の町に入つて北條氏康の客となつた。風呂は用意せられ、夕饗は手厚く饗せられた。彼れは氏康に撈揆をした後、ほろ酔機嫌で長老館の夜櫻を賞して、「庭やゆき雲をのきばの山櫻」と發句した。氏康を周匝してゐる豪傑の中には、小笠原播磨守、伊勢備中守、大和兵部少輔などいふ京下りの武士がゐて、弓矢取る道の外に風流韻事をも辨へて居り、従つて氏康もそのかされて和歌を好むやうになつた。伊勢備中は宗牧と知己であつたから、共に都の花を思ひ出して、「忘れれば衣もみやこの恨み哉」の句に人知れぬ涙を泛べた。翌日は氏康の館に招かれて、咲き盛る山櫻の花、美しく鳴く籠の鳥の聲、雨にまがふ笈の水の音などに、耳目を娛ましめて、宗牧は「花の色も鳥の音惜む夕べ哉」と吟んだ。その翌廿五日は、京都では北野に神事のある日であつた。宗牧は「今日こそは、一日千句萬代不休の吉日で、御稽古の始めには最も適はしうございます」など云つて館を退いた。夜すがら降つた雨にうたゝ旅情の寂しみを感じた彼れは、朝まだきに起き出て見たら、箱根の山脈は雪に

北條氏の邸宅

蔽はれてゐた。「箱根山かすみこめたる明方の春におどろく峰の白雪」といふ一首は、彼れが其時詠んだのであつた。二十六日は後山に登つて、踏みわける竹の枯葉の間から、遠き上總の浦々、近き鎌倉の松林を眺めて夢心地になり、氏康に暇乞を告げるともう一日と所望されて、二十七日には三度目の一座を開いて、華々しい宴に移り、その曉宿醉の夢から醒めると直ぐ、種々の贈り物を受けて曾我から大磯に向つた。——かう宗牧は『東國紀行』に記してゐる。四日の小田原滞在は、眞に彼れに取つて無限の興趣と満足とを與へた。さほどに當時の小田原は、人間の富と自然の美とに祝福されてゐた。かうした一連歌師の貧弱な紀行にも、富の都市小田原と、人格の人氏康とが活躍してゐた。『東國紀行』は小田原の富を私達に語る重要な史料の一つであつた。

(一)『北條五代記』卷七『伊勢新九郎伊豆相模を治る事』。

(二)『諸家々業記』参照。

(三)『七十一番歌合』に擧げられてゐる職業を、職業別によつて左に列挙して見る。

番匠 (大工)、鍛冶、壁塗、槍皮師、磨師、塗師、槍物師、車造、紺掻、機織、筆結、
 總輪師、鏡細工師、足駄造、佛師、經師、鳥帽子折、念珠ひき、玉すり、硯切、葛籠
 造、弓造、土器造、紙漉、采すり、傘張、縫物師(刺繡師)、組師、刷師(形置)、唐紙
 師、御簾編、蒔繪師、貝すり、繪師、冠師、杓造、鞠造、銀細工、箔打、針すり、鏡

研、櫛引、疊刺、瓦焼、笄縫、鞍細工、鞘卷切、皮籠造、矢細工、籠細工、行麩造、墓目造、庖丁師(五十三種)。

鍋賣、酒造、餅賣、扇賣、帯賣、白粉賣、魚賣、絃賣、一ぶく一錢(煎茶賣)、油賣、席賣、馬買はう、革買はう、ひきれ賣(漆器賣)、紅とき、米賣、豆賣、豆腐賣、素麩賣、麩賣、いたか(塔婆賣)、蛤賣、饅頭賣、法論味噌賣、草履賣、ゆほう簪賣、燈心賣、すあひ(仲買)、疊紙賣、白布賣、綿賣、焚物賣(香賣)、煎じ物賣、心太賣、藏まはり、枕賣、烏賣、直垂賣、苧賣、藥賣、醋造(四十一種)。

藝人 琵琶法師、女盲、立君、辻君、白拍子、暮露、くせ舞、放下、鉢叩き、猿樂、田樂、競馬組、相撲取、早歌うたひ、樂人、舞人(十六種)。

宗教 禪宗、律家、念佛宗、法花宗、山法師、奈良法師、華嚴宗、俱舍宗、ちしや(呪)、巫、比丘尼、尼衆、山伏、禰宜(十四種)。

農業 大原女、炭焼、山人、浦人(漁師)、木こり、草かり、鹽賣、一文字賣、筏士、金掘、水銀掘(十一種)。

雜業(連歌師、藥師、陰陽師、穢多、通事、文者、弓取(七種))。

(四一六)『快元僧都記』、天文三年八月廿一日、天文四年正月五日及び同月十一日の條參照。

(七)同上、天文三年二月十八日の條。

(八)同上、一日及び五日の條參照。

(九)同上、二月五日、十五日の條參照。

(一〇)同上、閏正月、鍛冶岡安の條參照。

(一一)同上、二月十六日の條參照。

(一二)同上、四月二日の條參照。

(一三)同上、三月。——「石切等被召上」。

(一四)同上、七月九日の條參照。

(一五)同上、天文四年三月十五日の條參照。

(一六)同上、天文三年七月の條參照。

(一七)同上、天文四年三月十六日の條參照。

(一八)同上、三年六月八日の條參照。

(一九)同上、四年三月十四日。——「今日奈良塗師七郎左衛門尉。小田原ニ住居久而。屋形

恩願事亦年久者(下略)」。

(二〇)同上、三年八月八日の條參照。

(二一)同上、四年二月十一日の條參照。

(二二)『相州兵亂記』卷三『外郎事』參照。

(二三)『北條五代記』卷十『小田原籠城の事』參照。

(二四)碁盤目式の市街は、始めから一定の計畫の下に造られた都市でなければ、それを保持つてゐない。京都はその適例であつた。室町時代末にかうした町があつたかつかつたかは分らぬが、天正十三年の頃建設された近江の八幡は、古圖に依ると、碁盤目式の町である。

れについては粟田元次氏『城下都市としての江州八幡町』(『歴史地理』第三十七卷第一號所收)といふ研究がある。

(二五) 兩側町は交通の發達に伴うて、自然に發達したもので、最初から一定の計畫を立て、出來たものではない。所謂「宿場」などは、かうした自然的發達の都市の性質を現はしてゐるものと見ることが出来る。

(二六) 宗牧『東國紀行』參照。

(二七) 同上、天文十四年二月二十四日、二十五日、二十六日、二十七日及び二十八日の條參照。

第十節 群雄の利己的外交政策

今川義元の戦死した後、徳川家康は織田氏と同盟してその東面を經營し、年は一年より今川氏の領土を侵し、永祿八年には三河の全部を手に入れ、十一年には武田晴信と約して、大井河を兩氏勢圍の分界線とする誓書を取りかはしたが、晴信に背信的行爲があつたので、家康は深くその心事を疑ふやうになつた。その年の暮、雪深くして越後軍の南下することの出來ない時、晴信は駿河に出で、興津を侵したが、府中には内應者さへ現はれたので、今川氏眞は自ら心に安んずること能はず、免れて遠江の掛

武田氏と今川氏と北條氏

川城に入り、使を上杉輝虎に遣はしてその援を請うた。氏眞は氏康に取つて孫娘の掣であるから、遂にこれを救うて晴信に當ることとし、同時に使者を出して輝虎と媾和を議せしめ、永祿十二年正月には、兵を駿河に出して薩陀山に陣し、興津、久能に據つてゐる晴信の軍に對した。然るに家康は晴信が約に背いて大井川以西をも併呑しようとするのを見て、之と絶つと同時にその敵たる輝虎と聯合すべき決心をなし、遂に駿河の府中を攻めて甲斐軍を逐うた。輝虎もまた家康、氏眞の請を容れ、信濃に入つて背後から晴信を脅かしたので、晴信は已むなく山を越えて甲斐に歸つた。そこで氏康は孫の氏直を氏眞の養子として、名實共に駿河をわが手に入れようとし、氏眞は遠江を家康に譲つて沼津城に入り、北條氏の援護下に僅かに社稷を保つてゐた。

永祿十二年六月、晴信は再び兵を率ゐて駿河に進出し、北條氏に對して復讐戦を試みようとしたので、氏康は輝虎に援助を請ふ旨の書面を送つた。まだ目覺ましい戦の開かれぬ前、晴信は一旦甲斐に引還したが、八月に至つて兵を二軍に分ち、一は西部上野から、他は郡内から、共に武藏に入つて酒匂に出で、小田原に迫らうとした。氏康は敵を倦ましめる積りで、例の如く籠城して出て來なかつたが、鉢形城の北條氏邦と、八王子城の北條氏照とが、甲斐軍をその根據地から離さうとしたので、晴信は三

晴信駿河に入る

輝虎上野に
進出す

増峠を越えて本國に退いた。^(五)しかし、この舉は北條氏の根據地を衝いて、自分の駿河侵略を妨げしめない目的であつたから、その十一月には精兵を發して駿東郡に分布してゐる北條氏の屬城を攻め、遂に北條綱重の守つてゐる蒲原城に迫つた。^(六)しかも氏康は出で、之を援くる力なく、頻りに援を輝虎に請うたので、輝虎は十一月上野の沼田に進出した。氏康は非常に喜んで、その子の氏秀を厩橋城に送つて輝虎に面せしめたが、輝虎はそれを養うて嗣子とした。元龜元年九月には、晴信の軍は駿河を席卷して伊豆に入り、韮山城を圍んだ。氏康は子の氏政をして三島に出で、之に對峙せしめたが、これより前輝虎が上野から信濃に進出したので、晴信は氏政と交戦するに至らずして背進した。^(七)その翌十月、氏康は小田原に病死したので、北條氏は深く喪を秘してゐたが、晴信はその間に武藏に入り、輝虎の出動したことを聞いて甲斐に引返し、二年正月また駿河に進出したので、輝虎は二月に義子顯景を沼田城に遣はして援を請うた氏政に酬いた。晴信はそこで常陸の佐竹義重と通じて小田氏治の守れる上杉の屬城を攻め、上杉軍が信濃に侵入する暇なきに乘じ、遠江に進出して徳川の屬城を攻め取らうとした。それ故輝虎が出動すると、晴信は直ぐ兵を率ゐて本國に還つた。しかし、間もなくその計畫は實行せられて、甲斐軍は遠江、三河に現はれて威嚇運動を開始した。

北條氏武田
氏の鏖和

晴信北條氏
を控制す

晴信の恐る、所は織田、徳川の二氏ではなかつた。彼れは背後から北條氏が自分を脅かすのを一番怖れてゐた。また氏政は輝虎が思ふ儘の援助を與へることが出来ず、常に晴信の爲めに悩まされてゐるので、形勢を轉回して現在の苦境から脱しようとした。この二つの希望はびつたりと合つて、武田と北條との間には媾和條約が成立し、元龜三年正月氏政はその弟氏忠、氏堯を人質として甲斐に遣はし、甲斐軍は西上野以外を侵さぬといふ約束を結んだ。^(八)北條が武田と結べば、自然上杉とは敵にならねばならなかつた。ところがその頃、晴信には輝虎と和する意向があつたので、氏政は晴信を誘うて輝虎を討たうとしたら、晴信はそれに従うて兵を西上野に出した。氏政はこの行動を見て晴信を信じてしまつた。これより先き、晴信は西上の意を懐いて居り、若しその虚に北條の侵略を受けるやうなことがあつてはならぬと、北條氏の背後に控へてゐる安房の里見氏、常陸の佐竹氏と聯合して、北條氏を控制しようとした。一方晴信は年來の敵たる上杉に備へる必要があつたので、本願寺一揆と結んで上杉の屬城を攻めしめようとし、自分の西上は織田信長を攻めて、その本願寺迫害を妨げようとする目的であると告げ、遂に計畫の通りに加越能三國の一揆をして上杉に對抗する約を結ばしめた。これで晴信の背面の敵は手も足も出さうにはない、残る所は前面の敵、徳川、

晴信義昭に
結ぶ

織田の二氏があるばかりであつた。

そこで晴信は京畿の豪傑に結合する必要が起つた。手始めに彼れの手に觸れたのは將軍足利義昭であつた。義昭は信長によつて將軍の顯位を手に入れたけれど、政治上の實權を握ることが出来なかつたので、信長を斥けて之に代るべき英雄を求めようとしてゐた。晴信はそれを偵知して、元龜元年には駿河で萬正と五千正との地を選び、前者を義昭に、後者をその侍臣一色式部に贈つて忠誠の心を示し、これに依つて結託の計畫を實行することが出来た。一度義昭と結託すれば、義昭の與黨である淺井、朝倉二氏との間の問題は、容易く圓滿に解決することが出来た。第二に晴信の手に觸れたのは大和志貴城の松永久秀であつた。晴信は書を久秀に致し、久秀もまた屢、書を晴信に送つて、信長を排斥する共同運動を起さうとした。第三に晴信の手に觸れたのは比叡山及び園城寺の僧徒であつた。彼れは信長に迫害せられて四散した山門の僧徒を保護して、天台宗を甲斐の地に隆興せしめようとしたのみならず、また園城寺の僧徒にも結んで、有識のものを甲斐に送らんことを請うた。これらは皆西上の際に、表面裏面から援助を受ける爲めであつた。

家康と晴信
との抗争松永久秀
比叡山と園
城寺

信長は永祿八年の暮に、晴信の女を長子信忠の爲めに迎へる約束をして、それとの

衝突を避けようとしたが、家康は晴信が駿遠分割の條約を履行しないので、輝虎に結んで信立に對抗することになつたから、家康と同盟してゐる信長は、勢ひ武田氏と絶縁せねばならぬ破目に陥つた。信長は晴信を恐れてゐた故に、元龜二年甲斐軍の三河に入つた時には、家康に濱松を撤退して岡崎城に入ること勸告したのであつたが、家康がそれに従はなかつたので、輝虎と結んで晴信を背後から脅威せしめようとし、輝虎も亦その請を容れて晴信を前後から挾撃しようとした。

晴信の西上
準備

晴信のマキャベリイ式外交は成功して、その西上準備は全く成つた。そこで元龜三年十月、甲斐信濃二國の兵二萬を率ゐて甲府を發し、信濃の伊奈から秋葉路の嶮を冒して遠江に出た。北條氏政は兵二千を出してこれを援け、部將山縣昌景は別に兵五千を率ゐて東部三河から遠江になだれ込んだ。本隊と別隊とは三方原で握手する手筈であつた。晴信は書を淺井朝倉の二氏に送つて、信長が援兵を出動することを妨害せしめた。家康は信長と輝虎とに急を告げて、その援助を要求した。信長は佐久間信盛等をして精兵三千を率ゐて援助せしめた。同年十二月二十二日、家康は約八千の兵を率ゐて三方原に出で、犀ヶ窪の北方にその陣を張つた。武田軍は洪水の如くに原頭に溢れ、そこで徳川軍と衝突した。織田の援軍、續いて徳川の本軍も破れて、家康は命からが

三方原の役

晴信戦死

ら濱松城に逃げ入つたが、晴信はそれを追求せずして西方に向ひ、刑部に陣營を張つて年を越した。^(二四) 豊くれば天正元年正月、晴信は野田城を攻圍してその糧道を絶つたが、僅々四百に満たぬ城兵はよく防ぎよく守つて大敵に抗し、援兵の出動を家康に請うた。家康は一面遽かに兵を發してこれを援け、他面信長に使者を送つて來援を求め、また輝虎に信濃から晴信を牽制せんことを求めた。けれども、信長も直ぐ出發する譯に行かず、輝虎は越中地方の擾亂の爲めに、その兵を信濃に送るとが出来なかつた。晴信の計畫は悉く實現せられて、彼れの西上は容易に成功しようとした。俄然！病氣は彼れを襲つて、彼れは甲府に歸る途中、信濃の駒場で死んでしまつた。一個の大きな英雄の死は、千百人の凡人の死にまさつて、その影響が偉大であつた。信長の中原裁定も、家康の東國占據も、氏政の關東領有も、みな彼れの一つの死の齎した多數の結果であつた。喪を祕せられた彼れの屍は、三年の後惠林寺に葬られた。それは天正四年四月十六日であつた。越後の輝虎は彼れの死を傳へ聞いて、「好敵手を失つた」と云つて歎いたといふことが語り傳へられる。信長もまた浩歎して、「實に良將であつたに、惜いことをした」と云つたと云ひ傳へられてゐる。彼れの死は武田氏に取つては、辨償の出來ない損害であつたけれど、然し、分裂から統一へ時代が進むのには、寧ろ利益であつた

かも知れないほどに重大であつた。

(一)『當代記』卷一參照。

(二・三)『北條五代記』卷之三『應永より慶長關東合戦の次第の事』。

(四・五)『關八州古戦録』卷之八『甲州勢小田原亂入付相州三増峠合戦事』參照。

(六)『北條五代記』卷之三參照。

(七)『當代記』卷一參照。

(八)『關八州古戦録』卷之九『北條氏康逝去付甲相家一和の事』參照。

(九)武田晴信の外交政策については、渡邊文學博士の『安土桃山時代史』、『大日本時代史』所收)一〇五—一三〇頁に記述がある。簡單でしかも要領を得てゐる。

(一〇)武田晴信が、淺井朝倉と結合した當時の状況は、兩氏に送つた元龜三年十月朔日の書簡で知られる。

如_レ露_ニ先書_ニ。今朔日既打立候。彌其表被_レ得_ニ勝利_一候様。義景被_レ遂_ニ談合_一。無_ニ油斷_一。行肝要候。猶陣中より可_レ申候。恐々謹言。

十月朔日

淺井備前守殿

信

立

於_ニ越中_一。賀州衆輝虎對陣。此表出陣遅々意外候。一昨日三州衆先衆被_レ遣候。信立看今朝日打立候。可_ニ御心易_一候。畢竟其表堅固御備肝要候。恐々謹言。

十月朔日

信 玄

謹上朝倉左衛督殿

(一一)此の間の消息は『慶元古文書』所收、上杉に宛て、送つた家康の起請文を見れば分る。

敬白 起請文

右今度悉拙心腹之通。以ニ權現堂ニ申届候處、御咄啄本望候事。

一信玄え手切、家康深存詰候間、少も表裏打抜相違義有間敷事。

一信長輝虎御入魂候様に涯分可令ニ異見候。甲尾談候儀も事切候様に令ニ諷諫候事。若此分於レ偽者(中略)

十月八日

家 康 (花押)

上 棧 殿

(一二)註(一〇)の二通が即ち此の時の書簡である。十月は元龜三年である。

(一三)『信長公記』卷六、元龜三年霜月下旬の條。

(一四)『當代記』卷一、元龜三年十二月の條、及び『遠州味方原戰記』參照。

(一五)『七佛會安骨式錄』參照。

將軍と信長との不和

第十一節 將軍政治の解體

流寓の身が一躍して將軍となつた時には、義昭は信長を父とも思ひ、恩人とも思つ

て、出来るだけ自己を謙抑してゐたが、將軍の地位は名ばかりであつて、何等の實權を伴つてゐないことを知るに及んで、義昭の胸の底には信長を忌憚する心が湧いて來た。信長もまた自己を犠牲にしてまでも、將軍をおし戴いて置かねばならぬ理由を認めなかつた。信長から観れば義昭は一個の偶像に過ぎなかつた、その存在と否とは、天下の形勢に大した影響がなかつた。自分の威力が近畿を掩ふやうになつたのを見た信長は、最早や將軍などいふ偶像を据ゑて置く必要を感じなかつた。かうした感情が双方にあれば、その間は決して圓滿に行く筈はなかつた。實力は更になく、たゞ虚位のみを擁してゐた義昭は、遂に信長を排斥する計畫を立てたので、元龜三年に信長は十七箇條から成る諫書を呈出して義昭の反省を求めたが、一たび穿たれた溝は短時日の間に容易に埋められるものではない。義昭は益々信長を忌み嫌つて、天正元年二月遂にこれを討伐する志を起し、近江甲賀の士を誘うて兵を擧げ、堅田、石山に壘を築いて信長の來攻に備へしめた。信長は二月二十日、柴田勝家、明智光秀等を遣はして之を攻めしめ、石山は二十六日に、堅田は二十九日に陥落した。この反覆常なき義昭の行動は、いくら利己主義の時代であつても、尙ほ人々の嘲笑の種とならざるを得なかつた。京童の「かぞいろもやしなひ立てし甲斐もなく、いたくも花を雨のうつつ音」とい

義昭信長を
孤立せしめ
んとす

ふ落首は、京都の市民の義昭に對するその時の感想であつた。恰どこの時美濃には戦争があり、淺井朝倉の二氏が軍の行動を開始し、三好松永の徒もまた京都に進入しようとする形跡があつたので、信長は義昭を追及することが出来なかつた。その間に義昭は縦横の策を用ひて信長を孤立せしめる計畫を立て、諸國の豪族に書を送つて自分を援け信長に背かしめようとした。これより先き正月に武田晴信に書を送つて、信長家康と媾和することを勧めたが、三月廿日に至つて、上杉輝虎に本願寺一揆及び甲斐軍と媾和して、一日も早く西上して信長を排斥せんことを慫慂したのみならず、信長と同盟してゐた三河の徳川家康及び水野信元五に對してすら、武田氏と和して信長を夾撃せしめようとした。他方、西方諸國の大名にも書を與へて、將軍を援けて信長を斥くる運動を起すやうに勧めた。淺井、朝倉の二氏は勿論義昭の與黨であつた。曾ては相敵視した松永久秀すらもその仲間に加はつた。その頃、輝虎は一向一揆の鎮撫に忙がしかつたので容易に兵を動かすことが出来なかつたが、晴信は既に元龜三年十月に兵を出して西上の途中に在つた。

三月になつて美濃の戦争が一段落を告げたので、信長はその廿九日に岐阜を發して京都に入り、洛外に放火して義昭を威嚇した。義昭は甲越から援軍が來ず、その他の

信長義昭を
破る

將軍政治の
崩潰

地方でも舉兵するものがないので、使を信長に遣はして和を請うた。信長は誓書を交換して四月退京し、歸途近江の鯉江城に佐々木義賢を攻めてこれを降し、義昭の再舉に備へる爲め船艦を佐和山で造つて琵琶湖に泛べしめた。ところが七月になつて、義昭は兵三千を募つて宇治横島横島のしよに據り、日野輝資らをして二千人を率ゐて二條城に居らしめ、信長の宇治に向ふところを側面から攻撃せしめようとした。急報に接して信長は佐和山から船で坂本に渡り、七日京都に入つて二條城を攻め、十六日には横島を攻めて之を陥れた。義昭は普賢寺に竄入して髪を剃り、昌山道休といふ法體姿になつて信長の憐みを請うた。信長は木下秀吉に命じて義昭を河内の若江に追放せしめたが、次いで紀伊に入り、播磨から備後に入つて毛利氏の保護を請ふに至つた。これで足利政府は倒れ、將軍政治は全く解體してしまつた。實にあつけない最後であつた。そこには悲哀もなく、悲壯もなく、むしろ滑稽があつたばかりであつた。願れば尊氏が創業してから、代は十五代、年は二百三十年を累ねたけれども、その間殆ど全く靜謐な時はなく、戦争と擾亂とが相踵いで起つて、民衆は不安と不足との生活を生活した。かうした政府はいつ倒れてもよかつた、しかし倒れるべくしてそれは容易に倒れなかつた。それが容易に倒れなかつたのには、色々の理由があつたけれど、さうした禍亂を裁定

して、分裂の時代を統一時代に回轉せしむる偉人のゐなかつたことがその理由の大きなもの、一つであつた。多數の野心家は統一の大業を自分の手で試みようとして失敗した。さうした企ては何度も、此處彼處で起つた、しかしいづれも失敗した、そして遂にその順番が信長に廻つて來た。

信長は天正元年八月、京都が鎮定した後一旦岐阜に歸つたが、八月十日になつて再び兵を率ゐて北部近江に出で、武田氏と同盟して自分に對抗してゐる淺井朝倉兩氏の討伐に取り掛つた。この時信長の恐れてゐた晴信は既に死んでしまつてゐたから、信長は毫も後方を顧慮する虞へがなく、銳を盡して敵地に入ることが出來た。朝倉義景は敦賀を發して織田軍と木ノ本附近で衝突したが、全軍無慘な敗北をして十三日に一乗谷へ逃歸つた。織田軍はそれを追撃して越前に入り、義景は東走して大野郡賢正寺に通れたが、同族の景鏡が自殺を迫り、その首を携へて降服を申し出た。これで朝倉氏は滅んでしまつた。

鳥居兵庫の
殉死

そこに朝倉の滅亡を飾るのに適はしい悲しい一齣の哀話があつた。老臣鳥居兵庫は義景が自殺するまでその傍に侍して居り、やがて切腹して節に殉じたが、その子に與七といふものがあつた。それが刀根坂の戦で討死したといふ報のあつた時、母親は「主

君のお情が深かつたから、下が下まで御用に立たうとして、命を輕んずるのは道理のあること。取り別け與七は御恩を被つた身であるから、討死でもしなければ面目が立ちません。本當によく死んでくれた、義死は勇士の本意、私は満足に思ひます」と、義理の觀念は悲しい笑をその双頬に泛べさしたけれど、恩愛の情はその眼から歎きの涙を溢さしめた。「子を思ふ親の迷はん老の坂の、杖には何を頼むべきやは」といふのが、その時の彼女の述懐であつた。悲を笑に紛らすといふ近松淨瑠璃の婦人の典型は、既に室町末期に於いて與七の母に於いて實現せられてあつた。義理と人情との衝突、さうした時に人情を義理で抑へるといふ峻烈の婦人の意氣は、もうこの頃から我邦の女性の頭に宿つてゐたのであつた。かうした悲しい笑ひ、笑はしい悲みは、桃山時代が回轉して來るまで、我邦の諸國に實演せられて、強志の母親、貞節の妻女にあこがれる健けな理想をはぐくみ育て、昔から比較的に賤められてゐた我邦の婦人をして、その地位よりもその精神に於いて、自己満足をなさしめようとする美しくい過程を歩んだ。それは將來の民衆道德の進化に第一の段階を與へたもので、國民生活史の内容を豊富にした一つの大きな要素であつた。

與七の母の
義烈

かうした子と妻とを持つた幸福の武士鳥居兵庫は、主君の後を追つて自殺しよう

した時、與七の討死した事やら、後に遺される妻の歎くであらうことやらを思ひ遣つて、「先立ちし小萩が本の秋風や、残る小枝の露さそふらん」と詠んだ。と、妻はそれを聞き傳へて、夫と子とに二重の死別をする悲しみに堪へかね、「有るはなくなきは數添ふ世の中も、我が身の上と思はざりしを」と詠み捨て、二人の後を追うて息を絶つた。この出来事によつて、かうした亂離騷亂の時代にも、人情の美しくしさには更に變りがなかつたのみならず、却つてその氣高い發露を見ることが屢あり、さうしてそれらが時代の武士の新しい道德、新しい人情をつくり上げたのに力のあつたことを知ることが出来るのであつた。江戸時代の自己犠牲の觀念の發現を、ひたすら政府の儒教獎勵の結果に歸しようとするのは間違つた考へであつた。——それはかうした史實によつて、室町時代の末、安土時代の初めから既にその芽を萌きつゝあつたことが窺はれる。

淺井氏滅亡

朝倉氏が滅びると、信長は直ぐ軍を近江に班して、朝倉と深い關係のあつた淺井長政をその占據してゐる小谷城に攻めた。長政はこの時最早孤立の地位に在つた、いつまで城に嬰つて死守してゐても、誰も何處からもそれを援けに来るものはなかつた。勝ち誇つた織田軍は勢鋭く攻撃を開始し、八月二十七日先づその京極曲輪は陥落して、

長政の妻

そこを守つてゐた久政は自殺し、尋いで本丸も陥つて長政は自殺した。

長政の妻は信長の妹であつた。彼女は兄の野心の犠牲となつて、その政略の爲めに長政に嫁いだのであつた。愈々城を枕に討死と覺悟を決めた時、長政は妻に向つて、「私は切腹しなければならぬが、お前は信長の妹であるから何の仔細もない。兄の處へ届けてやるから、生き長らへて、亡き後の菩提を弔うて貰ひたい。」といふと、妻は屹となつて、「それは仰せとも思はれません。私一人生き残つて、あれが淺井の女房と後指さ、れるのは口惜うございます。何卒一所に死なして下さい。」と云つた。長政は「お前の云ふとも一應は道理に聞えるが、頑是ない娘らが可愛さうだ。娘らには信長も恨みがあるまいから、助けて置いてくれるだらう。私には娘らを殺す勇氣がない。思ひ直して落ち延びてくれ。」と再三説き諭したので、妻も已むなく三人の娘と共に、藤掛三河守に伴はれて兄の許へ歸つた。二人の男子——嫡男萬福丸は木村喜内之介に伴はれて越前敦賀郡に逃れさせ、次男はまだ嬰兒なので乳母を添へて近江の福田寺に忍ばせた。寔に果敢ない淺井三代の歴史の最後であつた。この妻はおいち殿と云つて、後柴田勝家に再嫁したが、勝家殞落の時良人の後を逐うて自害し、娘は秀吉の許へ送られたが、その中の一人こそは秀吉の寵極めて深く、後に秀頼を産んだ所の桃山時

おいち殿の
貞操観

代の大立物淀君その人であつた。

おいち殿は絶世の妖婦淀君の母であり、眉目清秀の信長を兄として生れた女性であるだけに、時代の武士——殊に信長を周匝してゐる武士達には評判の美人であつた。けれどその貞操はこれを武田勝頼の妻に比すべくもなかつた。天目山に勝頼が自殺を決行した前、妻を親許たる北條へ送り還さうとしたが、彼女はそれを肯せずして刃に伏した。勝家の爲めに死んでもよい生命であつたのならば、長政の爲めに疾くに死んでもよい生命ではなかつたらうか。愛兒の爲めに操を汚したと云ひ傳へられる源義朝の妻常磐を、彼女は心秘かに婦人の典型としてはゐなかつたらうか。信長に巧く説きつけられて、萬福丸の隠れ家をさへ口走つたといふから、おいち殿は思慮の深い人ではなく、世の常の女性に見られる淺はかな心の所有者であつたやうに思はれる。けれども茲に彼女の倫理觀をたづねて、その行爲を道徳上から批評することはあまりに慘酷に過ぎた。

戦國時代に
於ける婦人
の地位

群雄割據の時代に於ける我邦の女性は、眞にその父兄の野心の犠牲であつた。大名から民衆が奴隷の如く思はれてゐたやうに、その卑屬親たる娘や妹もまた、機械のやうに見做されてゐた。それらの目に於いて、婦人の地位は低く、従つてそこにはまだ

何等の個人としての自覺はなく、たゞ家長の爲めに生きてゐる一個の從屬——他の言葉で云へば、或家をなしてゐる一分子としか自分達を見てゐないのであつた。それだから家長たる父兄の命するまゝに、いつでも、どこへでも、誰にでも、嫁ぎ、別れ、又適くことを辭まなかつた。胸の底には不満足の情が宿つてゐることがあつても、彼等はそれを訴へる勇氣と決心とを持たなかつた。それがその時代の女性の總てであつた。そしておいち殿はさうした女性の一個の代表者に過ぎないのであつた。偶に出た強志の女性、時折見られた貞操の婦人は、同時代を代表するものではなくて、寧ろ次の時代を豫見せしむる先驅者としなければならぬ格別の人格者であつた。勝頼の妻、鳥居兵庫の妻、細川忠興の妻ガラシャらの自殺、荒木村重一族の女房らの從容たる刑死の如きは、取りも直さず後者に屬すべき烈婦であつた。——否、實はそれらの人々は、それらの物語が、次代の人心を刺戟して、次代に於ける婦人の新道徳を建設するのに與かつて力があつたのであつた。

越前の朝倉氏、近江の淺井氏は滅んだ。これから信長の刃を向ける所は甲斐の武田氏であらねばならなかつた。そこで信長は家康と共同して之に當ること、した。武田氏は晴信が死んでから、勝頼がその後を嗣いだか、喪が祕してあつた爲め信長も家康

信長徳川氏
と結んで武
田氏を窺ふ

長篠役

もまだその死を知らなかつたので、深く敵地に侵入するが如き冒險を敢てしなかつた。甲斐經略の手始めとして、家康は先づ遠江の長篠城を攻め、信長は美濃に壘を設けて武田軍の進出に備へた。勝頼は天正三年五月兵を率ゐて南下し、曩に家康の爲めに陥れられた長篠城に奥平貞昌を攻圍したので、信長と家康とは兵を發して之を援けしめた。織田徳川聯合軍は十八日長篠城外に達して、大野川の對岸に陣してゐる武田軍に對抗した。二十日の夜徳川軍は武田軍を襲撃してその守將武田信實を斃したが、二十一日の曉に、武田軍は徳川軍に突撃し、こゝに兩軍は決定的の戦闘を開始した。ところが武田軍は散々に破れて、山縣、眞田、土屋、馬場などの老將が討死したので、勝頼はほろ／＼の體で遁け歸つた。この戦は史家の所謂「長篠役」で、この一戦に武田氏はその精銳を盡くして、前代から貯へた富強を失つてしまつたのであつた。武田氏の滅亡は、實にこゝからその芽を蒔いたのであつた。かうして追々と舊勢力は姿を没した。新勢力は頭を抜き出した。回轉期の回轉は矢よりもその速度が大きかつた。信長の大活躍はこれから始められ、新時代の建設はこれから始められたのであつた。

- (一)『信長公記』卷六參照。
- (二)『甲陽軍鑑』所收文書。

信長家康と和睦これありて、國々物いひなきやうに被_レ仕、尤に被_レ思召_レ候。信玄老萬事老體故に堪忍せられ、於_レ同心_レ者、御祝着に御おぼえ可_レ被_レ成候。猶中務可_レ申候。恐惶謹言。(原漢文)

正月朔日

義 昭 (判)

法性院殿

(四)同上、古文書。

度々雖_レ申越、追々染筆候。甲越井本願寺門跡之儀、此節遂_レ和、天下再興願入候。令_レ三和、於_レ上洛_レ者、諸國輝虎可_レ任_レ覺悟_レ事按申候。然末代可_レ爲_レ名譽。爲_レ其差_レ越最勝院。猶藤長昭光可_レ申候也。

三月廿日

御 判

不 識 庵

(五)同上。

就_レ近般信長恣儀相積。不慮城郭取退候。然此節甲州令_レ和談。天下靜謐馳走頼入候。爲_レ其差_レ越一色中務大輔。猶藤長可_レ申候也。

三月廿日

御 判

徳川三河守どのへ

(六)七・八『朝倉始末記』卷六『鳥居與七母之事』參照。

(九)『淺井三代記』卷第十八『信長卿の許へ長政妻をおくらるゝ事』參照。

(一〇)織田信長(三河長興寺所藏)、同信忠(京都大雲院所藏)の肖像を見ると、二人ともその顔の輪郭が正しく、所謂「色白の好男子」であつたと思はれる。また淺井長政夫妻(高野山持明院所藏)の肖像を見ると、長政の妻も稀な美人であつたと推定せられる。信長の家は美人系であつたかも知れないと私は常々思つてゐる。さうした血統を引いた淀君の美しくあつたことは固より疑ふまでもなかつた。

第四章 高潮時に於ける信長

第一節 安土の築城

安土の築城
計畫

月は一月より、年は一年より、擴充してゆく信長の武力と權勢とを象徴するものは近江の安土山に於ける築城であつた。信長は伊勢の長島一揆を平らけ、越前の一向一揆を破つた翌年、即ち天正四年正月中旬に安土に築城する計畫を立て、三日月惟住(丹羽)長秀にその工事監督を命じた。長秀はその時、安土から程遠からぬ佐和山の城主であつたが、命令が下ると直ぐ安土山に赴いて、工事に必要な道具を集め、大工だの、鍛冶だの、金具師だの、石工だの、勞役に従事する人夫だのを徵發する一方、石材を切り出すべき山を選んだり、木材を持ち運ぶべき道を修理したり、工事に必要な一切の準備を整へる爲め、夜を日に繼いで、沼澤、絶壁、森林、原野、處構はず駆け廻つた。

長秀の最も苦心したのは、築城に要する職工の召集であつた。戦亂が長く續いた爲め人民は生活の安定を失つて、一箇所に永住することが出来ないものが多かつたが、中でも最も生活難に困つたのは手細工を職業とする民衆であつた。奈良だの、京都だ

職人生活

の、古い都市には美術工藝品を作成する工人が定住してゐたが、それすら戦亂の爲めに生活費を儲けることが出来なかつたので、山口とか、小田原とか、比較的に平安な大名の城下を經廻つて、時偶ある建築土木工事の中に自分達の仕事を見出した。まして諸國の小さな町々に住んでゐる工人などは、全く仕事がなくその日／＼の細い煙すら立てかねる有様であつた。天文二年から六年に亙つた鎌倉鶴ヶ岡八幡宮の造營には、小田原の北條氏が全力を注いだにも拘らず、職工は常に手不足であつた。一例すれば、檜皮師は遠江から來てゐたが、それが一時國へ歸つた爲め、しばらく屋根の葺けなかつたこともあつた。大工にしても諸國からの寄集まりで、京都からも來て居れば奈良からも來て居り、近い處では伊豆、相模などからも來てゐた。手法、設計の難かしいところは、上方の巧者な大工が擔當し、その指揮に従つて附近の大工が下を働らいたやうであつた。設令職人が揃つたにしても、材料を得ることが容易でない。鍛冶の使ふ木炭は、前年から焼かして用意をしなければ、必要だと云つて直ぐにそれを購ひ得るほどに商業が発達してゐなかつた。建築材料の中でも、主要部に用ひる木材を手に入れることは殊に困難であつた。八幡宮造營の時なども、鳥居の材は伊豆から伐り出し、その他の材は駿河から伐り出すといふ風に、交通運輸の不便な時代に、諸國か

建築材料

ら寄集めて來なければならなかつた。神社佛閣の造營は信仰の後援があるけれども、城郭の建築にはそれがなく、寧ろ障礙が加はるばかりであつた。大名の威力の及ぶのはその領地内だけで、一步足を領地の外に踏み出せば、そこには敵對の心が充滿してゐた。一本の木も、一塊の石も手に入れることは出来なかつた。長秀はこんな境遇にゐて規模の宏大な安土城の築造に従事しなければならなかつたから、その心配氣遣ひは一通りでなかつた。二月二十三日には、信長は岐阜から安土に來て工事の進捗した狀況を見廻り、長秀に褒美として周光の茶碗と駿馬二頭とを與へた。

石垣工事

石垣築造工事は四月一日から始められた。畿内を始め、尾張、美濃、伊勢、三河、越前、若狹の侍は悉く徵發せられて工事に與かり、京都、奈良、堺からは大工その他の諸職人が呼寄せられた。石材は觀音寺、長命寺、長光寺、伊場の諸山から伐り出され、一千個、二千個、三千個、といふ風に一纏めにして安土山へ運ばれた。それらの運搬や築造を監督する爲めに、西尾小左衛門、小澤六郎三郎、吉田平内などが石奉行に任ぜられ、大石と小石とを選び分けてそれ／＼の用途を定めた。大石の中には「蛇石」と云ふ名石があつて、それを山上に運ぶことが出来なかつたので、羽柴秀吉、瀧川一益等は一萬餘の人員を動員して之を曳かしめ、三晝夜要つて漸く山上に引き上げた、そ

れを天主臺へ揚げる時の作業は信長が工夫したものであつた。かうした困難と缺乏とを凌ぎつゝ、朝日の昇るやうな信長の威光で、殆ど不可能と見られる安土山上の築造工事はどしどしと進捗して、琵琶湖畔に一偉觀を添へつゝあつた。

一體安土は琵琶湖の南岸に在つて、京都を距ること僅かに一日程、北へ行けば北陸道に出られ、東へ行けば東海道に出られ、南へ行けば伊勢紀伊に出られるといふ極めて便利な場所——云はゞ四通八達の地であつた。信長の最後の慾望は日本全國を統一して、それを自分の支配下に置くことであつた。一寸と考へれば、短氣な、せつかちの彼れは、直ぐ根城を權力の中心たる京都に構へさうなものであつたが、いくら短氣でも、彼れは自分の現在の地位と力量とを知る明があつたので、色々と考へた末安土を選んで居城の地としたのであつた。

一般に信長は短慮焦燥の性格を持つたやうに信ぜられてゐるが、事實は全くさうばかりではなかつた。彼れは固より一剋者であつたが、表面に現はれてゐるほど短氣ではなく、青年の日から腹の底では随分氣長い大計畫を立て、ゐた。信長は父親に死に別れた時、小さい那古野の城にゐたが、それから清洲に移つて尾張を統一し、此度は美濃を手に入れようといふので居城を小牧に遷し、美濃が手に入ると、近畿に出ようとい

安土の地理
的位置

信長の耐久
性とその大
企圖

ふので更に居城を岐阜に遷し、そこを根據地として、山城、近江、若狭、伊勢、大和、河内、和泉、紀伊の一部、越前、加賀の二郡を征服し、その領土は中央の十三州に跨るに至つたが、たゞ領土が擴がつたといふだけで更に安定はなく、東北からは上杉氏、東からは武田氏、西からは毛利氏、南からは雜賀、根來の徒が、大きな兵力を持つて脅威してゐた。それらの大敵に當るには、岐阜は餘りに規模が狭小に過ぎた。もつと規模の大きな處を都の近くで求めれば、先づ安土の外にはなかつた。安土は全く信長に縁故のない土地ではなかつた。安土は觀音寺の六角氏が兵を用ひた地であり、信長が曾てそれと對抗した時、こゝに一時的城砦を築いたともあり、よくその形勝の地たることを知つてゐたので、それを修築擴大しようといふ決心をしたのであつた。

安土城の設計は大體信長が立てたもので、部下の大名近臣などの邸宅も城の内外に割り當てられたので、廣い山上山下は殆んど全く空地がないやうになつた。城郭は湖面に突き出た小半島の上に建てらるべき計畫で、三方は湖水に圍まれ、一方は蓮沼によつて陸地と隔てられ、その沼の間を濱街道が南北に走つてゐた。城内と城外とは、大手口と百々橋口と搦手口とによつて連絡せられ、今一つ臺所道といふのがあつて腰越峠の下に出た。大手門の中には道を挟んで羽柴秀吉と徳川家康との邸があつた。

安土城のプラン

こんもりと松の樹の繁つた中央の丘陵に、本丸と二の丸とが相並んで建てられ、その後十七間に二十間の長方形の天主閣敷地があり、その上に更に七層の天主の建物を支持すべき礎石が据ゑらるべき計畫であつた。どの建物も。その基礎には高い「石倉」——今の言葉で云へば石垣を疊んだが、中には高さが數十間に及んだところもあつた。

天主閣
工事は大坂出兵と、京都に於ける邸宅新築との爲め五月以後中止せられたが、七月一日から再開せられて、見る／＼中に大建築物が竣工した。城の建築については、一部分の外細部についての記述はないが、兵要上の目的に適つた城樓があると同時に、日常生活の目的に適つた御殿風の居館のあつたことは確かであつた。安土城の首脳部は勿論天主閣であつた。安土城が信長の權威の象徴であつた如くに、天主閣は安土城の莊嚴の象徴であつた。天主閣は總て七層であるが、その第一層は石垣の中に在り、糧秣その他の物資を格納する倉庫に充てられた。石垣の上に建てられたのは第二層以上であつた。第二層の柱数は二百四本で、本柱は長さ八間あり、太さは一尺五寸六分角のもの、一尺三寸角のものとを混用し、座敷の中は悉く布を着せて黒漆で塗つた。或座敷には金箔を置き、狩野永徳が墨繪の梅を描いたりした。鳩、鷺、雛を育んでゐる雉子、支那の儒者などの繪も描かれた。第三層は柱の数が百四十六本で、花鳥の繪を描いた花鳥の間、瓢箪から駒の出る繪を描いた賢人の間などがあつた。第四層は柱数が九十三本で、岩の間には磊塊たる岩石、竹の間には竹、松の間には松の繪を描き、庭子の鷹だの、粉團花だの、優しい繪様のものもあつた。第五層には繪がなく、南北の破風口に一對の小座敷があり、第六層は八角形で、その設計は信長が最も苦心したものであり、他の部分とは全く面目を異にしてゐた。外面の柱は朱塗で、内面の柱は金箔で包んだ。周圍には擬寶珠のついた、豊かな彫刻のある勾欄が取り繞らされ、縁側の端板には鯨鋒と飛龍とを描き、壁には多數の餓鬼と鬼とを描き、内部には釋門の十大弟子と、釋迦牟尼の成道説法とを描いて、内外に面白い正邪相反のコントラストを示した。一番上の第七層は、三間四方即ち十八疊敷で、室の内外とも金箔を置き、四方の内柱には上り龍と下り龍とを彫み、天井には天人を描き、檐端には十二個の寶鐸を吊り下げた。狭間戸は皆鐵で、その表面を黒漆で塗つた。第七層の金具は後藤平四郎が主になつて、京都は勿論各地から來た職人がその製作に従事したが、第六層以下の金具は京の鯛阿彌が之を造つた。大工の棟梁は岡部又右衛門といふ腕利き、漆師首は刑部といふ名工、鍍金彫金の方面では宮西遊左衛門といふ傑物がゐた。屋根瓦は

第一層
第二層

第三層
第四層
第五層
第六層

第七層

築城工事に携はつた人々

平戸で瓦焼に従事してゐた明國福州生れの一觀といふものを招寄せ、奈良から来た職人を指圖して支那式に瓦を焼かせ、天主の唐草瓦と巴瓦とには金箔を置かせた。普請奉行は始め惟住長秀であつたが、軍務が多忙で心を普請に集中することが出来なかつたので、後には木村三郎左衛門がその任に當り、起工してから三年目に漸く竣工した。

安土城の建築的價値



燒瓦 (『合歌番一十七』)

天正七年の初め、信長は領内に對して、安土の城が出来上つたから、希望の者には拜觀を許す、その爲め、數日間城門を開放して置くといふ布告を發したので、武士も僧

侶も町人も農民も、吾勝ちに安土の城下に集つて來た。彼等は曾て京の銀閣寺や、金閣寺を見た。それらの如く安土の城も矢張り金箔や銀箔で光つてゐたけれど、その大きさは高さや廣さは比べ物でなかつた。御城かと思れば御殿でもあり、御殿かと思れば御城でもあり、南北朝以來の山城と居館とを兼ねてゐた。建築様式は、繊細な茶

人式の要素もあれば、豪壯な武人式の要素もあつた。寶鐸を吊り下げた七重の檐端や、擬寶珠を嵌めた六重の勾欄からは、神社めいた色彩や、佛寺めいた香氣が味はれた。五重の大破風は、水平垂直の兩線を斜線に變へて、嚴かな、重々しい美觀を呈して居るのに氣注かざるを得なかつた。高い、頑丈な、屹立つた石垣を觀ると、京の「築垣」や、諸國の土壘木柵に見慣らされた眼は、云ひ知れぬ

壓力に打たれたやうな感じを起さずに居られなかつた。

安土城の土壘木柵に見慣らされた眼は、云ひ知れぬ

力、應用力の豊かなことも感づかざるを得なかつた。武

將の中には年の老いたのがるて、戰國時代の城郭の變遷

を眼前に思ひ浮べることが出来、従つてこの壯大なる安

土の城の結構を見て、適應と變化との面白い調和を見出さずには居られなかつた。表面

は倭様式や唐様式のやうに見えるけれど、その裏面に潜んだ南蠻様式の光りが閃くの

に氣注かすには居られなかつた。天主教を信じてゐる武士達は、安土城の構造様式の中

には、力強い異國情調の漂つてゐるのを觀取した。宗教と、藝術と、軍事的知識とが

一つになつて、そこに西歐の香氣と色彩とが強く現はれてゐることを知つた時、喜ば



南蠻様式

安土城の美術的價值

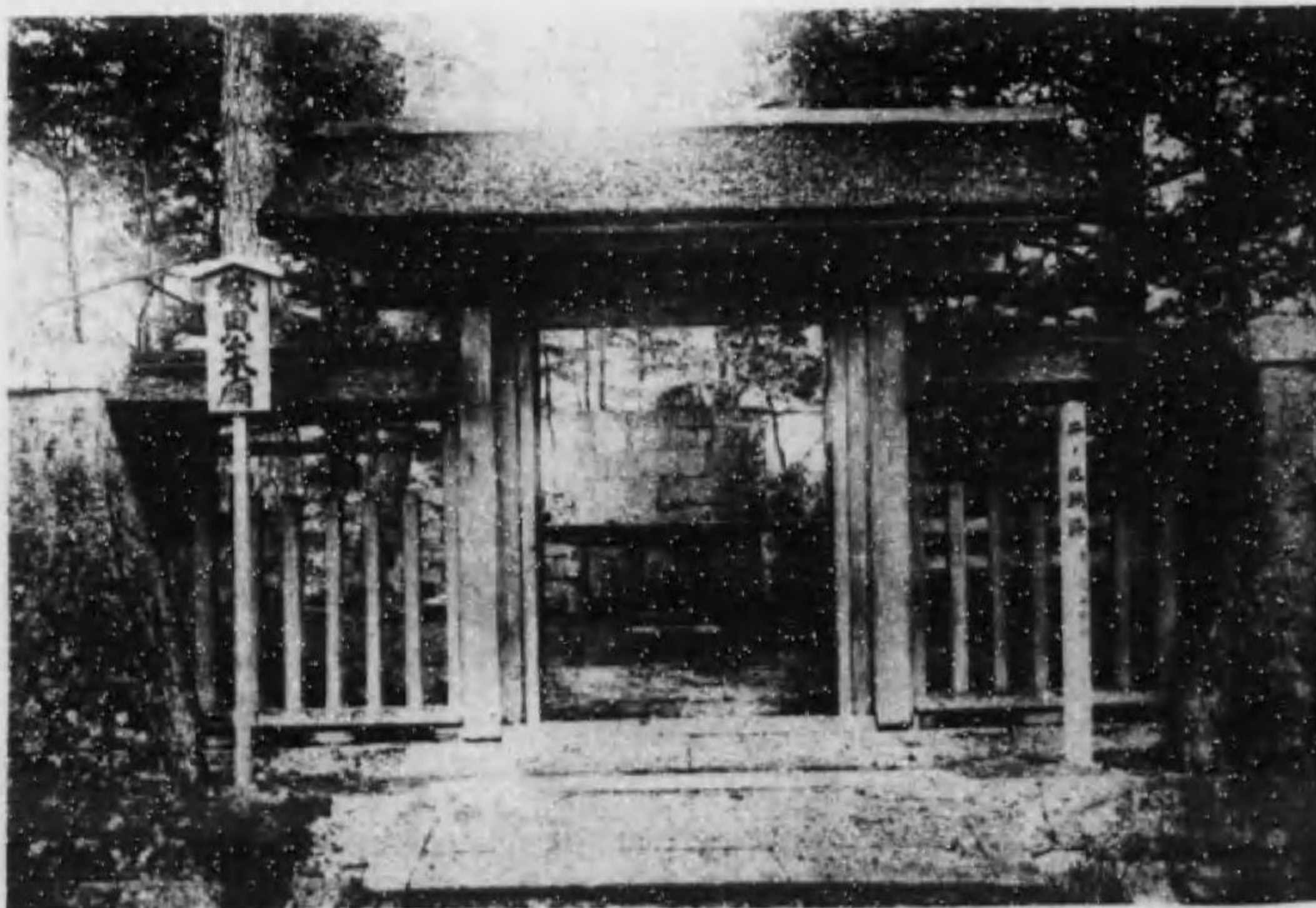
すには居られなかつた。孤立した日本の文化が、近くは支那、遠くはイタリヤ、ポルトガル、イスパニヤの文化と握手して、大きな廣い世界思想の渦流の中に捲き込まれるやうになつたことを歎ばすには居られなかつた。

雅びた心を持つた人達は、城郭としての軍事的價值よりも、その繪畫、彫刻、建築の様式から、その美術的價值を考察し、判斷して、一種云ひ知れぬ悦ばしさと懐かしさを感じたであらう。彫刻にも、繪畫にも、建築様式にも、何の拘制も束縛もなかつた。先づ建築總體から觀ると、破風の唐様式、石垣の南蠻様式、その他の細部々々の倭様式、色々の様式を自由に取入れて、明るく廣野に百花の咲き揃つてゐるやうな感じがした。次に彫刻は在來のかへるまたこしげな藝股や拳鼻のそれとは違つて、長い柱にそれが施された爲め、上り龍下り龍といふやうな豪放な取材が行はれてゐた。最後に繪畫はと見ると、印度くさい佛畫、支那趣味の勝つた肖像畫、風景畫、それに隣つて豊麗な花鳥の圖が純日本式の華やかな色彩を見せ、各々の裡には西歐情調に富んだ色彩の案排、光線の照射が味はれた。武將の力を象徴した龍虎相搏の畫面は、どんなに武人の野心をそつたであらう。釋尊成佛說法の圖様は、どんなに僧侶の覺醒を促したらう。支那式の好尚を満足させる仙人、賢人の肖像は、どんなに儒教の素養ある人々に悦ばれたであ

安土城址と信長廟

上圖は安土城の黒金門を撮影したものである。門の名から推すと、それが鐵板を張つた丈夫なものであつたことが窺はれる。所謂「櫓形」の築城形式が此時既に發達してゐたことは、此門址の石垣によつて證明せられる。此圖は著者が實地踏査の際に撮影したものである。

下圖は安土城二の丸址にある信長廟で、正面の門内に見えるのが墳塋で、方形に石を疊んだ上に一個の石が置かれてある。一種新様式の埋葬法式で、秀吉が造つたものだと言はれてゐる。山深く、森靜かに、廟は古りて石面に苔むしてゐるけれど、墓前には常に徳見寺から供へる香の煙りが靡いてゐる。



丁のふむら、墓前には常に鹿見守りをする者の體は地につく。
 鹿のふむらには云はれり。山系、森精の、鹿の古りて四面の音に
 鹿のふむらに上り一箇の石を置かれり。一層母對友の鹿養者友、赤吉
 才圖は安土城の虎城にあり音長廟、五面の門内に見えるのは東塾、
 鹿の音の類に鹿見守りなり。
 鹿の鹿見守りなり、此門城の四面に上り鹿見守りなり。此圖は音長を實
 鹿の鹿見守りなり、此門城の四面に上り鹿見守りなり。河内、鹿見守り
 土圖は安土城の黒金門が鹿見守りなり。門の音を鹿見守り、
 鹿の鹿見守りなり。

安土城址の音長廟

狩野派の繪

落漣の首

らう。戦亂の世に藝術の隠れ家を求めて、父祖以來世代を累ねて育來つた雄渾壯大な魂の躍動を波打つ時代の大きなうねりの上に載せて、時としては粗笨な、しかし底力の充實した大畫の線條と色彩とに現はした狩野永徳の墨繪の梅は、二重の西座敷の最大偉觀であつた。三重の花鳥の間の花鳥圖は、宋代の支那畫の骨法を摹倣踏襲して、足をその闌外に踏み出さなかつた雪舟派の畫家が夢にも見なかつた畫題、それを元信が土佐派から承け繼いだ倭畫式の趣味で、攝取したのが初めて、狩野派はすべて之を新しい題材として、自由な筆先に描き出した。そこに狩野派の新集成があり、新生命があつた。室町公方の時代に見られなかつたこの新圖樣は、枯淡な禪宗氣分に富んだ支那畫面に慣れた人々の眼をどんなに驚かしたであらう。暗黒な、秩序のない、冬のやうな戦國から、明快な、統一のある、春のやうな織田の天下に來たやうに、ぞろ／＼と打ち連れて座敷々々の裝飾畫を覽た人々は、恐怖の審あやかし、警戒の審あやかしから放たれて、自由、潤達、無障礙の大道へ出たやうに感じたに相違なかつた。

武士にも、坊主にも、町人にも、農夫にも、誰の眼にも均しく映じたのは、けばくしい金色の光り、濃彩の閃めきであつた。そこには明るさと、華やかさと、嚴かさとがあり、その影から財力と、武力と、不可壓の意力とが閃めいてゐた。少年の日から憧

懐れてゐたこの三つを、信長は黄金の光り——「箔濃」で象徴してゐた。顧みればそれは六年前のことであつた。天正二年正月元日、信長は参賀の爲めに集まつた大名小名に酒肴を出し、正に三献に及んだ時思ひ出したやうに、「あ、珍らしい肴があつた」と近侍に命じて、黒い漆塗りの箱を持ち出させた。一同は不思議の思をして、視線をその箱に集めた。恰ど柴田勝家が太盃を傾けてゐた時、信長は自分で蓋を明けて、箱の中から三つの圓い物を取り出した。何れにも札がついてゐた。その一つには朝倉左京大夫、他の二つは浅井下野守父子で、何れも首であつた。首は三つながら金箔で包んであつた。満座の諸大名はそれを見ると、默的な氣分が胸裡に湧いて、「下戸も上戸も唯だ飲べよ」と、陽氣に飲んだり、舞つたり、歌つたりした。信長は少し反身になつて、「何れも数年の間苦勞して手に入れた首、それを肴に酒宴に及ぶのは、誠に大慶至極の至りである」と大盃で酒を煽つた。——首を箔濃にするまでに信長は金色を熱愛してゐた。その金色趣味は、名残なく安土の城の裝飾に現はされ、それが知らず／＼後繼者たる秀吉にも傳はつて、桃山時代の絢爛な新藝術が大成せられたのであつた。

信長が安土山にかうした城郭を築いたのは、固より趣味を満足せしめる爲めではなく、そこに軍事上の目的のあつたことは言ふまでもなかつた。しかしその裝飾は、必要

權威と富力
との象徴

『安土山之
記』

を通り越して贅澤に陥つてゐた。贅澤は屢、僭上者の衣食住に現はれるものであるが、吝嗇と思はる、までに節儉であつた信長には、空虚な只の贅澤は出来さうにもなかつた。彼れは安土城を以て自己の權威と富力とを表示し、それによつて、武士と民衆とを威嚇懾服しようとしたのであつた。蟲に譬へれば、安土城は警戒色のやうなものであつた。彼れの統一事業が段々成功して、威名が全國を籠罩するやうになると、遠方の豪傑から使者が來たり、または自分で出懸けて來て謁見を請うたりした。何れにしても輪奐の美を極めた謁見所が必要であつた。それで信長は多額の費用を投じてかうした壯大な城郭を築いたのであつた。竣工して見ると信長は心中祕かに驕りと歡びとを禁ずることが出来ず、知名の文人にその事を記さして後世に傳へようと、天龍寺の妙智院にゐた策彦にその希望を告げると、策彦は辭退して岐阜在住の南化和尙を推薦したので、南化は得意の筆を揮つて、全文殆ど對偶から成る「安土山之記」を書いた。その最後に加へた七律は、「六十扶桑第一山。老松積翠白雲閑。」また「宮高大、似阿房殿。城峻固、於函谷關。」といふ句で、新建築の壯麗と、自然の地勢の重要なことを讚美したものであつた。信長は非常に喜んで、狩野又九郎を使者として、黄金百兩、小袖三襲を南化和尙に送り、又別に二位法印を使者として、黄金百兩、銀子百兩、小袖

三襲を推薦の勢を取つた策彦和尙に送つた。「安土山之記」を書いた南化よりも、書かぬ策彦の方が結局銀子百兩だけ多く贏ち得た譯なので、當時「馬鹿正直」の仇名があつた太田和泉守は、底の知れない信長の腹の大きさを忖度したり、「謙徳は却つて光るものか!」と云つて、策彦の人格を褒め稱へたりした。

(一)小瀬甫庵『信長記』卷第九『安土の城御普請の事』。

(二)『快元僧都記』天文二年、三年、四年、五年、六年の條参照。

(三)實地踏査に據る。摠見寺所藏『安土城址圖』は貞享年間に作られたものであるが、大體は信憑しても差支がない。之に由ると天主閣の石垣は十七間に十八間である。然るに『信長公記』では十七間に二十間になつてゐる。私は踏査の結果後者を採る。ヘロドツスのパピロンの記事よりも、パピロンの遺址の方がもつと確かである如く、精確なと云はれる『安土城址圖』よりも、安土城の遺址の方がもつと精確であるからである。

(四)『信長記』(安土山天主之次第)参照。天主の語原については、史家の間に極めて議論が多い。『梧窓漫筆拾遺』には天主教の天主から出たと云つてある。故文學博士田中義成氏は『史學會論叢』第一輯に於いて、天主の主宰者たる梵天帝釋は須彌山の上に居るから、それに象どつて一城の首腦たる高閣を天主と呼んだといふ説を述べてゐる。文學博士大類伸氏は『城郭の研究』(一一六、一一七、一二三、一二四頁)に於いて、更に研究の歩を進め、『明良洪範續篇』の天主の初まりは井樓から起つたといふ説から出立し、戰國時代の高樓が天主閣の起原であらうと説き、始めには天主が戰時には城主の居所、平時には、殿主の居所であるがら、殿

主、「殿守」などの語が出来、後その構造が發達するに従ひ、威容の壯大なるを仰いで「天」の字を用ひるに至つたのだらうと述べてゐる。

(五)『日本西教史』上巻、八四三頁。

(六)安土城天主の裝飾については、『信長公記』卷九『安土山御天主之次第』に詳記してある。安土城の研究中、最も快心なのは福井利吉郎氏の『桃山時代の美術』(『安土桃山時代史論』所收)である、それには詳しい記述もあり、批評もある。又一般の歴史的考察には、辻文學博士の『安土城址に就て』、『歴史地理』第九卷第一號所收)及び渡邊文學博士の『安土に就いて』(同、第十九卷第一號所收)がある。

(七)『信長記』参照。

(八)『定慧圓明國師虛白錄』卷之三参照。

第二節 基督教の宣傳

安土城の自由觀覽が行はれた時、京都に住んでゐた宣教師のオルガンチノ・ソルガ(Organtino Soldi)は、汚い法服を着てのこくと安土に出懸けて行つた。彼れはそれまでも度々安土城を見たのであつたが、この際に行かずには信長の御機嫌が悪からう、御機嫌が悪くては宣教上にも不利の事が多からうと、態々出向いて往つたの

オルガンチ

であつた。彼れはよく信長の人と爲り辨へてゐた、その心の底までも讀むことが出来るほどであつた。彼れは信長が綺羅びやかな服装をして、誇り顔に外人に見せびらかすことも知つてゐた。外人の批評に對して酷く神經質なことも知つてゐた。それ故、彼れは信長に謁見して、安土の風景の佳いこと、宮殿の美くしいことを口を極めて褒めた。信長は故に謙遜した口調で、「いや、貴殿は歐羅巴で、まだ、麗はしい宮殿を見られたらう」と云つたが、心の中では、世界中何處にも安土ほどの宮殿はあるまいと信じてゐたらしい。眼から鼻へ潜り抜けるほど聰明なオルガンチノは、直ぐ信長の心を讀み、ナポリ生れだけに幾何か伊太利人の外交的辭令を交へて、信長を喜ばすやうな返辭をした。信長はにつこり微笑した。その微笑からオルガンチノは、年來の希望通り、最高武力、最高權力の所在地たる安土の町に、基督教の寺院を建てることの許可を抜き出さうとした。しかしその慾望は遂げられさうにもなかつた。

信長はかね／＼安土にバンテオンを建て、その中へ最先に自分の像を置かうといふ希望を持つてゐた。佛教、天主教、いづれの寺院も造らせようといふ考は持つてゐなかつた。けれども、オルガンチノが言葉巧みに、安土へ移住して貴族の子弟の爲めに寺院と自分の住家とを建てたいといふ希望を申し入れたら、信長は早速それを許可し

安土に寺院
を建つ

て所要の地面をオルガンチノに寄附しよう云つた。豫想に反した大成功に、彼れは嬉しさに頬の肉が弛まずには居れなかつた。間もなく寺院は建てられ、そこでオルガンチノは説教に従事した。

天正九年には、その前々年に、宣教視察の爲めに印度から來たアレサンドロ・ヴリニヤニ(Alessandro Valignani)は、京都と安土とで二回まで信長に謁見して、安土に學林建設の許可を得ようとした。同年二月二十日、信長は安土から京都に來て本能寺に宿した。同二十三日には、ヴリニヤニは、一人の黒奴を伴うて謁見した、年の頃二十六七、その飽くまでも黒い肌色は信長をして牛を聯想せしめ、その人間らしからぬ營力は、彼れに怪物といふ感じを與へた。かうした異國情調は信長を魅して、彼れの心は日は一日より基督教宣教師をなつかしむやうになつた。遂に學林建設は許可せられ、十月七日信長は鷹野の歸途、僧院を尋ねて學林建築のことを打合せた。工事は二十日から開始せられ、信長はその敷地として御小姓衆、御馬廻衆をして、足入沼を填めさせたが、それでもまだ狭いので町家を壊してその敷地をも學林のそれに充てしめた。

オルガンチノが安土に建てた寺院は、名を大成寺と呼んだ。また學林は數年前京都に建て、置いた家を壊して、それを安土に運んで來たのであつた。その時高槻城主高

ヴリニヤニ

安土の學林
と大成寺

Seminario in Anzucci, principale Fortezza.
nel Regno del Giappone.



安土セミナリヨリナミセトヨリゴノク王法』三十一代一記代

山右近は、千五百名の人夫を寄附して、その改築工事を手傳はせた。工事は一箇月の後に終つて、オルガンチノが學林長となり、そこに二十五人の貴族の子弟を收容した。信長は態々學林へ往つて教授の状況を視察し、歐洲の學問と言語とを日本の學界に輸入するのは望ましい事であると云つた。其時信長をして最も面白く感ぜしめたのは日向の飢肥城主伊東義益の子ジュローム (Jerome) がゐる、洋樂を彈奏して聞かせたことであつた。大成寺及びセミナリヨの建築に

基督教の管區

つては、何等の記録が残つてゐないけれども、それらには強烈な歐洲式の香氣の漂つてゐること、思はれる。『法王グレゴリヨ十三世一代記』に現はれてゐる安土セミナリヨは、史家によつて想像畫と斷定せられてゐるけれど、その背景をなしてゐる山や水の工合を見ると、それには信すべきいくらかの典據がありはすまいか。

そのらの日に、基督教は最早や日本には可成に擴がつてゐた。グリニヤニは日本を京、下、四國の三部に分つた。第一部は京都、安土、高槻の三教區に分かれてゐた。京都區には教父二人、教兄弟二人がゐるて説教と儀式とを行ひ、安土區には教父二人、教兄弟二人がゐるて、教父の一人は布教に従事し、他の一人はセミナリヨで教授に従事し、高槻區には各一人の教父と教兄弟とを置いて、領主高山右近の保護下に布教に従事した。第二部には九州一圓が所屬し、豊後府内には各一箇の小學校と大學校とがあり、臼杵には一箇の僧學校があり、ワルドヂュとノセンとに宣教師の本部があつて、そこから各地の宣教師が派遣せられた。天草とフンドには教友の住居があつて、二十箇所の寺院を管轄してゐた。大村と有馬とは、豊後に次いで基督教の盛んな地で、寺院は四十箇所、信者は五萬人に上つた。第三部には四國が所屬してゐたが、その信徒数はさほど多くはなかつた。グリニヤニがこれらの教區を巡視して印度に歸らうとする時

信者十五萬人、寺院二百、宣教師五十九人
サヴィエル

ポール・ヤジロー
トルレス
フェルナン
デス

調査した所によると、日本全國に於ける信者の數は十五萬人あり、寺院は二百、宣教師は五十九人を算したといふ。實に素晴らしい勢であつた。また、く間にかうした盛況を見るに至つたのには、そこに何等かの理由がなければならなかつた。

サヴィエルが鹿兒島に到着したのは天文十四年の秋であつた。彼れが印度副王とマラッカ總督とに説いて、自分に半官的性質を帯ぶる旨の書面を與へしめ、日本を基督教旗の下に置かうとして印度を出發したのは、全く日本人の信者たるポール・ヤジロー (Paul Yajiro) の勸説に依つたのであつた。ポールは教父コスマス・デ・トルレス (Cosmas de Torres) 及び教兄弟ジョン・フェルナンデス (John Fernandez) と共に、サヴィエルに伴はれて來た。サヴィエルは薩摩の領主島津貴久(たかひさ)に謁見して布教の許可を受け、その年の暮までに百餘名の信者を得たが、佛僧らの迫害に逢うて鹿兒島を見捨てた。彼れは間もなく平戸に現れて布教に従事したが、トルレスを留めて平戸を監督せしめ、自分はフェルナンデスと共に周防山口を訪うた。山口は「西の都」と謳はれた繁華な都市であつたが、城主大内義隆は京都風の公卿の生活様式に心酔して、歡樂と淫蕩とに耽るのをその日課と考へてゐたかの感があつて、とても基督教の道徳を説くもの、夢想を實現せしめるやうな場所ではなかつた。彼れは屢、途上で罵られ、辱しめられ、磔さへも投げつけられた。

山口に於ける布教

彼れは遂に山口を去つて京都に向つたが、朝廷も幕府も共に無力で、到底全國に命令して彼れの布教の安全を保障するやうな力がなかつたのみならず、所要の一萬貫を納めるとが出来なかつたので、甚だしく冷遇せられ、己むなく退京して再び山口に入り、印度副王及びマラッカ總督の信書方物を義隆に獻じた。曾てはうす汚い乞食坊主と思つてゐたサヴィエルが、二度目に山口へ來た時には、金色燦爛たる式服を着し、且つ副王や總督の代理といふ資格を帯んでゐたので、山口の上下は酷く驚かされた。自然に時を刻む時計、不思議な音を出す樂器、珍らしい三本筒小銃(アークピエス)が方物として、差し出された時は、驚きが喜びに變つて義隆の顔には微笑と怪訝の表情とが泛んだ。かうした關係で、サヴィエルは布教の許可を受け、町の辻々には切支丹宗門官許の制札が立てられた。彼れは二箇月の間に約五百人の改宗者を得た。然るに、豊後の領主大友義鎮(おもしろ)から招待があつたので、彼れは山口を後に見て豊後府内に赴いたか、しばらく滞在の後印度に歸ることとなり、途上で遂に死んでしまつた。

サヴィエルの京都に入つたのは、天文十九年で、その時兎に角布教の許可を得たには相違なかつたが、實際効果ある布教をなし得たか否かは分らなかつた。それから九年

布教の方法

を經た永祿二年に豊後から教父ガスバル・ヴィレラ (Gaspar Vilela) が教兄弟ラウレンス (Lawrence) に伴はれて入京した。ラウレンスは山口の町を流し歩いて、朗らかな美聲に市民を酔はした早歌唄ひであつたが、其處でサヴィエルからバプテスマを受け、爾後基督の宣傳に盡力してゐたものであつた。ヴィレラはその時、佛僧の法衣を着け、頭髪を削つて、路傍で通りすがりの人々に説教をした。かうした布教振りには、彼等新來の外國宣教師に成功を齎らさしめ、その効果は極めて著るしかつた。單純な、深い教義も何も知らぬ民衆は、基督教と佛敎とは、淨土宗と一向宗との差別位のものであると思つた。サヴィエルは鹿兒島に來ると、間もなく『基督教問答』及び『基督一代記』を日本語に翻譯させてローマ字に綴り、それを説教の際朗讀したといふが、神のことを「デウス」、基督を「キリスト」、教父を「バデレ」といふ風に、日本人が比較的發音し易いやうな音に直して、ポルトガル語、若しくはラテン語その儘に用ひた。初めの中は、天國のことを極樂、冥府のことを地獄といふ風に、佛敎式の語彙を用ひたが、それでは基督教の觀念が明白に表現せられないといふので、後には天國はバライズ、地獄はインヘルノと呼んだ。古文書に「インヘル野」と書いてあるのがあつた。その他、祈禱は「オラシヨ」、懺悔はコヒサンといふやうに、可成多くの外國語がその儘に輸入せられた。

たのであつた。それから略字もまた相當に採用せられて、「デウス」(Deus) は D と書くべきであるのに、それを Ds と書き、「イエス」(Jesus Christ) を Jx と書いた。中には、それを特に N と書いたこともあつたと、この時代を研究してゐる學者が私に語つたことがあつた。かうした外國文字、或は外國語の輸入は、同時にそれが表現してゐる内容をも輸入するものであるから、基督教の吾が國民衆の思想上に與へた影響といふものは、餘程大きかつたに相違なかつた。

ヴィレラは恐らく京都に於いて、基督教の寺院を建てた第一人者であつたに違ひない。彼れは社會の低い階級に屬した民衆はいふまでもなく、佛敎の僧侶をも改宗せしめ、遂に將軍足利義輝に謁見して布敎の許可を受け、管領であつた三好長慶や、その部下の松永久秀にも説教を試み、將軍の生母の家元たる近衛家には屢、招かれて晩餐を共にし、或は彼方から訪問されもした。その頃、ヴィレラが京都に建てた寺院はどんなであつたか詳しく知れてゐないけれど、人目に立つほどの可也な外觀を持つてゐるはしなかつたかと思はれる。將軍はその寺院に亂入狼藉すること、寄宿若しくは悪口すること、非分の課役を懸けることを禁じてゐるから、相當の廣さと高さとを持つた建物であつたらうと想像せられた。ヴィレラはその後堺に移つて布敎に従事した。

フロイス

永祿八年にはルイス・フロイス (Luiz Froes) が日本へ来たので、ヴィレラはそれを伴うて京都に行き、將軍義輝に謁見して布教の便宜を得ようとしたが、僧侶の反対に逢うて堺に退かざるを得なかつた。その頃三好長慶の養子義繼と、その部下の松永久秀との間に紛争があり、その年の暮には兩人は堺附近に對陣して互に勝敗を争つてゐた。これらの軍中には多くの基督教を信する武士がゐて、日本がそれまでに曾て持たなかつた不思議な歴史の一頁を書いた。それは一種の赤十字思想で、教務を軍務乃至政務から引き離して考へ、軍事上或は政治上では相戦ひ相争つても、宗教上では敵味方が融和して共に事を執つたといふ新現象であつた。十二月二十四日、教父フロイスは雙方の陣營に使を出して、基督教の信者に降誕祭を執行する旨を告げしめた。すると彼等は宣教師の招きに應じて、悉くその夜の祝祭に集ひ、同じ屋根の下で嚴肅な儀式を執り行つた。その間彼等には三好方と松永方との區別がなく、神の前には人類といふ一つの同胞であつたが、夜がほのぼのと明け初めると、彼等は再び戰場に立つて、相互の血液を流すべく、沈黙の中に一禮をして立ち別れた。かうした博愛的の、愛敵思想は古い以前から我が邦には存在してゐたもの、それが宗教に絡みついて武士の間に現はれたのは、恐らくこれが始めてはなかつたか。これらは歐洲思想の影響の

博愛思想の
實現

中の面白い一つであつた。

南蠻寺

永祿十二年の春になつて、フロイスは信徒に迎へられて、堺から京都に歸り、信長と義昭とに謁見して、「眞の教」と稱する寺院で、基督教の説教をすることの許可を得たと、バルトリの『耶穌會史』は記してゐる。この記事は我が國に傳はつてゐる基督教に關する諸書の南蠻寺傳説と深い交渉を持つてゐないとは云はれない。久しい間上杉家に傳はつて居つて、その家老であつた知坂兵部の名の記してある『切支丹宗門來朝實記』に據ると、信長は京都四條坊門に四町四方の土地を選んで、それを宣教師に與へ、北山から大石を引き出して石垣を築き、巨額の失費を厭はず寺院を建立せしめ、時の年號を採つて永祿寺と命名した。ところが叡山の僧徒が故障を申し立てたので、朝廷では評議の末信長に寺號を改めしめることになり、遂に南蠻寺と改稱し、近江甲賀で五百貫の地を寄進したとある。又この書には、宣教師が藥草の栽培を願ひ出たら、信長は山城近江兩國の中で都合の好い土地を選べとあつたので、近江の伊吹山(ミオ)が選擇せられ、其處を五十町四方切り開いて藥草を植ゑたと書いてある。これらの記事は科學的態度を執つてゐる吾が國の歴史家の信じない所であるけれども、かうした傳説の影には常にそれを産み出す理據が横はつてゐた。そこには植物分布學上珍らしい植物や

伊吹山の藥
圖

社會救濟事業

アルメイダ

動物があることも注意しなければならない。

序に今一つ注意しなければならぬことは、基督教の宣教師がそれらの日に慈善事業——貧民救済、孤兒養育、病者施療などを試みて、好感を一般民衆に與へたことであつた。宣教師の一人にルイス・アルメイダ (Luiz Almeida) といふのがあつた。彼れはもと商人で、吾が邦へも來て錙銖の利を争つてゐたが、感じたところがあつて耶蘇會に入り、その所有の財産を悉く會に寄附し、布教かたぐい醫療に従事して信用を博した。長期の戦亂と、時代の風潮とが、民衆の心を無慈悲のどん底に擠した爲め、振り離され、見棄てられて、誰一人顧みてくれるもの、なかつた癩病の患者、穀潰しの異名が適しいほど不生産的な老人幼兒、それらを救ふ爲めにアルメイダは豊後の府内に二箇の救濟院を建てた。大友宗麟もまた若干の領地を割いて、救濟院を經營する資に充てた。かうした慈善的な、博愛的な仕事は、民衆の一部に怪訝の心を起さしめたけれども、醫師の見放してゐた病人が治癒したり、汚い乞食が立派な人間になつたりしたので、民衆は宣教師の行ふ仕事を肯定せずには居られなかつた。佛教の僧侶の行爲に比べてあまりに美しく、餘りに尊く、餘りに慈悲深い宣教師達に對する信頼尊敬の情は、やがて基督教そのものに對する歸依信仰の情であつた。夢心地、醉心地で、多くの民衆は

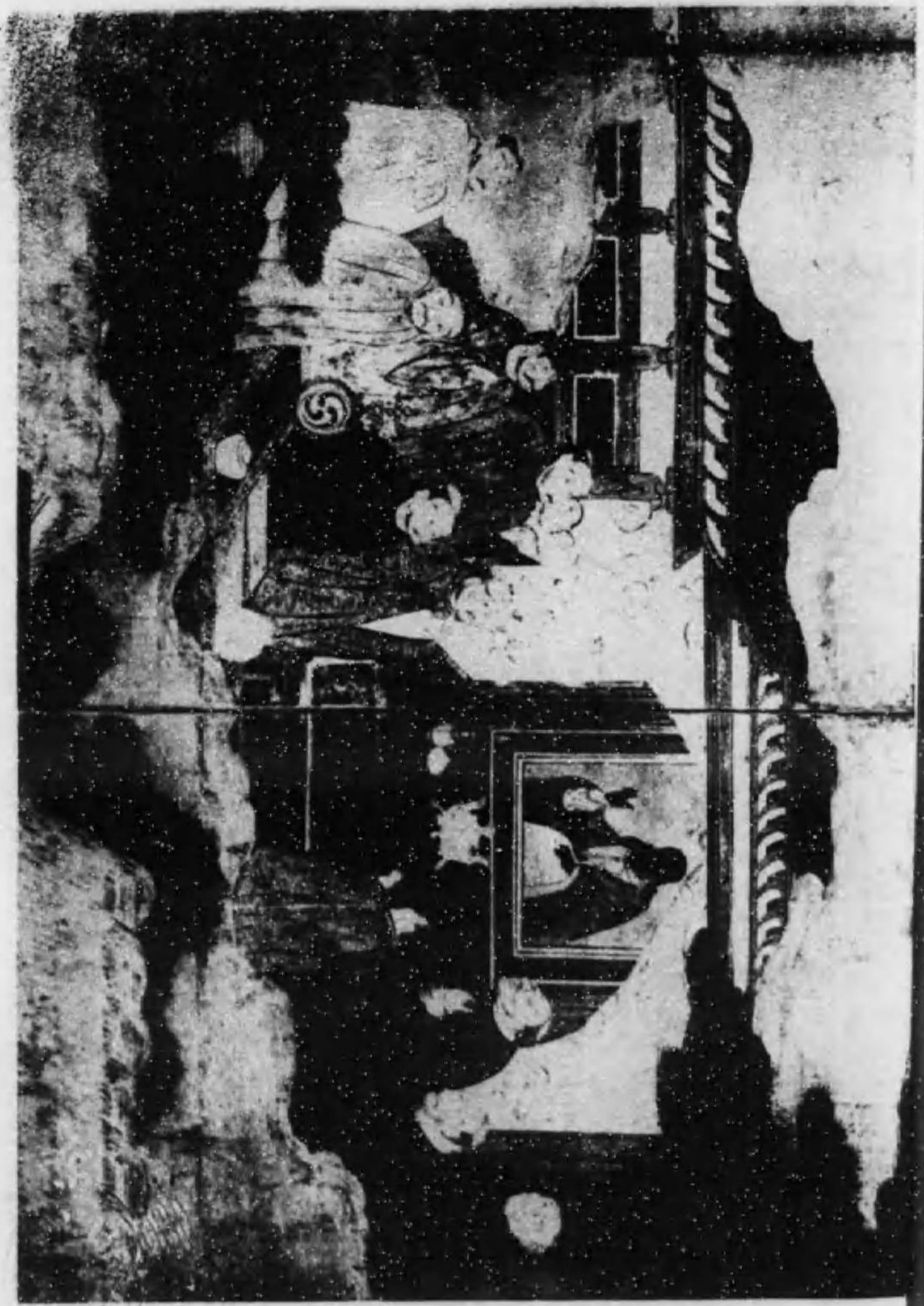
南蠻寺説教圖

これは帝室御物屏風に描かれたもので、一般に南蠻寺説教圖と信ぜられてゐる。南蠻寺の建築様式については確實な記載がなく、また其存在をすら疑ふ人がある。けれども、これらの繪畫は同時代の製作で、いはゆる繪空事があるにしても、若干の眞實を持つてゐるであらう。これに従へば、南蠻寺は全く佛寺様式であつて、少しも歐羅巴風の形式を備へてゐない。これを『法王アレゴリヨ十三世一代記』に載つてゐる安土セミナーヨの圖に比べると、まるで天地の差である。多分當時のキリスト教寺院は、いくらかの歐洲風分子を加へた佛寺式建築であつたらう。或は中には全然日本式の民家などを寺院に代用したこともあつたらうと思はれる。此圖に權威のあることは、外人の服裝が稍々眞に近いものであるといふ一事でも證明せらる。

のりたること一事も鑑取たる。

はつたると思ひける。此圖の辭題のなること、我人の墨筆の辭と異つて、
墨筆のしつたる。近江中江の全日本友の具案がら、寺の外用のしつたる
である。冬衣當御のキキイ尊寺の、いづれの権僧長干の味へ、寺の友
十三世一外階の二階の安土サキサキの圖の出る、また天賦の友
友つた、少しも権僧長干の味へ、また『帝王』の
了も、善干の眞實を執つたる。この寺へ、南蠻寺の全寺の
である。むすも、この寺の辭題の同様の、この寺の辭空事である。この
。南蠻寺の眞實のしつた、この寺の眞實のしつた、また其容亦つた、
この寺の眞實のしつた、この寺の眞實のしつた、この寺の眞實のしつた、

南蠻寺眞實圖



布教の成功
した理由

基督教宣教師の門に走り、教勢は日に月に盛んになった。

元龜元年にはフラスシスコ・カブラル (Francisco Cabral) が来て、ジエスイットの地方部長として働き、二年にはオルガンチノ・ソルヂが現はれて信長に接近し、その保護の下に大に教勢を張るに至り、天正四年には首府たる京都に大きな寺院が出来るに至り、その翌年には信徒の数が約二萬人に達したと記されてゐる。かうした基督教の弘布には、色々の理由があつたけれども、(一)宣教師が總て佛僧よりも眞面目であり、親切であり、慈善的行爲の多かつたこと。(二)民衆は基督教を在來の佛教と餘り異つてゐない宗教と思つてゐたこと。(三)異國情調が民衆の心をそつたこと。(四)大名が經濟上、軍略上から基督教を保護したこと。——これらがその重なる原因であつたことは否定することが出来ないと思はれる。その中第四の理由の如きは、官憲を崇拜してその前にひれ伏すを自分達の最も忠誠な行爲と考へてゐたわが國の民衆に取つては、最も大きな基督教信奉の理由であつたに相違なかつた。天正六年荒木村重が叛いた時、信長はその徒の高山右近を自分の味方に引き入れる爲め、オルガンチノをして高山を説かしめ、若し高山を引き入れることが出来なければ、基督教を禁ずるかも知れないと威嚇し、オルガンチノは旨を受けて高山を説き、遂にそれを信長に黨せしめたとい

荒木村重の
叛

使節の歐洲
發遣



荒木船旗章

ふが如きは、信長が基督教を方便に使つた顯著な事例の一つであつた。信長は一般に酷く宗教を迫害したやうに思はれてゐるが、彼れは自分の統一事業に都合の悪いものならば、何でもそれを妨げて破滅に陥らせようとしたもので、決してキリスト教を特に保護し、一向宗と法華宗とを迫害しようといふやうな志向はなかつたのであつた。彼れがキリスト教に比較的好意を表したのは、それが信長の政策に害を及ぼさず、むしろそれを利用して自分の用に供するものが出来たからであつた。

兎にも角にもキリスト教は僅かの間に日本國中の重要な部分に擴がつて、一般民衆の頭腦に異國情調を味はしめた結果、長い間太平洋中に孤立して、支那の外、外界の文明の影響を受けなかつた日本は、遠い歐羅巴と握手して、そこから新奇な土俗と思想とを輸入することが出来たのであつた。かうして天正十年には、九州の大友、有馬、大村の三大名は、イスパニヤの國王と、ローマ法王とに使者を出すまでになり、年の若い伊東マンシ(Mancio)、千々岩ミゲル(Miguel)が正使、原マルチノ(Martino)中浦ジュリアノ(Juliano)が副使となつて、印度海路を経てローマに發遣されたことは驚くべき事實であつた。かうした外國思想の輸入が、わが國

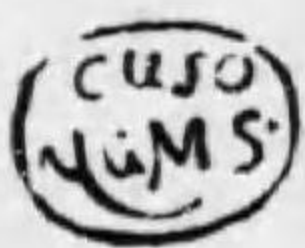
大名多く基督教に歸依す



大友宗麟章印



細川忠興章印



黒田長政章印



黒田如水章印

民の文化生活にどれだけの影響を與へたかといふことは極めて重要な問題であつた。一外人はそれらの日に於けるキリスト教の感化の少なかつたことを、美術上にそれを示すやうな何等の痕跡がないことで證明しようとしたが、それは後代に因へられた、あまりに偏狭な斷定であつた。その頃約五十に近い大名がキリスト教徒となつて基督教名を持つてゐた事、またローマ字の印章を用ひたり、歐文の旗章(二六)を用ひたり、歐羅巴式墳墓(二七)を營んだり、十字架(二八)の意匠を器具や紋章に用ひたりしたもの、多かつた事を見ても、西歐文化の影響が少くなかつたことは十分に證明せられるのであつた。

(1) "The Christian Daimyos," pp. 74, 75.

(2) 『日本西教史』上卷、八四三、八四四頁。バルトリの『耶穌會史』には、この時のことを天正七年ダリニヤニの來た時のことと混同して、信長が「その宮殿に面した、山と町との間にある入江を埋め、二十日にしてその工を竣り、埋立地とそれに隣接してゐる二軒の家屋の敷地とを宣教師に與へた。」と記してゐる。けれども、この事實は天正九年のことである、恐

らくヅリニヤニの來朝の年と、安土で信長に謁見した年とを混同し、またオルガンチノとヴリニヤニとを混同したものであらう。私の考では天正七年にオルガンチノが許可を得たのは僧院と寺院との建築であつて、セミナリヨ建築の許可を得たのは、天正九年のことであると思はれる。

(三)『信長公記』卷十四、天正九年二月二十日の條參照。

(四)同上、二月二十三日。——「二月廿三日、きりしたん國より、黒坊主參り候。年之齡廿六七と見えたり。惣之身の黒き事牛之如、彼男健やかに器量也、爾も強力十之人に勝たり。伴天連召列參、御禮申上。誠以御威光古今不及承。三國之名物ハ様に希有之物共細々拜見、難有御事也」。

(五)『信長公記』卷十四。——「十月七日(中略)伴天連所へ御立寄、爰に而御書請之様子被仰付」。

(六)同上。——「十月廿日より、伴天連、北南に二通新町鳥打へ取續立させられ候はん由候て、御小姓衆御馬廻衆へ被仰付、足入沼を填させ、町屋舖被築、御書請在之」。

(七)『The Christian Daimyōs』, p. 75.

(八)グレンコリヨ十三世の偉績を書き記した古書の中に、「Seminario Anzucchi, principale Parlezza nel Regno del Giappone.」と題する圖が載つてゐる。

(九)村上直次郎氏『安土桃山時代の基督教』、『安土桃山時代史論』所收、三五六頁(參照)。

(一〇)『日本西教史』上卷、八八七、八八八、八八九頁。

(一一)『The Christian Daimyōs』, pp. 1-16.

(一二)『The Christian Daimyōs』, pp. 21, 22.

(一三)『安土桃山時代の基督教』三五八頁。

(一四)早稻田大學教授勝俣詮吉郎氏の談話に基づく。

(一五)Hildreth: "Japan as it was and is," p. 80. 及び "The Christian Daimyō," pp. 21, 22.

(一六)『室町家御内書案』所收文書。

禁 制

幾利紫巨國僧 波 阿 傳 連

一 甲乙人等亂入狼籍事

一 寄宿事付惡口事

一 相懸非分課役事

右條々堅被停止訖。若違犯輩者。速可被處罪科之由。所仰下也。仍下知如件。

永祿三年 一 一

左衛門尉藤原
對馬守平朝臣

(一七)『Cartas de Japao』, p. 538.

(一八・一九)南蠻寺を建てた時、それに與つてゐたのは、我が國の書物では一般に宇留岸となつてゐる。これは云ふまでもなく Organtino であらうが、オルガンチノは永祿年間には

まだ我が國へ来てゐなかつた。また信長が南蠻寺と命名したといふ事について、日本の基督教史に深い造詣のあるスタインヘン (M. Steichen) 氏はそれを否定し、その著『クリスチャン・ダイミヤウズ』に於いて、オルガンチノは千五百七十年 (元龜元年) 以前には日本にゐなかつたこと、従つて同年の末までは信長に京都で會見しなかつたこと、ウルカンといふのはオルガンチノではなくて、時代の佛僧に比へて、閑雅な、篤學な、善行のある外人であつたらうが、しかしそれにしても信長は彼れに尺寸の土地をも與へなかつた。シエスイット寺院の出来たのは千五百七十六年 (天正四年) 以後のことで、その前には普通の日本人の家を借りて説教所を開いてゐたこと、及びそれらの説教所は信長と佛僧との間に論争の種となるほどのものではなく、佛僧はそれを輕侮して南蠻寺と呼んでゐたことなどを列擧し、日本の歴史に現はれて来る南蠻寺の記事を否定してゐる。そして最後に氏は、"This example, like several others, shows that the complainant historians, who flourished under the Tokugawa rule, did not even recoil from absurdity, when it was a question of throwing discredit on the Christians and on Nobun's, their protection." といふ婉曲の辭を以て此の誤りを正す批評の結語としてゐる。けれども永祿三年禁制文案の遺つてゐるところから見ても、ホルドレンスの記述してゐるところを見ても、シエスイットの説教所といふものが、邦人の目に立つほどの外觀をそなへて居り、従つてそれを犯すものがありはしないといふ虞のあつたことが知られる。また南蠻寺の鐘、或は香盒と云はれるやうなものが遺つてゐるところから見ると、信長がさう命名したことを一概に否定することも出来まいと思ふ。

これらの日の基督教に関する記録は餘りに多くないが、その中一番汎く知れ渡つてゐるのは『南蠻寺興廢記』で、その外前述の『切支丹宗門來朝實記』を始め、『吉利支丹物語』、『契利斯督記』、『伴天連記』などがあり、これらは國書刊行會出版の『續々群書類從』第十二編に收めてあるから、就いて比較を試みられ度い。歐文の書籍では、前に屢々引いたスタインヘン氏の "The Christian Daimyōs," が一番参考になり、また Crasset の "Histoire de l'Eglise du Japon," の外務省譯『日本西教史』が手に入り易い。

(二〇) 理學博士早田文藏氏の『伊吹山植物採集記』(『學生』第五卷第八號所載) 中に、この問題に觸れた記事がある。博士は、この山に於いて他では見られない珍奇な植物の發見せられるのは、或はその當時の遺物ではないかと思はれると述べてゐる。その一例として、博士の擧げた植物は、キバナノレンリサウ、カラスノエンドウなどである。キバナノレンリサウの如きは歐洲では普通の植物であるけれども、我邦では北海道を除くの外、伊吹山でなければ見ることの出来ぬ珍種である。これらから見ても、宣教師が伊吹山に藥草を植ふたといふことは、むしろ肯定される材料が多いことになるのであつた。また私の友人織田一磨氏は佛人エドム・ガロア氏と共に伊吹山に昆蟲の採集を試み、イブキズメといふ伊吹だけにしか産しない蛾の一種を採集し得た。これが歐洲原産であることは、故名和昆蟲研究所技師長野菊次郎氏も云つたことで、旁々以て或種の歐洲藥草が日本に輸入せられたといふことは十分に想像が出來た。

(二一) "The Christian Daimyōs," pp. 20, 24, 41, 43. 及び『日本西教史』上卷、三六七、三

六八、三七二、三七三頁參照。

(二二)同上、六八、六九頁及び『信長公記』卷十一參照。

(二三) Edward Dillon: "The Art of Japan," p. 59. —「時代の藝術の中に西歐の影響と思はれるやうな何の痕跡も残つてゐないのは、十七世紀の初頭に基督教が禁せられ、國土が外國交際に対して閉鎖せられたからであつた。事實上、新宗教の結果と見るべきものは、火器の知識と喫煙の實行くらゐのものであつた」。

(二四) "The Christian Daimyōs," pp. 367, 368, 369.

(二五) 大友宗麟の印章は、二重丸の中に FRCO (フランシスコの略) とあり、黒田孝高のは中心に十字架があり、その周圍に二重輪があり、外輪と内輪との間に Simeon Josui とあり、細川忠興のには Tadaoqui、黒田長政のには Curoda M. S. と彫刻してある。

(二六) 『荒木船古圖』。早稻田大學教授勝俣詮吉郎氏の説に依ると、V. O. C. は Vereenigd Oost Indische Compagnie 即ち聯合東印度會社の略。それを逆さにつけたのである。

(二七) 京都帝國大學所藏、京都市北野延命寺(慶長五年九月五日、十三年三月十日及び十五年十一月七日付)、成願寺(慶長十四年)境内發見の基督教徒墓碑參照。これらの碑は大抵縦長であるが、一つは横長であり、中央に日本の氏名とクリスチャン、ネームを刻み、その上に十字架が刻んである點に於いて一致してゐるから、この時代の流行型と思はれる。

(二八) 堀江清足氏所藏、南蠻寺描金螺鈿盒子には、十字架及び歐字が意匠してある。また祇園守、丸に十字(島津氏紋章)などは、皆十字架から發達したもので、或はそれを隠して作ら

れた紋章である(生田目經徳氏「紋章の起原」參照)。

第三節 安土宗論

法華宗の弘布

日蓮宗二十箇寺

一向宗と竝んで、室町末期の民衆の間に勢力のあつた宗教は法華宗であつた。法華宗はまた日蓮宗とも呼ばれ、一部の人はこれを佛教の宗門外に置かうとしてゐた。日蓮宗は鎌倉時代の末から勢力を扶植し始めて、信長の時代には最早や大きな広い分布を持つてゐた。殊にそれが宮中府中の權門に勢を得るに至つたのは、元亨の頃日靜上人が尊氏に召されて鎌倉から京都に來り、六條に本國寺を造營してからであつた。日靜に次いで日傳が現はれ、日傳の下に日秀が出て本滿寺を建立し、同時に日什、日隆などの英僧が現はれて、妙滿寺、本能寺などの大伽藍を創立し、京都に於ける日蓮宗の勢力は次第に強大となり、享祿、天文の際には「日蓮宗二十一箇寺」の稱呼を見るに至つた。日蓮宗の他宗に異つてゐた點は、それが他宗を誹謗し、自分達の宗門を稱揚して、自分達の宗門に人を引き入れようとする折伏的態度であつた。折伏には力を要した、戦闘を要した。戦闘には敵がなければならず、敵があれば嫉まれ恨まれ傷けられざるを得なかつた。かうして日蓮宗は、いつの時代にも自分達の周圍を法敵で取

日蓮一揆

り捲かれたが、彼等はそれを攻撃し、破壊して、自宗を堅固に安全に發達せしめようとして盡力した。彼等の宗旨を宣傳する態度は、全く奮闘的であつた、努力的であつた。どんな障碍も、どんな困難も、進んで之を排撃芟除することを厭はなかつた。そこに日蓮宗の強點があり、また弱點も横はつてゐた。

一向、日蓮
兩一揆の衝突

僧兵と一揆とが結合せられて起つた宗教一揆は、室町時代末を彩る一つの濃厚な色彩であつた。その一揆は二種あつて、一は昔ながらの叡山の僧兵を以て代表せられ、他は新興の一向一揆と日蓮一揆とを以て代表せられた。日蓮一揆は古い歴史を持つてゐるけれども、その最も著るしいのは天文元年から二年に互つたそれであつた。それの起つた直接の原因は、全く一向一揆であつて、間接の原因は時代の僧侶信徒の間に漲つてゐた暴力抗争の思想であつた。天文元年八月二日、一向一揆と細川晴元との間に戦があり、四日にはそれと木澤長政とが戦闘し、それが因をなして五日から大和、河内、和泉、攝津の大騒亂となり、その七日には六條本國寺を中心とする日蓮宗徒が、細川方に味方することとなり、約四千人はそこに集まつて示威運動をなし、十二日には野伏の徒もそれに加はつて、遂に十六日に於ける一向、日蓮、兩一揆の大衝突となつた。日蓮側は一萬人許り、一向側は五千人許りで、相互に可也な死傷者を出したが、

日蓮一揆の
狂熱的態度

結局一向一揆が敗戦したので、二十三日には山科に向つて進軍を開始し、その翌日は六角定頼の兵と連合して本願寺を焼討し、一字も残らずこれを焼夷した。かうした成功は日蓮一揆を次第に育んで、一時的の團體であつたものが、遂には永久的のものになり、それが隊を組んで京都の町を練り歩いたやうなことがあつた。二年三月五日、一向一揆が伊丹城を攻圍した時、木澤長政は日蓮一揆を率ゐて赴き援け、廿九日に一向一揆を撃ち破つた。五月には細川晴元は京都に於ける日蓮宗二十一箇寺の衆徒と聯合して、大阪の石山を攻めたが、一向宗徒はよく防いで廿日には兩軍の間に和睦が成り、爾後日蓮一揆も暫らくその鋭鋒を收めてゐた。日蓮一揆は手々に、旗の面に大文字で「南無妙法蓮華經」と書いたのを押し立て、狂熱的信仰と、決死的勇氣とを以て敵陣に突入したので、その向ふ所は風の草を靡けるやうに靡いた。彼等の武器は美しく華々しくて、窮乏に慣れた京都の人々の眼を驚かした。

天文五年の法華の大亂は、元年、二年のそれにも優つて大きかつた。それは叡山と日蓮宗との宗論に基づいたもので、幕府は越前の朝倉氏及び若狹の武田氏に命じて、幕府を警衛せしめたほどに、その騷擾は甚だしかつた。七月十一日には、一旦兩者の確執が解けて、平和に事が解決出來さうであつたが、二十三日に至つて山門一揆は六角

定頼の軍と合し、總勢六萬許りで京都に押し寄せ、廿四日から日蓮宗徒との間に大格闘が開かれ、廿七日には日蓮側が敗戦して多数の死者を出した。その数は少くとも三千人以上に及んだといふから、この戦闘がどれほど激烈であつたかは想像せられる。かうした一揆の衝突はこれから後も續いて、永祿四年六月にも「法華宗拂」が、近江から入京するといつて騒いだことがあつた。

日蓮宗は鎌倉時代の恐怖であつたやうに、室町時代末にも矢張り一つの大きな恐怖であつた。信長はそれをよく知つてゐた。彼れは勢力を得て京都に入り、安土に築城して權威が近國を壓するやうになつてから、何かの機會を捉へて、日蓮宗に打撃を與へようといふ志を懐いてゐた。力を讚美する日蓮宗は、力に憧憬れてゐた信長と容れるべき筈がなかつた、否、むしろ信長には、日蓮宗は一種の政治的脅威であつたかも知れなかつた。ところが天正七年になつてその機會が來た。

同年五月中旬、關東から淨土宗の僧靈譽が安土に來て七日の法談を試みた。聽衆の中に日蓮宗の建部紹智、大脇傳介の二人がゐる不審をかけたから、靈譽は「お前達のやうな若輩の分る事ではない。お前達が常に歸依してゐる法華僧を出したら、不審を蒙らさう」と云つた。この事が信長の耳に入つたので、彼れは長谷川秀一、菅谷長頼等を

日蓮宗と信長

淨土の法談から

して、京都から日蓮宗の學僧を召し下さしめた。頂妙寺の日琬、常光院の日諦、久遠院の日淵、妙顯寺の大藏坊、妙國寺の普傳等は、二十五日に安土に着き、翌朝善行院に會合してそれ／＼手筈を定めた。長頼等は信長の命を受けて兩者の間に調停を試み、淨土宗側では溫和しくそれに應じたのに、日蓮宗側では種々相談して返事が後れたので、使者が屢々來て、「法論をするか、また和談にして歸るか。法論をするならば、若し問答の敗けた時は、京都と信長の領國とにある日蓮宗の寺々を破却するといふ一札を出せ。」と迫つた。日蓮宗では當惑して、「萬事上意に任せます」と答へた。

と、信長は二十七日に淨嚴院に集つて、問答を行ふべき旨を命じた。日蓮宗側からは、日琬、日諦、日淵が、淨土宗側からは安土の西光寺の聖譽貞安、上野の最感寺の靈譽玉念、洞庫信譽の三人が出で、判者として南禪寺の鏡叟景秀、その伴僧華溪正稔、法隆寺仙覺坊榮甚、その弟子の因果居士の四人が席に列ることになつた。問答の衝に當つたのは日琬、日諦と、聖譽貞安とであつた。問は先づ貞安から發せられ、日諦の反問となり、貞安の躊躇となつたところへ、日蓮宗の僧は自宗に念佛のあることを主張して敗色が見えたが、判者の因果居士は尙ほ法論を續けしめ、問答は進み進んで、貞安は「四十餘年の文を以て爾前の經を捨てるならば、方座第四の妙の一

安土の淨嚴院で宗論

因果居士

貞安と日淵

字は捨てるか捨てないか」と勢鋭く切り込んだ。日蓮宗側では「方座第四の妙」といふことが分らないので、互に言ひ争つてゐると、因果居士は、「眞實の妙から来る義であるから、法華の妙と見聞した。もう法論を止めよ」と云つたので、日珖はその不公平を憤つて因果居士に攻めかかり、更に「妙」について論戦が起り、貞安が「それは法華の妙だ、お前達には分らぬのか」と云ひ、日淵が「何といふ愚問だ、法華宗に對して法華の妙を捨てるかと尋ねるとは！ お前は云ふことにつまつて戲言を云ふのか」と詰め寄つた。浄土宗側には何の答もなかつた。そこで日淵は奉行に向つて、「御聽の通り申しつめました」と云ひ、日珖は問答の規定に従つて袈裟を取らうとした。と、玉念は黙つて立ち上り、「勝つたく」と連呼した。多数の人々は鬨を作つて日珖を包圍し、その五條の袈裟を切り取つてしまつた。日淵は法問に勝つても袈裟を取られては濟まない、玉念のそれを奪はうとしたら、群衆は彼れを宙にさし上げた。奉行達は杖で群衆を追拂つた。杖は日淵の面を掠めて、血がたら〜と流れ出た。武士は日淵を局に入れて警衛した。妙國寺の普傳は逃れて町に隠れてゐたが、やがて見出されて、大脇傳介と共に局に入れられた。

日蓮宗に對する壓迫

信長は貞安を呼び出して、「今日の宗論は近頃の大手柄だ」と賞めた、へ、傳介に對

信長の宗教政策

しては宗論で世を騒がす動機を作つたのは不都合だと云つて、堂の下に引き下ろしてその首を刎ねさせた。普傳もまた引出されて、芝生の上で首を打たれた。信長は普傳を酷く忌み嫌つてゐた。それは彼れが日蓮宗から賄賂を取つて、日蓮宗が他宗よりも優つてゐることを言ひ觸らしたのみならず、その行爲や言説にも虚偽が充ち満ちてゐたからであつた。日珖、日珖、日淵の三人もまた信長の前に呼び出された。信長は「自分にはよくは知らないけれど、誰一人日蓮宗を善くいふものはない。それは恐らく日蓮宗が他宗に食つて懸るからだらう。もうかうなつた上からは、一筋に思ひ切つてしまふか、又は宗旨變へをするか。直ぐには返事が出来まいから、よく相談するが可い。」と云つて、城に歸つた。日淵は法の爲めに一身を犠牲に供しようとしたが、さうしても事件は圓滿に解決しないので、宗旨の存続と、そこに衆合した僧俗一百の生靈の救済との爲めに、日珖、日珖と相談して、奉行の命令する儘に、今回の宗論に負けたと、今後は他宗に對して誹謗の言を放たぬこと、その代りに日蓮宗は従前通りに存立せしむることの三箇條を含んだ起請文を書いて差出し、それで事件の結末がついた。これを歴史家は一般に「安土宗論」と呼んでゐる。

安土宗論から窺ひ得られる信長の宗教に對する政策は、決して宗教としての日蓮宗

を迫害しようとしたものではなかつた。かうした風に、信長が浄土對日蓮の宗論に於いて、強ひて日蓮宗に都合の悪い結果を造つたのは、それが一向宗と共にそれらの日に勢力が強く、兵力財力を擁して政權に對抗し、ともすれば政治の局に當つてゐるものよりも優勢であつたからであつた。天文元年以後の日蓮一揆の執つた行動は、宗教家としてよりも寧ろ政治家としてのものであつた。しきりもなく騷擾、戦争を惹き起して、社會の安寧秩序を破壊するやうな團體を、その儘に存立せしめて置くことは、國家を統一しようといふ志を持つてゐる信長の承認するとの出来ないところであつた。

信長は日蓮宗を騷擾團體と見て抑壓したのであつて、宗教團體として迫害したのではなかつた。宗教としての日蓮宗に對して、どんな悪意をも懐いてゐなかつたとは、彼れが僧日乗を拔擢して重地に置き、それに重大な仕事を取扱はせたとでも證明せられた。しかし信長が、佛教よりは神道に比較的多くの好意を持つてゐたとは事實で、そこに彼れの傳統的な信仰の影がほの見える。彼れは神道主義の家に生れて、他の大名よりはより多く、神道を理解し、皇室を理解し、國體を理解する便宜と教化とを持つてゐた。その事は信長の宗教政策、政治方針を知る上にも重大なことであつた。日本史について造詣の深いグリッフィス博士などは、信長の佛教に好感を持たなかつたこと

信長は神道主義

を論じて、「信長が佛教徒を好過しなかつたのは、彼等が常に戦争を好んで叛服常なかつたのと、自分自身が熱心な神道主義であつたのに基づいてゐる。彼れはジエスイットの宣教師を保護し、それに對しては様々の便利を與へた。」と云つてゐる。かうした斷定を老博士が與へたのは、全く信長を内包的に理解した結果であつた。個人の行動は、外延的原因のみでは起されなかつた。外延的と見ゆる動因の背後にも、深い、重い、眼には見えぬ内包的な動因がいくらかも潜んでゐて、それが大夫の操人形を操るやうに、個人の意志、感情を牽制してゐるのであつた。私は信長の宗教政策を勿論政治上の利害から割り出したものとするに異議はないけれど、それを感情が承認したのには深い傳統的な或物トラディショナルがあつたと考へたいのであつた。

(一)『二水記』天文元年八月三日の條參照。

(二)『足利季世記』參照。

(三)『二水記』天文元年八月七日の條參照。

(四)同上、十六日、十八日の條參照。

(五)同上、廿四日の條及び『殿助往年記』同日の條參照。後者には次の記事がある。——「山科本願寺。同自江州一發向。並法華宗徒。京數萬人罷立合力云々。其前後騷動無限。」

(六)『言繼卿記』天文二年三月七日の條。——「日蓮宗打廻云々、仍中御門、吉田侍從同道候て

見物、三條京極にて見物。一萬計有之、馬上四百餘騎云々、悉地下人也。兵具以下驚目物也。雨下之間、少々歸候了。

(八)『細川兩家記』參照。

(九)『二條寺主家記』——「二月之頃。於京都叡山花王院。阿彌陀經之談義有之。日蓮宗ニ杉本ト云者。談義之坐エ望テ不審ヲ立。一句以ニ非道ニ致シ詰議ニ問。被ニ問尋ト云ヘドモ。頗與ニ恥辱ニ聞。山内ニ聞之。大衆怒テ花王院山上ヲ追出云々」。又『天文法亂松本問答記』をも參照せられたい。

(一〇)『殿助往年記』、天文五年七月十一日の條。——「江州蓮藤。與ニ木澤。於當所會。山門與ニ日蓮ニ相尅。無事扱有之云々」。

(一一)同、二十三日。——「自山門出張、江州衆彼是都合六萬人計。東山所々居陣」。

(一二)『二條寺主家記』參照。

(一三)『殿助往年記』、天文五年七月二十七日。——「山門諸勢切入。京中日蓮衆廿一ヶ寺。其外下京悉放火。上京過半炎上。日蓮衆其外雜人打死。不知其數。凡三千人計者考之。其外不知ニ際限。云々。誓願寺講堂百萬返等炎上也」。

(一四)同上、永祿四年六月の條。——「自江州。號ニ法華宗拂。京入之由。類風聞也。京中相騒也。公方御物共被ニ隠之云々」。

(一五)安土宗論に關しては、文學博士辻善之助氏の『安土宗論』、『安土桃山時代史論』所收といふ論文がある。その史料も列擧してあり、叙述も詳細であり、評論も要を得てゐる、但

しシントイズムとの關係に言及せられなかつたのは遺憾である。

(176) Griffis: "Japan in History, Folk-lore and Art," p. 154.

第四節 本願寺迫害

十一のトロー

義昭と本願寺

石山城の孤立

信長から河内に逐はれた義昭は、古い馴染の本願寺と結托して幕府の復興を計つたが、本願寺はまた義昭を通じて中國の毛利氏と握手し、その力を借りて信長に反抗しようとした。元龜以來、本願寺は信長に反抗したが、それは將軍たる義昭の勸誘に基づいたもので、自分自身から好んで信長を敵とした譯ではなかつた。和解の勅書を受けたこと、信長が撤兵したこと、が、一時信長對本願寺の關係を緩くして、それ以後は、著るしい衝突もなかつたが、天正二年に本願寺顯如が義昭にそ、のかされて、信長の屬城たる中島城を攻めてから、兩者の關係は再び斷絶した。信長は兵を率ゐて直ちに大阪に入り、住吉、天王寺を焼き、玉造で一揆軍と戦つて一旦京都に引還した。然るに三好笑岩、池田勝政ら信長に従はぬ武士達が一揆軍に應じて兵を挙げ、中島城の留守の荒木村重、高山右近らが一揆軍の爲めに打ち敗られたので、信長は天正三年四月再び兵を率ゐて八幡から河内の若江に出で、高屋城に三好笑岩を、堺の新堀に十

毛利氏の石
山援助

河因幡守を攻めて之を降し、大阪の石山本願寺は殆ど孤立の状態に陥つた。

そこで信長は守兵を留めて京都に還り、徳川氏に救援軍を送つて長篠で武田勝頼の軍を破り、その威力は益々充實するばかりであつた。義昭は毛利氏と上杉氏とに、信長を夾撃せしめる計畫を立てたが、毛利氏は單に糧食を大阪に送つただけで、出兵して本願寺を援ける段にまで進まなかつた。顯如は己むを得ず和を信長に請うたが、それは一時敵の攻撃を緩めて、その間に再戦の準備を整へようといふ策略であつた。同時に毛利氏は肥前の松浦鎮信、龍造寺隆信と聯合して、海上から信長に當らうとした。かくと知つた信長は、四年四月、惟任光秀、細川藤孝等に命じ、急に石山本願寺を攻撃せしめた。顯如は籠岸ろうのきし、木津の二城を修築して河口を塞ぎ、難波口から海路によつて四方に通じ、檣を諸國の門徒に傳へて應援せしめた。信徒は應援の爲めに遙々と諸國から集つて來たが、織田軍に支へられて大阪に入ることが出来なかつた。紀伊の海草郡の雜賀一揆、那賀郡の根來寺の僧侶は、有田郡の岩屋城主畠山貞政と聯合して本願寺に應じ、附近を抄掠して和泉に入り、貝塚、中野、千石堀に壘を築いて織田軍を牽制した。雜賀一揆の首領であつた鈴木持久の一人豊若は、まだ十五歳の少年であつたが、順禮の姿に身を變じて敵軍の中を潛り抜け、石山に入つて勇猛の働きをしたと云ひ傳へられる。

紀伊の一揆

へられる。

天正五年二月、信長は安土を立つて京都に出で、そこで諸將の兵十五萬を勸して、宇治から河内を経て和泉に入り、紀伊の諸一揆を一撃の下に破らうとした。これより先き、雜賀三城みかぢと根來の杉坊の衆徒は、信長に内應して織田軍を誘導する約束を結んだので、信長は軍の行動を開始するに至つたのであつた。織田軍の大兵は先づ三城の嚮導によつて貝塚を攻め降し、それから兵を二手に分つて、一は海道から他は山道から、紀伊に入つて雜賀に迫つた。一揆の首領鈴木持久は、防戦に努めたけれども到底信長に敵することが出来ず、遂に出でて降つた。そこで大兵は根來寺に向つたが、これ亦た間もなく投降し、岩屋城の畠山貞政も出奔し、雜賀、根來の衆徒は今後本願寺を助けなまいといふ誓約をして、紀伊一圓は全く平定した。三月廿一日、信長は軍を撤し、二十五日京都に、二十七日安土に歸つた。

石山本願寺を支持するものは、皆狂熱の信仰を持つた信者であつた。これを軍事的に觀れば勿論烏合の衆であつたけれども、その團結は極めて堅くて、死もこれを脅かすことが出来なかつた。信長は度々石山を攻めて一撃の下に破らうとしたが、その計畫はいつも失敗した。そこで信長はそれを遠捲きに包圍して糧道を絶ち、防禦軍の自

織田軍石山
を包圍す

然に疲憊するのを待つてゐた。南方の紀州一揆は既に平定して、そこからの援助は絶えてしまひ、今は只だ海上から毛利氏がそれを援けるのみとなつた。しかも織田軍は石山の四周に壘を設け、川筋には兵船三百を泛べて、援軍と糧食との石山に入るのを妨げたので、石山は愈々全く孤立してしまつた。その時石山に籠城したものは凡そ五萬騎で、一日の食糧は米二百五十石を要したといふから、一箇月七千五百石、一箇年九萬石を要した譯であつた。そして籠城は元龜元年から引續き、その間に小康を得たけれども、天正四年以後は殆ど全く孤立して、僅かに毛利から米二萬俵の移入があつたばかりであつた。顯如は屢々檄を諸國の門徒に發して、人員並びに糧食の供給を求めた。その檄文は簡單であつたけれども、護法の爲めに勇氣を振作して法敵に對抗し、特に糧食を送つて石山を助けよといふ意味のもので、短い文句の中に無限の權威と情味とが籠つてゐた。檄文は門末を動かして、所在には土寇が起り、法敵を斃さねば止まぬといふ意氣を示した。石山に籠城した一揆軍の決死的行動は、百戦を経過した織田軍の勇士を驚かしめるほどであつた。彼等は彌陀の畫像の裏面に署名して血判を押し、死を賭して護教の戦鬪を闘ふことを誓つた。かうした決死の一揆の前には、戦争の經驗を嘗めた勇士達も山田の案山子であつた。歳まだ十五に満たぬ豊若は、小櫻織の甲

石山籠城の
糧米一箇年
九萬石

信徒誓書に
血判す

を著け、連錢葦毛の小馬に跨つて敵陣中に馳突し、筒井順慶部下の勇士藤團藏と渡り合つてその首を取つたと傳へられる。

一體信長が本願寺を攻めたのは、自分の宿志たる中國征伐を實現するに當り、毛利氏と提携してゐる本願寺が、背後から自分の軍を脅かすことを恐れ、先づこれを攻め破つて後顧の憂を絶つ積りであつた。ところが宗教的信仰を背景としてゐる石山本願寺は、その信徒の氣力と富力とを以て猛烈に反抗し、容易に落城しさうにもなかつたので、天正六年には戦艦六隻を泛べて海上を扼し、毛利氏と本願寺との連絡を完全に絶つてしまつた。この時、毛利氏と聯合して信長を撃たうとした上杉輝虎は既に死亡し、武田勝頼もまた容易に行動を開始することが出来なかつたので、本願寺の勢力は日に衰へ、その運命はほゞこれを窺知することが出来た。然るに中國征伐に赴いてゐる羽柴秀吉は、尙ほ未だ功を完了するに至らず、つい脚下からは松永、荒木の徒が叛き、松永は既に誅に伏したけれども、荒木の謀叛は攝津の武士を動かし、皆信長に對して反抗する氣勢を示したので、信長は本願寺と講和するのが利益であると考へ、朝廷に請うて顯如が兵を弭めることを諭して貰つた。顯如は毛利氏と同盟の約束があるから、双方同時に和睦するならば同意しても可いが、此方だけ媾和して、毛利を攻め

石山攻撃の
目的

勅書を本願寺に賜ふ
教如上人

るのでは媾和に應ずることが出来ぬと云つた。しかも信長の中國攻撃の日は愈々接近して、背後に石山の一揆軍の存在するを許さぬ事情の下に在つた。そこで天正八年三月、再び朝廷に請うて正親町天皇の宸翰を賜はり、遂にそれに依つて局を結ぶことが出来た。顯如は勅書を賜はつたことなり、この上の籠城も困難なので、信長と媾和條約を結び、四月十一日に石山を開城して、紀伊の鷲の森に退去した。然るに法嗣教如上人は、大阪に踏み止まつて兵備を修め、信長に對して反抗する氣勢を示したので、

教如上人筆蹟

獲金三十枚

顯如は教如との關係を絶つて信長との條約に違背しなかつた。信長は和約成立の際、顯如に黄金三十枚、その裏方に二十枚を送り、下間按察使、下間刑部その他の有力者にもそれら黄金を贈つて、事件は圓滿に解決した。實に長い間の對抗であつた。かうした對抗の長く出来た所に、本願寺の強大なる勢力と、顯如の雄偉なる人格とが閃めいた。顯如が鷲森に退去した後、信長がそれを暗殺せしめようとしたといふ説があるけれど、信長對顯如の干係はその後圓滿に繼續した。

かうした本願寺の勢力と、眞宗の弘布は、その教義が時代の人心に投じたこと、代々英僧が輩出したこと、に由つたと思はれる。門跡中最も英雄の聞えのあつたのは

蓮如上人

『御文章』

實際的宗教

蓮如であつた。彼れは親鸞の創設した眞宗を更に一層通俗化し、平易化して、誰にも、何處でも、何時でも、それが耳に入り次第直ぐ理解出来、直ぐ實行出来るやうにした。蓮如上人の思想を最も的確に現はしてゐるものは、『御文章』として今日信徒の間に傳誦されてゐる書翰集であつた。それは眞に眞宗を弘めた一大宣傳書であつた、それがあつた爲めに眞宗は今日を迎へることが出来たのであつた。その文章は平易で、暢達で、しかも刺戟力が強く、田に耕す農民、海に漁る蟹女などのやうな低い地位を社會生活の上に占めてゐる者にも直ぐ理解が出来、直ぐ實行せられるやうに説いてあつた。中でも文明三年十二月十八日、吉崎の漁師彌藤次に與へたものは、彼れの宗教理想の酷だしく實際的であつたことを證示するものであつた。蓮如の考では、自ら胸の中に起つて来る邪惡の觀念、妄念妄執の心意を強ひて止める必要はなかつた。商人は商業に専念し、漁師は漁撈に精勵し、武士は武藝に熟達すればよかつた。かうした淺ましい罪業にばかり携はつてゐる者をも救ひ助けようといふのが彌陀の本願だと信じ、それに頼り、それに頼つたならば、その一念の信が如來の救助を齎らして來るのであつた。されば人は命のあらん限り、報謝の爲めに念佛をしなければならぬ。これが眞宗の安心、決定したる信心の行者といふものである。——かう蓮如は考へたので

あつた。現世を享樂して、生活の最善を盡くさうとする所に、彼れの教理の根本觀念が宿つてゐた。彼れの人生觀は著しく寂しい樂觀であり、また甚だしく賑やかな悲觀であつた。その奮闘的なストレニアスな生活を力説した所に、眞正の嚴肅な悲觀が宿つて居り、「我や先、人や先、今日とも知らず、明日とも知らず、後れ先だつ」のが人類の浮生それ自身である故に、後生の大事を心にかけて阿彌陀佛を頼み、一向に念佛すべきものであると教示した所に、眞摯な、強烈の樂觀が横はつてゐた。哲學者の科語を以て説けば難かしい眞宗の教義も、所詮は「能發一念喜愛心。不斷煩惱得涅槃。」といふ宗祖の一句に竭きてゐた。苦しい陸路を行くよりは、楽しい水道を行かうとする所に、この宗教の眞諦があつた。どんな無學な漁民も、どんな文盲な農民も、凡夫としての煩惱から擺脱することなしに、聖人と同じやうな涅槃を得ることが出来ると思つた所に、この宗教の實行力、宣傳素が潜んでゐた。

それらの日に淨土眞宗で朝夕の勤行に用ひた二つの重要なものは、『正信念佛偈』と諸種の和讃とで、さうすることはまた蓮如上人から始まつた。和讃には梵語のもの、漢語のもの、邦語のもの、三通りあつたが、蓮如が採用したのは、無論、無學の民衆にも理解される邦語の『淨土和讃』、『高僧和讃』、『正像末淨土和讃』など、親鸞の作つ

和讃の音楽的發展

獨唱 初帖和讃 (中拍子) 大村恕三郎譯譜



合唱



鉢叩き

見方
しりぬ

真宗の勢力
と政治家

たものであつた。和讃はキリスト教の讚美歌に比すべきもので、元は諸種の講式から起つたのであつた。一切の宗教は皆音楽を以て人心を鼓舞し、煽揚し、統一しようとする形式を帯んでゐた。一向宗に於いても盛んに和讃を用ひて、信徒の信仰心を統一し且つ狂熱に導かうとした。それが平安朝の頃から一部の僧侶の間に行はれ始めた通俗な宗教樂、即ち空也僧鉢叩と合體して、一般の耳に入り易い宗教的歌謠となり、遂にはその頌俗化した説經と結びついて説經祭文といふ新しい民衆音楽を形造るに至つたのであつた。念佛稱名と和讃とは、一向宗が民衆心理を捉へることに長じてゐたことを表示する一つの象徴ともいふべきもので、そこにそれが非常な勢を以て全國に弘布した理由があり、又多數の力によつて宗旨の地位を高めたといふことの證據にもなつた。律宗や、禪宗や、眞言宗や、天台宗は、或意味では時代思潮とかけ離れた、實際的には價値の少ない時代錯誤のものであつたに反し、一向宗は時代精神の裡に蘊の芽をふき出した、實行し易い、世間的なプラグマチックなものであつた。

かうした教義と、かうした布教とが、時代の民衆の心意を牽きつけるチャームとなつて、真宗は一世紀の間に各地に弘布し、大名を倒し、爲政家に反抗し、顯如の如き英傑を出して十一箇年の間も、信長の如き強敵を相手に石山を防守することが出来る力を養

三河の一向
一揆

つたのであつた。安土時代に於ける本願寺は、最早立派な一獨立國であつた。そしてその門跡は、宗教上の法王であると同時に、一種の租税を徵收することの出來た政治上の帝王でもあつた。この宗教的政治を信長は根柢から轉覆しようとしたのであつた。彼れは不幸にも途中で死んだ爲めに、その志が果すことが出来なかつたけれど、豊臣秀吉がその遺策を實行して、信長が劔を以て行はうとしたことを微笑の裡に完成してしまつた。國家統治といふ政治的立場から見れば、信長の執つた宗教政策は、決して批難すべきことではなかつた。秀吉の高野山に對し、家康の三河の一向一揆に對した態度も、皆信長のそれと一致してゐた。

(一)『信長公記』卷八、天正三年四月六日、八日、十二日、十三日、十四日、十六日、十七日、十九日の條參照。

(二)『石山退去錄』參照。

(三)『信長公記』卷十、天正五年二月二日、八日、九日、十三日の條參照。

(四)『石山退去錄』參照。

(五)相州文書。

應染筆候。當寺之儀、去年以來籠城付而、諸人之疲可有_レ推量_一候。當流法儀破滅候べき事愁歎至極候。門下之輩被_レ抽_二忠節_一者、聖人にいたし奉_レ報講_一不可_レ過_レ之候。當國之太守累年

申談之旨、相かわらす本望候。就其調略之子細たる千萬無心之儀ながら、兵糧之馳送別而頼入候斗候。いかやうにも佛法再興之志を上げられ候べく候。殊坊主分之儀は、將又法信不可有_レ油斷。老少不定のならいにて候、いそぎ_レ信心決定候は、其上にも佛恩報謝之念佛申候。委曲按察法橋可_レ被_レ演説_二候也。穴賢々。

六月十三日

顯 如

相州坊主衆中
武州惣門徒中へ

(六)尾張龜崎の淨賢寺には『血誓の本尊』といふものが保存せられてゐる。裏面には信徒の署名があり、それに黒ずんだ生血の指痕が印せられてゐる。一見凄惨人をして戦慄せしめ、それらの日に於ける一向宗徒の意氣の如何に高く、如何に嚴肅であつたかを語つてゐる。

(七)本願寺文書。

今度は和談の事無_レ別儀とのをり、前右府馳走の由、いよく佛法繁昌の基と珍重仕候。つきてはとてもの事に、大坂退城候は、萬端可_レ然候はんよし、内々叡慮よりも仰被_レ入候。猶くはしき事は、源大納言、勤修寺中納言、兩人可_レ申候也。かしく。

本願寺僧正御房へ

御花押

(八)信長がその後信孝をして、阿波に行く途すがら、鷲森に顯如を襲撃せしめようとしたといふ説があるが、それは大きな誤で、石山退去後、信長對本願寺の關係が圓滿であつたことは、『本願寺日記』によつて證明する事が出来る。故星野博士の『織田信長の僧徒に對する

處置』參照。

(九・一〇)『御文章』參照。

(一一)『正信念佛偈』。

(一二)蓮容徳城氏『眞宗聖典』巻頭。

(一三)三河の一向一揆は、伊勢の長島一揆と共に最も頑強なものであつた。徳川家康の如き大政治家を以てしても、これを鎮定するのには、非常に苦勞をした。この歴史上顯著な一向一揆は、永祿五年十月末つ方三河野寺の本證寺で火蓋を切り、三河の一向宗徒對領主徳川家康の抗争となり、同七年二月二十八日の和議成立まで、足掛け三年の間戦争が繼續した。この戦争の後家康は領内の一向宗寺院を悉く破壊したので、天正十一年の復興まで十八年の間、三河國には一向宗は全く中絶してゐた。

第五節 武田氏の滅亡

越前が蕩平せられた時、信長の領土は上杉輝虎のそれと接壤し、遂に兩者の間には不和を生じた。しかし信長は直ちに正面から輝虎を攻撃しようとはせず、先づ陸奥の伊達輝宗、蘆名盛氏、越後の本莊繁長と結んで、背後から輝虎を脅かさしめる計畫を立て、然る後、天正五年八月を以て、柴田勝家、佐久間盛政等をして加賀に入らしめたが、兩軍は交戦せずして分れ、輝虎は六年正月關東に出で、北條氏政を破り、後願

の憂を絶つて西上する準備をしたが、不幸にも病氣に罹つて三月十三日に死んだ。子がなかつたので、養子の景虎と景勝との間に相續の争が起り、北國の天地には暗い内訌の雲が叢がらうとしてゐた。

景虎と景勝との争

景虎は北條氏康の子であり、景勝は輝虎の姉婿長尾政景の子であつた。血統がら云つても景勝が上杉家を嗣ぐべき位地にあつたので、評定の結果景勝を後嗣とすることに定めた。ここに於いて兩者の間に争が起り、臣僚は二派に分れて相對峙した。厩橋城にゐた北條長國は同族の相攻を不利となし、兩者の間に仲裁に入つて、越後上野を景虎に、能登越中を景勝に領せしめようとしたが、景勝はそれを聞かなかつたので、長國は景虎を援くることとなり、北條氏政、武田勝頼もまた援軍を送らうとした。景勝は勢窮まつて和を武田氏に請ひ、勝頼の妹を迎へて妻となし、上野を武田氏に讓ることを約した。そこで勝頼は兵を上野から退け、従つて北條氏の援軍も達しなかつたので、景虎は勢挫けて遂に自殺するに至つた。信長はこれを聞いて好機が來たと、天正六年佐々成政等を越中に遣はし、越えて八年一向一揆の諸寺を討ち、遂に能登、加賀、越中の三州を略することが出來た。景勝はこの有様を見て、織田の大軍のやがては越後に流れ入つて來る日のあることを豫期し、非常なる決心を以て、之に對抗するの準備をした。

武田氏の漸衰

準備をした。

木曾義昌

これより先き、武田勝頼は景勝との約束に基づいて上野を手に入れたが、この舉は北條氏との絶縁を意味するものであつたので、氏政は織田信長、徳川家康に結んで、武田氏を夾撃する計畫を立てた。武田氏は曩に長篠の役に大敗して、多く宿將を失ひ、その勢力は到底前代に比較すべくもなかつたのに、北條、徳川、織田の三氏を敵とすることになつたから、その運命は自からそれと定まつてゐるのであつた。福島城主木曾義昌は、晴信の女婿であつたから、勝頼とは義理の兄弟に當るのであつたが、勝頼の誅求があまりに甚しかつたので、遂に叛いて信長に通することになつた。信長は豫てから甲斐を討たうとして、天正九年には既にその準備をなし、部下の將士に對して甲兵を練らしめたが、偶、木曾氏の事が起つたので、直ぐ兵を動かす決心をした。

信長の甲州征討

信長は先づ諸將を近畿に配してその警備に任せしめた後、自分は瀧川一益、惟任光秀らの諸將を率ゐて信濃口から、徳川家康は駿河口から、金森長近は飛騨口から、三面一時に甲州に斬り入る計畫であつた。信忠は信長に先んじて天正十年二月十二日岐阜を發し、兵を二に分つて一は義昌を援くる爲めに木曾路から、他は伊那口から、信濃に入つた。家康は二月十八日濱松を發し、駿河の諸城を降して甲斐に迫つた。武田

氏もまた諸將を重要な地點に配して守備を嚴にせしめた。けれどもその部下には昔のやうな名將が少く、敵が来ると直ぐ城を明けたり、或は敵が来ない中に城を委て、走つたりするものが多いので、侵入軍は無人の野を行くやうに進むことが出来た。勝頼は諏訪まで進出して陣を張つたが、四圍の形勢が面白くないので二十八日に新府に退き、小山田信茂の説に従つて三月三日岩殿山に赴かうとしたが、途中にして欺かれたことに氣注ぎ、十日駒飼驛から道を轉じて天目山に赴いた。その翌日には瀧川一益等の兵が早くも来り攻めたが、その時將士は多く離散し、剩すところは僅に忠實な近親ばかりであつた。勝頼は嫡子の信勝と共に防ぎ戦つたが、それは殞ちる前の星の閃めきに過ぎなかつた。勝頼は間に乘じて夫人北條氏及び信勝を招き、共に自殺した。從士三十三人、侍妃十六人、從僧二人、みなこれに殉死した。勝頼は三十歳、夫人は十九歳、信勝は十六歳、花を折るにも譬へつべきであつた。信勝の最後は實に勇ましいもので、家の名残と斬り廻り、敵の將士をしてその天晴な振舞に感歎せしめた。何といふ儂なさだらう、武田氏の最期は！ 信長に横最肩したと評せられる『信長公記』の記者さへも、悲しい歎きの語を用ひることなしに、この一節を叙述することが出来ぬほどに、それは傷ましく哀れなものであつた。

天目山

勝頼の自殺

信長凱旋

信長は幸先の善い戦報に小踊しつ、三月五日に安土を發し、多少疑懼の念を懐きながら四月二日に甲斐に入つたが、その時には最早や大勢が定まつてゐた。依つて信長は十日古府を發して、二十一日めでたく安土に凱旋した。

武田氏の實力

武田氏の滅亡は餘りに脆きに過ぎた。勿論勝頼が最後に作戦を誤まつたこともその一理由であつたけれども、實は長篠役以來、その衰頹の氣運が動いてゐた。信長は非常に武田氏の勢力を重んじてゐたが、信立歿後、部下は威重ある統一を缺いて、次第に崩壞の芽が萌しつ、あつた。長篠役に宿將が多く陣亡してからは、眞に武田氏を懐ふ忠實の士が少くなり、退却の前に死を選ぶよりは、生の爲めに退却を敢てするやうな、懦弱、安逸、不眞面目の氣風が充ちてゐた。かうした將士に圍まれてゐた勝頼が、精銳を盡くした織田軍に抗敵することの出来なかつたのは固よりその所であつた。

もつと衝込んで云ふならば、武田氏の勢力は或は過重視されてゐるはしなかつたか。外にはあつた戦争が長く續き、内には天災、飢饉が屢起つてゐたから、甲州は到底經濟上から立つてゆくべき筈がなかつた。たゞ甲州では昔から砂金を産し、それがこの山國の經濟を支へて來た。武田氏の全盛時代に山梨郡の黒川に金鑛が發見せられて、その産額が一時増加したやうであつた。そこで在來の碁石金といつて無紋の小金塊で

甲斐の經濟的狀態

甲州金



(判小印極角六)金州甲

あつた通貨を統一して、松木、野中、山下、志村の四氏を金座とし、一定の形を具へた金貨を鑄造せしめた。それは天正年間のこととて、その種類には、竹流し金、烏目金、六角極印小判など數種があり、同時代の人々はそれらを總稱して甲州金と云つた。後日、徳川家康の爲めに金山を管理した大久保石見守も、素は甲州の出身であつたことを見ても、甲州の金鑛採掘事業が、それらの日に如何に進んでゐたかといふことが分つた。しかしながらこれとても到底多額の軍資を支へ、連年の兇作を補ふには足らなかつた。それらの日には農産が生活の基本で、いくら黄金があつても米穀がなければ立つて行くことが出来なかつた。甲斐の最も恵まれた所は四周皆山で、他國から侵入軍が攻め寄せるのに不便であつたこと、比較的自給自足の經濟政策を執り易かつたことであつた。然るにあ、度々飢饉が続いては自給は殆ど不可能であつた。それ故四方を攻伐して、そこから不足を補つてゐたこと、思はれた。偉大なる信玄がゐる間は、その非凡なる人格の力で部下を統率し、あらゆる缺乏に堪へ、あらゆる困苦を忍んで、主従一體となつて活動し、外強敵に抗することが出来たから、辛うじてばろを出さずゐるだけども、

その大きな人格が消え、その強い團結力が失はれると、そこに直ぐ解體が芽を萌き出さずにはゐなかつた。武田氏の解體は信玄の死に萌し、長篠の役に熟し、信長が攻め入つて來た時には、最早や殆ど完膚もないまでに解體してゐた。然るにそれが天正十年までも支持せられて、兎に角家名を保つてゐたのは、全く外敵にその實力が知られず、その勢力が傳統的に過重されてゐた爲めであつた。決死的の優勢な織田軍が、芽月ならずして甲斐を陥れたのは、寧ろ當然のことであつた。

(一)『續史愚抄』卷五十、天正六年三月十三日の條。

(二)『藩翰譜』第八下、『上杉』參照。

(三)『信長公記』卷十五、天正十年三月三日の條。

(四)同上、十一日の條。——「會者定離のかなしさは、老たるを跡に残し、若きが先立世の習、朝顔の夕べを待たぬ、唯蜉蝣之化命也」。

(五)『妙法寺記』を觀れば、天文前後に於ける甲州の經濟狀態がよく窺はれる。洪水、大風、疫病、飢饉——これらの天變地異が殆ど毎年のやうに繰返されて、これでは武田氏の軍費の出所がないと思はれるほどである。信玄が信州へのさばり出たのも、關東へ討つて出ようとしたのも、皆かうした經濟的缺陷を満たすのに急であつたことが知れる。

(六)『金銀圖錄』卷三。

(七)『甲陽軍鑑』卷十八『山縣同心廣瀨みしな辻彌兵衛武邊公事の事』參照。

(八)『甲斐國志』卷二及び『金銀圖録』卷三參照。
 (九)『昆陽漫録』卷三。

第六節 中國征討

室町時代の末に、中國に勢力のあつたのは大内氏であつた。大内氏の黄金時代を代表するものは義隆で、その居館のある周防の山口は、同時代の人々から「西の都」と呼ばれた程の大都市で、其處には京都の文化が輸入せられて、學問、藝術の淵藪、歡喜、悅樂の淨土たるが如き觀があつた。大内氏を偉大ならしめたものには、素よりその家柄、勳功なども與かつて力があつたが、久しく外國貿易を管理して、それから非常な利益を得たことが重因をなしてゐた。義隆の時代には懦弱優柔の氣風が領内に満ちて、武事は全く閑却せられ、彼れは粉黛を施した公卿達に圍まれて、詩歌管絃の逸樂に耽らぬ日がないまでに軟化してゐた。かうした文弱の大名は、到底永く部下の心を繋ぐことが出來ず、遂に家臣陶晴賢に弑せられ、その晴賢はまた毛利元就の爲めに滅ぼされて、防長藝備の諸州は悉く毛利氏の勢圈内に入ることになつた。こゝに於いて出雲に根據を置いてゐた尼子氏と石見に衝突し、爾後數年間抗爭を續けたが、勝利は遂に毛

大内氏と山

陶氏と毛利

尼子氏

利氏の手³¹に歸した。大内氏の後は豊後の大友義領の弟義長が繼いたが、嚴島の役に自刃してしまつたので、毛利氏と大友氏との間は不和に陥り、元就は子の元春をして九州に侵入せしめ、義領は兵を山口に送つて毛利氏の領土を擾亂せしめ、周防軍の九州に於ける勢力を牽制しようとした。又尼子氏の滅亡の後、その舊臣山中幸盛らは主家を再興しようとして、京都東福寺に僧侶生活を送つてゐた尼子勝久を迎へて主となし、備前の宇喜田氏、豊後の大友氏と結んで毛利氏に對抗しようとした。元就は内藤隆春を大友氏に備へしめ、長大藏左衛門等をして宇喜田氏に當らしめ、次子元春、三子隆景をして、長子隆元の子輝元と共に出雲に入つて尼子軍と戦はしめた。毛利軍は到る處に勝つて、尼子氏の勢力は日にくゞ盛まつた。然るに元就が重病に罹つたといふ報告が來たので、輝元と隆景は倉皇として還つたが、元春は獨り留つて尼子氏に當り、元就が病革まつて死んでも還らうとはせず、葬禮は隆景が營んでくれる。予は敵を殲して御靈を慰めよう」と、末次城に山中幸盛を攻めて之を降し、新山城に尼子勝久を攻めて之を敗走せしめ、雲伯の地は遂に全く毛利氏の手³²に落ちた。元就の死後、家督は孫の輝元が嗣ぎ、子の吉川元春と、小早川隆景とがそれを補佐したが、その時、毛利氏の勢力は最早や牢乎として抜くべからざるものがあつたので、喪を發しても之に乗ず

元就の臨終
傳説について

安土桃山時代

二九六

るやうな外敵はなかつた。傳説に依ると、元就は死に臨んで見孫を枕元に招び、矢を束ねてそれを折らせ、協力の必要なことを説き聞かせたとあるけれども、それは假作物語で、隆元が在世中、それを二弟と共に招き、協同一致して宗家を全うすべきことを説いたことを潤飾したものであると史家は論断した。あの私達が少年の日から訓話として度々聞かされた物語が、かうした論断によつて抹殺されてゆくのは、近世の科學の私達に齎らす幻滅の悲哀の一つとして、何となく名残惜しく心悲しく思はれざるを得ないけれど、その假作の材料が『西秦録』中の吐谷渾阿柴の故事であるといふことを思へば、そこにまた、それらの日に西方の文化がわが邦に輸入せられて、わが邦のそれと混和融合しつゝ、あつたといふ造就の歡樂が味はれるのであつた。

傳説の示してゐる如く、毛利氏は一族協同して家運の興隆を計り、曩には兵を伊豫に出してこれを附庸とし、後には備前岡山の宇喜田直家と結んで、遙かに西下せんとする織田氏の勢力に對抗した。この間に京都に逃れた尼子勝久は、信長の援を藉りて但馬に入り、尋いで因幡、隠岐を略して、その勢侮るべからざるものがあつた。毛利氏は表面織田氏と圓滑の關係を保つてゐたが、信長が尼子氏を助けたことを知り、これに對抗するつもりで足利義昭と結托し、書を信長に送つてその不信を詰ると同時に、

毛利氏の勃興

羽柴秀吉中
國に向ふ

兵を因幡に出して若佐城に勝久を攻め、遂に城を捨てて京都に奔竄するに至らしめた。

播磨に蟠居してゐた赤松義祐、別所長治、小寺政職、浦上宗景等は、備前の宇喜田氏の爲めに壓迫せられ、使者を信長に送つて一將を遣はして宇喜田氏に當らんことを請うた。信長は多くの將士中から羽柴秀吉を拔擢して、山陽道方面の主將となし、天正五年十月兵を率ゐて播磨に入らしめた。秀吉は姫路城を根據として國內の諸城を攻め降し、但馬に入つて竹田城を抜き、弟秀長をして之を守らしめ、十一月には宇喜田氏の屬城上月城を破り、福岡城を居つて、播磨一圓は全く織田氏の勢力下に歸した。信長は秀吉の功を嘉みし、播磨を與へて將來に於ける軍事上の計畫を立てしめたので、秀吉は尼子勝久を上月城に置いて毛利氏に當らしめ、漸を逐うて西下しようとした。ところが、六年二月にふとした事から三木城主別所長治が、秀吉に背いて毛利氏の味方をする事になつた。別所氏は播州の豪族で、その向背は織田軍に取つて非常に重要なので、秀吉は使を遣はして長治に説かしめたが、長治は遂にそれに應じなかつた。そこで秀吉は三木城を攻めにかゝらうとしたが、吉川、小早川の兩將が、三萬五千の精兵を率ゐて上月城を攻め、直家の援兵一萬四千も攻圍軍に加はつたといふ報告が來たので、直ちに上月城に赴き、高倉山に陣取つて毛利軍に當ることになると同時に、

別所長治叛

援兵を信長に請うた。

三木城

上月城陥つて
尼子氏亡ぶ

信長は瀧川一益、惟任光秀等をして、兵二萬を率ゐて來援せしめ、別に信忠をして三木城に逼らしめた。しかし兩軍の間には小衝突があるのみで、全局に影響を及ぼすやうな決戦がなかつたので、秀吉は作戰を變じて專ら三木城を攻むる計畫を立て、上月城には人を遣はして城を徹して本軍に合せんことを命じた。けれども敵の包圍堅く、城中糧盡きて勝久は七月三日に自盡した。

長治自殺

山陰道經略

秀吉は信忠を主將として別所氏の支城たる神吉、志方の二城を攻めて之を下し、全軍の兵を提げて三木城に逼つた。けれども城兵はよく防守して容易に落ちさうにもないので、秀吉は持久包圍の策を立て、城を遠巻にして援兵及び軍糧の敵城に入る道を絶つた。毛利氏は屢糧食を城に納れようとして、いつも秀吉の爲めに遮られてその目的を達せず、三木城は全く孤立無援の有様となり、攻圍十八箇月の後長治等は自殺し、播磨は全く秀吉の有に歸した。備前の宇喜田直家は、織田氏の軍容の盛んなのを見て、これより先き使者を送つて降を請うたので、信長は快くそれを許した。かうして美作、備前の二國もまた織田氏の有に歸した。

山陽道を経略すると同時に、信長は山陰道をも征討しなければならなかつた。京都

鳥取城

から山陰道に出ようとするには、先づ丹波丹後を手に入れなければならぬので、明智光秀と細川藤孝との二人を此の方面に向はしめた。二人は篠山城、八上城を攻めて之を降し、天正七年十月に至つて全く丹波を統一することが出来た。信長は丹波を光秀に與へ、藤孝をして進んで丹後を攻め、翌八年八月全くこれを循へることが出来た。信長は丹後を藤孝に與へた。因幡には山名豊國が占據し、但馬にその支城を置いて織田氏に對抗した。秀吉は弟の秀長と共に、但馬を略して因幡に入り、八年五月鹿野城を攻めて之を取り、まさに鳥取城に迫らうとした。秀吉は先づ書を豊國に送つて降服を勧め、豊國はそれに従はうとしたが、部下の者はそれに反對して豊國を追ひ出し、使者を毛利氏に送つて援兵を請うた。そこで出雲に居つた吉川元春は、式部經家をして兵を率ゐて赴援せしめ、同時に海路糧食を因幡に送らしめたが、丹後にゐた細川氏の水軍はそれを偵知して、俄かに襲撃して毛利軍を破つた。經家は鳥取城外に丸山城を築き、相依つて秀吉に對抗する準備をした。九年六月に至つて秀吉は、果して兵二萬を率ゐて來り、壘柵を設けて鳥取城を包圍した。やかて丸山城との連絡が絶え、鳥取城は糧食が盡きたので、經家は城兵の生靈を救ふ爲めに自殺して開城した。丸山城も亦た陥つた。援軍を率ゐて伯耆まで來た元春は、馬山で鳥取城の陥落したことを聞いた

が、空しく引歸すやうなことをせず、後秀吉が備中方面を經略してゐる間に、周邊の諸城を奪還して鳥取城に逼つた。それより先き伯耆の羽衣石城及び岩倉城は、歎を秀吉軍に通じたので、元春は伯耆に入つて之に對抗したが、秀吉は元春と戦ふのが利益でないと考え、糧食を二城に給して防備を嚴にせしめ、自分は兵を撤して安土に向つた。そこで元春はまた兵を撤して出雲の富田に還つた。

これより前、宇喜田直家が織田軍に降つたと聞いて、毛利輝元は非常に怒つて、兵を備前美作方面に出して、その根據地を覆へさうとした。秀吉は安土から姫路に還り、天正十年四月備中方面に向つて進軍した。その兵は約三萬で、宮路山、冠山の二城は瞬く間に陥り、清水宗治の守つてゐた高松城がその烈しい攻撃的になつた。時は雨季に屬し、城は河川に圍まれてゐるのを見て、秀吉は大堤防を築いて水攻の計畫をした。堰かれた足守川と長野川との水は、滔々として城中に流れ入り、城はまるで一大湖水の中に在るが如き觀を呈した。毛利輝元は急を聞いて親ら出陣し、元春、隆景と兵二萬を合はせて來援したが、秀吉は要地に軍勢を配してそれを沮んだので、毛利軍は大兵を擁して空しく對峙し、その士氣は日に衰へるのみであつた。之に反し、織田軍は不日信長が大舉來援するといふので士氣頓に揚つた。

高松城の水攻

毛利氏と秀吉との和議成る

茲に於いて輝元は、六月二日安國寺慧瓊を使者として秀吉の陣營に送り、備中、備後、伯耆、因幡、美作の五箇國を織田氏に割讓する代りに、高松城の士卒を助命せんことを議せしめたが、秀吉は胸中に成算があつたので、それを斥けた。慧瓊はどうかして和議を纏めようと、宗治を説いて自殺せしめ、その死によつて和を購はうとした。その時、京都では西下の途に在つた信長が弑せられ、その報が秀吉の許に達した。秀吉は好機逸すべからずと、四日慧瓊を招いて、宗治を自殺せしめ、且つ境界を備中の河邊川、伯耆の矢走川の線と定めて和議を結ばうと申出でた。輝元はこの申出でに従うて和議を結び、宗治は自殺し、高松城は開城された。と、秀吉は全軍に撤退を命じ、自分は六日高松を去り、七日姫路に入り、遽しく京都に向つた。毛利軍もまた撤兵して中國征伐はこゝに一段落を告げた。

(一)『大内義隆記』參照。

(二)『安西軍策』卷第三『尼子降參事』參照。

(三)『大槻盤溪著』『近古史談』參照。

(四)文學博士瀨川秀雄氏『毛利元就の遺訓狀及三子の奉答文』、『史學雜誌』第十三編第參號所載)參照。

(五)『豐鑑』卷一『長濱真砂』參照。

(六)『別所長治記』參照。この時長治は弟友之と共に自殺した。彼等の死は全く主將たるもの、龜鑑とせられ、わが武士道の光華とせらば可い。長治の自殺せんとするや、書を敵陣の淺野彌兵衛に送つて、自分達は切腹して相果てるから、士卒等は憐愍を以て助け置かれるやうに希ふといふ旨を云ひ遣つた。秀吉は直に返書を送つて、要求通りに軍卒は赦免する旨を告げ、同時に酒肴を贈つてその悲壯の最期を祝福した。秀吉の手紙と云ひ傳へられるものの中に「誠大將愛士之道。前代未聞。可謂良將。感其心底。落涙不置」といふ文句がある。一讀して暗涙の襟を濕らすのを感じる。

(七)『川角太閤記』卷一參照。

第五章 英雄の末路

第一節 本能寺の變

光秀家康の接待役となる

武田氏が滅んだ時、信長は家康に對して駿遠の二國を與へたので、家康はその謝禮に穴山梅雪を伴うて西上し、五月十五日に安土に着いた。これより先き信長は、儀禮典故に通じてゐる光秀に、家康の接待をなすを命じたので、光秀は京都や堺から諸種の器具を借り集め、また山海の珍味を調べて、珍客の到着を今かくと待つてゐた。信長は檢分の爲め光秀の邸を訪れ、一步門を入ると魚肉の爛れた臭が鼻を撲つたので、腹立たしく厨に闖入して、「この様子では家康卿の御馳走は動まるまい」と、急に堀久太郎に接待役を命じた。光秀は赤恥を搔いて、器具類、食料品を濠中に投じたので、風の來る毎にその惡臭が安土の町へ吹き散らされたと云ひ傳へられる。光秀は十七日に坂本に至り、それより直ぐ領國丹波に歸つた。

信長は家康を手厚く款待し、十九日には摠見寺で幸若八郎九郎大夫に舞を舞はせ、翌日は梅若大夫に能をさせ、自ら食膳をさ、けて家康に供したりした。二十一日には

信長本能寺に宿す

家康は、心静かに京都、大坂、奈良、堺を見物する爲めに、長谷川秀一を伴うて安土を出發した。越えて二十九日、信長は上洛して本能寺に宿し、先發の信忠は妙覺寺に宿し、相伴うて中國征討の旅に上る筈であつた。この時、信長に隨つてゐるものは、僅かに御小姓衆が二三十人であつたと記してある。

惟任軍の來襲

六月朔日夜、信長は信忠を始め扈從の將士を招いて酒宴を張り、昔語り^(三)に夜を更かして信長は寢所に入り、信忠は旅宿なる妙覺寺に歸つた。信長の夢は四周に起つた関鐵砲の音がぼん／＼と聞えた、彈丸が雨のやうに注いで來た。信長は「こりや謀叛だ！何者の企てか、お前見て來い」と、日頃寵愛して側を離さぬ森蘭丸に命じた。蘭丸は物の蔭から馬印を見て、「惟任の手の者らしいございます」と云ふと、「是非に及ばぬ」と信長は弓を取つて起ち上つたが、敵は早や八方から亂入した。信長は頻りに矢を放つたが、弦が斷れたので、十字槍を執つて再び敵に向つた。

森蘭丸兄弟

厩から五人の者が斬つて出たが、瞬く間に討死した。中間衆も悉く討たれ、殿内では御小姓衆も悉く討死した。中にも哀れに華やかであつたのは、森蘭丸兄弟三人の枕を並べての討死であつた。蘭丸は美濃の金山城主森可成の第三子で、力丸、坊丸の二

密柑に絡まる傳説

光秀を譏言したとの傳説

弟と共に信長に仕へた。父親の可成は夙く江州で討死をしたので、信長は事の外三人の孤兒を慈しんだが、中にも蘭丸は美貌で、才智がはちきれてゐたので、非常にこれを受し、片時も側を離さぬやうにしてゐた。十七歳の時に、父親の勳功で、美濃の岩村城を賜はり、政務にも携はつて立派に信長を輔けてゐた。彼れの少年の日、澤山に蜜柑を盛つた臺を彼れが持つて行かうとするのを見て、信長が「それはお前の力に餘る、危い／＼と云つた下から、蘭丸は倒れて蜜柑を溢し、臺を滅茶々に壞した。それは彼れが主人の言に應ずる爲め、慙と倒れたものだといふ傳説がある。また光秀が飯を食つてゐる時、口に入れた飯を嘔まず、箸さへも取り落したものは、叛心がある證據である」と信長に告げ口したとも云ひ傳へられる。これらの傳説は、それらの日に人々の間に云ひ囃されたことであつて、必ずしも後から作られた物語でもあるまいけれど、またこれらが事實であつたとも考へられない。たゞかうした傳説の裏面には、蘭丸といふ少年の才智と明察とが暗示せられるのであつた。信長は彼れを三つの寶物の中の一つに計へてゐたといふから、餘程彼れを愛してゐたものと思はれる。父の舊勳、彼れの俊才と美貌、さうした物が信長をして彼れを寵愛せしめたとは云ふまでもないが、も一つそこに信長が彼れを溺愛した理由がなければならなかつた。それは彼れが信長の稚

信長の稚兒

見であつたものであつた。この事は史的明徴を缺いてゐるけれども、二人がさうした關係の上に立つてゐたことは疑を容れる餘地がない。男色はかなり古い昔からあつたけれど、初めには女人禁制の僧侶の間に主として行はれたのであつた。それが武士の間に盛んに行はれ始めたのは、恐らく室町時代からのことであつたらう。ここに一つ面白い挿話がある。

男色の一例

將軍義輝が北野に詣でた時、一人の少年が馬から下りて行列の前につくばつた。義輝は同朋の福阿彌に事の理由を尋ねさせた。福阿彌は別に問ふべき言葉もないので、「相見ての後の心にくらぶればといふ歌の下の句は何といふか」と云つたら、少年は「たが誠より時雨そめけんといふ歌の上の句は何といふか」と反問した。義輝はそれを面白く思つて召し抱へたが、その後寵愛深く、以前から居た小姓は顧みられなくなつたので、嵯峨のあたりに隠れて恨の涙に寂しい月日を送つた。誰もその行衛を知るものはなかつた。或日、義輝が嵯峨へ行くと、強烈な伽羅の香が遠くから響つて來た。「かほどの香は外にある筈はないが」と従者に尋ねさせると、とある茅屋の中に心閑かに香を焼いてゐる彼の少年を見出した。義輝は憐れに思つて自ら出かけて往つて、再び仕へることを勧めたが、少年はたゞ落涙するのみであつた。義輝は酒を呼んで盃を

さし、又酬いさせて、日頃好んでゐる謠を一曲うたへと云つたら、少年は「嫉捨」の小謠を歌つた。少年はやがて、柳營に姿を現はして、以前にまさる寵愛を再び受けた。佛御前の故事に似通つたこの一くさりのローマンスは、男色が室町時代に盛んであつたことを證明してゐる。大名に抱へられて常にその側に侍し、刀を持ち、茶を進めた紅顔の美少年は、みな此の同性の愛を受けたものであつた。蘭丸もまたたしかにその著るしい一人であつた。

信長父子自殺す

信長は肘に負傷したので殿内に戻り、側に侍いてゐた婦人に、「早く逃げよ」と命じ、さて建物に火を放つて切腹した。年は四十九歳であつた。所司代村井貞勝は門前に宿泊してゐたので、夜襲の次第を信忠に報告すると、信忠は直ぐ本能寺に向はうとした。けれども本能寺は最早や焼け落ちてゐたので、妙覺寺から防戦に適した二條城に引き移つた。間もなく惟任軍は押し寄せて、味方のものは悉く討死し、信忠は自殺した。眞に儂い最後であつた。桶狭間に今川義元を屠つてから、めき／＼と春の草の伸びるやうに伸びに伸びた信長は、都の夏の曙の青嵐にむごく吹き折られてしまつた。その上昂の速かつただけに、その下降もまた速かつた。信長の一生は、いはゞ峠を吹き越した風が俄然谷間に落ちて止むのと似てゐるはしないか。倏忽！かうした言葉が、彼れ

の一生を譬へるのに最も適はしかつた。樂壇の巨星ウェーベルの『デル・フライシユエツ』の序曲に現はれる輕快の一節が、顫音で終るあたりは、眞に短い、しかし大きな波線をその事業の上に刻んだ信長の生活に共鳴してゐるやうに思はれた。



土方次郎兵衛の追腹

嵐のやうな信長の死が、それに揉まれて折れた一莖の野花によつて裝飾せられたのは嬉しかつた。——土方次郎兵衛と云つて代々織田家に仕へてゐたものが、折節所川で上洛して、柳原に宿をとつてゐたが、主君が自殺されたと聞いて、武具、腰刀、衣装などを下人達に預け與へ、友人の許に遺書を遺つて自殺した。それは眞に従容たる自殺であつた。同時代の人々がそれを「名譽ある追腹だ」と讚美したのに、無理はなかつた。信長の死をどんな歴史家も自業自得のやうに云つて、冷眼視しようとするのは餘りに冷酷に過ぎる仕打であつた。光秀の謀叛にも幾何かの理據はあるにしても、信

長の死はそれを彼れの性格の産んだ當然の歸結と見るとは出来なかつた。私達は私達のこの考の正しいことを、歴史家が餘りに口にしない土方次郎兵衛の追腹によつて證明しようと思ふ。彼れの死は眞に犬死ではなく、其主人の死を裝飾し、性格を辯護すると同時に、その後につゞいて起つた時代——江戸時代の殉死といふものに存在を與へ、理據を與へ、是認を與へる所の大きな力であつた。

よいことではない
野村胡堂の遺物

- (一) 『川角太閤記』卷一参照。『信長公記』卷十五を見ると、信長が光秀に對して家康の接待を命じたことは書いてあるが、それを堀久太郎に改めたといふ記事はなく、また安土の宿は大寶坊と定められたとある。のみならず、堀久太郎は信長の使者として羽柴軍へ發遣せられることになつて居り、かたゞ主なる接待役とも見られない。『川角太閤記』の記事は、比較的信用の措けるものであるが、魚の腐肉の臭云々のことは、假作ではあるまいか。高松城攻圍に際し、毛利の大軍が援兵を敵に送つたといふ報告が來たので、信長は直ちに光秀を始め、細川忠興、池田勝三郎、高山右近、中川瀬兵衛等に先陣を命じたが、光秀は接待的が外れ、數日間の準備が無駄になつたのを遺憾に思つたと考へる方がよくはあるまいか。
- (二) 『信長公記』卷十五。
- (三) 『總見院殿追善記』及び『信長公阿彌陀寺由緒之記録』参照。
- (四) 『老人雑話』卷下参照。
- (五) Weber: "Der Freischuetz." 参照。

(六)『信長公記』卷十五、天正十年六月朔日の末項参照。土方次郎兵衛の外に、松野平介といふものも追腹を切つて、信長の死を飾つたのは特筆すべきことであつた。

第二節 惟任日向守光秀

光秀は信長父子の自殺を確めた上、兵を洛中の諸處に放つて、織田氏に属する兵士を搜索し、發見するに従つて之を屠つた。市民は恐れ戦いて、不安の色が都に満ちた。前田玄以は信忠の遺命を奉じて、岐阜に居るその子の三法師を清洲へ遷す爲めに、京都を脱出して安土に至り、本能寺、二條城の變を告げたら、留守の將士は驚き且つ傷んで眼と眼とが見合はされ、安土城は不安の色、周章の色を以て彩られた。主將の蒲生賢秀は、その子の氏郷と共に、信長の夫人と幼兒とを奉じて日野城に入り、守備を嚴にして敵の來襲に備へた。安土を退く時、衆中にはそれを焼き拂つて敵に得させまいといふ建議をしたものもあつたが、賢秀は「折角先君が心を碎いて建てられたものだから、焼くのは何だか勿體ない」と云つてその儘にして退城したのであつた。

追々に京都から下男が落ち延びて來たが、何れも途方に暮れて泣き悲む者はない。日頃愛玩してゐた什器も、蓄積した重寶も打ち捨て、家邸はその儘にして、妻子ばかりを引き連れて、思ひ／＼に美濃尾張方面に逃れた。

信長死後の諸將と諸子

徳川家康は河内の飯盛で變報を聞き、伊賀、伊勢を経て三河に歸つた。織田信孝は堺浦で討に接して大坂に歸つたが、軍中に在る信澄は光秀の女婿であり、且つその父は信長に殺されたのを怨みに思つて、光秀に通じようとする形跡があつたので、惟住長秀と謀つて之を殺してしまつた。信雄は伊勢に居たが、變を聞いて大に憤り、伊勢の兵を發して光秀を討たうとしたが、日野城から援兵を送らんことを請ひ來つたので、土山に赴いて陣を張つた。

光秀洛中の地子錢免除

これより先き、光秀は自分が叛逆者であることを知つてゐたから、洛中の人心を收攬して置く必要があると、所司代を任命して政事に當らしめ、洛中の地子錢を免除し、祠堂銀を大徳寺、妙心寺などの五山及びその他の諸寺に寄進した。けれども、京都の人心は靜まらなかつた。恐れ、疑ひ、憂へ、安からぬ思が市民の頭腦を占めて、何となく遽だしく騒々しく、夜の眼もおち／＼と眠られない有様であつた。そこで皇子誠仁親王は、神祇大副吉田兼和を遣はして光秀を警め、洛中を騒がせないやうにとの御注意があつた。光秀は謹しんで命を奉ずる旨を答へた。

光秀狼狽す

二日以来、光秀には落ち着いた心がなかつた。彼れは信長弑害の後、直ぐ安土に行く

つもりで、勢多に至つて山岡美作守兄弟に同心を勸告したら、使者は殺され、勢多の橋は焼落されて、光秀は散々に面目玉を踏潰され、己むなく坂本城に入つた。彼れはまた一面勝龍寺城を収めて、明智勝兵衛にそれを守らせた。三日には安土に至つて天主閣に上り、金銀財寶を悉く納めてそれを部下の者に預け與へ、城に火を放つて焼き拂つた後、長濱、佐和山に亂入して之を収め、七日には再び坂本城に入つた。京都に歸つてから、光秀は大和の筒井順慶に書を送つて、若し同心すれば六箇國を與へて、自分の子を養嗣子にさせようと云ひ遣つたが、順慶は形勢を觀望して應じようとはしなかつた。また丹後の國主細川藤孝及びその子忠興は古い關係があり、殊に忠興は女婿でもあつたから、直ぐ味方に來るものと光秀は思つてゐたが、藤孝父子は髪を切つて信長の喪に服する意を表はし、光秀に應じようとはしなかつた。筒井と細川とは我物と思つてゐた光秀の胸は、この二人の乖離にひし／＼と針をさ、れるやうに感じた。彼れの緊張した心が稍々弛みを感じた時、彼れは寂寥と孤獨とを感ぜざるを得なかつた。後悔の念さへも恐らくは起つたであらう。

光秀は土岐の支流に生れて、高貴の血液を傳へた武士であつた。貧しくはあつたけれども、修養を積んで學問の造詣深く、殊に深く佛典に通じてゐたと云はれる。連歌

筒井順慶及
び細川忠興
の態度

光秀の人格

は彼れの最も好んだ所であつた。坂本に築城しつゝ、あつた時、彼れが恍然として明け離れゆく琵琶湖の美しい景色に見惚れてゐると、三甫といふ風流者が側にて、「波間よりかさねあけてや雲の峰」と發句した、光秀は直ぐそれに脇の句をつけて、「磯山つたひ茂る杉むら」と詠んだと云はれる。謀叛前に紹巴等と愛宕で連歌の興行をしたことは有名な話であつた。曾て信長が信玄の死んだことを聞いて、「信玄は實に良將であつた。御身は古今に通じてゐるから、古來の名將は幾人あつたか、それについて話して貰ひたい」といふと、光秀は雄辯滔滔と、上は坂上田村麿から下は晩近の名將に至るまでの來歴をこま／＼と述べた。飯尾新七が側から一々それを書き留めた。信長はそれを見やつて「書き留めるとは片腹痛い。さういふ光秀こそ無双の名將ではないか。若手では徳川家康、凡下では羽柴秀吉、これも亦た名將だ」と云つたとある。信長がかう云つたのには、餘程深い意味が籠つて居り、また多少の皮肉も交つてゐたらうけれど、兎も角も光秀が學才に秀で、信長の麾下中有數の物識りであつたことは想像せられる。

かうした人格を有つた人が、今日主義、現世主義、肉慾主義の武士や大名の間に交つて、親しい友達を持ち得ることは萬ない筈であつた。寧ろ指彈され、敬遠されて、

光秀心中に
寂寞と不安
とを感ず

孤立無援の地位に置かれるのが普通であつた。信長は偉大なる性格の所有者で、どんな人物をもその麾下に收容し得るほどの人ではあつたけれど、いさゝか成功を焦つた氣味があり、またさうしなければならぬ理由もあつて、部下の將士に憐愍情なく當つたことはあつた。佐久間信盛は遠ざけられ、林信勝は斥けられた。舊臣柴田勝家の如きすらも、不満に思つてゐた點が少くなかつた。況んや光秀は新附の將であつた。舊臣すらも位地の保障がないやうな場合に、新附の將士が何うして安んじて自分の將來を樂觀することが出来ようか。光秀のやうな明察、熟慮のある人は、人一倍自分の行く末について考へ、將に來らんとする悲しい、恐ろしい運命に想到してじつとしてゐる事が出来なかつたであらう。

回顧すれば光秀が家康接待の役を免ぜられ、中國出陣の命を蒙つたのは五月十五日であつた。彼れは同月二十六日に坂本を立つて一旦居城なる丹波龜山に歸つたが、翌くる日は愛宕山に登つてその夜を參籠に明した。太郎坊へ詣つた時には、二度も三度も御鬮を取つて、思ひの遂げられるか否かを卜つた。二十八日には西の坊で連歌を興行し、光秀は「ときは今あめが下知るさつき哉」と詠み、西の坊は「水上まさる庭のまつ山」とつけ、更に連歌師の里村紹巴は「花落つる流の末をせきとめて」と結んだ。

愛宕山の連歌興行

始め紹巴は光秀の發句を聞いた時、執筆の方を見やり、「御勿體ない、雨が下なるとなされては如何です」と云つたら、光秀は「お前の知らぬ事ぢや、しやつな坊主め」と罵つた。紹巴は重ねて、「なるとお直しなされまし」と云つたので、「雨が下なる」と正したと云ふ言ひ傳へがある。また或書には、紹巴が來た時、光秀が遽で、人に向つて、「本能寺の堀は深うございますか」と尋ねたのを紹巴が聞いて、「勿體ないことを思ひ立たれたものだ」と咬いたと記してある。何れにしても此の時光秀に叛心のあつたのは事實であるが、然らばさうした心はいつの頃から起つたのであらう。

光秀は丹波を領した後、龜山の北、愛宕山の續きに城を築いて、その山の名を周山と呼んだ。それは自分を周の武王に比し、信長を殷の討王に比したもので、その頃から既に謀反の志があつた。秀吉は明察の人であつたから、早くもそれを看破し、「貴方は周山に夜普請をして謀叛を企て、ゐると、人が皆云ひますが如何です？」と云つたら、光秀はそれに答へて「やくたいもない事を言はれる」と云つて笑つたと云ひ傳へられる。この言ひ傳へが眞でなく、後日それが作られたものであるとしても、かうした物語を産み出すところに、その頃光秀に懷疑的となるやうな言行のあつたことは傍證せられた。

光秀自己を周武に信長を殷紂に比す

叛逆といふやうな企ては、一朝一夕で出来上るものではなく、永い／＼間に漸々とそれが凝り固まつて形を成すに至るのである。久しい前から、光秀は信長に對して不満を懐いて居り、いつかはその束縛を離れて自由の天地に逍遙して見たいと思つてゐたに相違ない。信長とても素は小城の主人に過ぎなかつた。それが武力で四周を蕩平して、遂に天下に號令するやうになつた。彼れも固より大名ではなかつたが、名門土岐の血液を受けて生れ、その修養に於いて、その才能に於いて、その武藝に於いて、信長に劣つてゐるとは自らを思はなかつた。實力では何等の劣つた所のない自分が、唯だ命これ従はねばならぬのを、彼れは不合理のことと思つてゐたに相違なかつた。光秀は恐らく、信長が力で彼れ自身を形造つた如く、自分もまた力で自分自身を形造るとが、勇ましい、男らしい、武士らしいことだと考へたかも知れなかつた。一人の部下をだに携へずに、越前あたりを漂泊してゐた時のことを思へば、光秀は信長の自分に對する待遇の厚いのを感謝せずには居られなかつたであらう。丹波二十五萬石、近江十萬石を領する大名であることを思へば、光秀は決して信長が自分を虐遇してゐるとは考へられなかつた。けれども忘れようとしても忘れられない三つの遺恨があつた。——その一つは、三月三日の雛の節供に岐阜の城で大名の集つた時、三千石から俄かに三十

五萬石に成り上つた彼れは、お抱へもなく大名達の前で恥をか、せられたとであつた。その二つは信濃の諏訪で信長に叱責せられたことであつた。その三つは家康接待の命令を取り消されて、多くの苦心が空くなつたのみならず、直ちに中國へ出陣を命ぜられたことであつた。これらが動機になつて、光秀は遂に謀叛するに至つたのであつた。しかし原因といふものはこれらの外になければならなかつた。つまり光秀は謀叛せんが爲めに謀叛したのではなく、自覺に基づく解放の要求から、已むなく謀叛しなければならぬ運命に導かれたのであつた。たゞ信長を恨んだとか、或はその仕打に憤怒したとかいふのは、淺薄な皮相の觀察であつた。彼れの謀叛には同時代の人々の理解せぬやうな深い動因があつたのであつた。

理由のない服従は、一種の宗教的奴隷、倫理的奴隷であつた。自己の靈魂が他の靈魂と比較して秤量せられる時、自己のそれが他のそれよりも重いやうな場合に於いては、そこに服従の必要はなかつた、屈従の理由はなかつた。さうした時には、自己を解放して不合理の服従から擺脫せしめようとする努力が起るに違ひなかつた。信長と光秀との價値の比較が、社會的、武力的、その他外的の方面を離れて、智力的、徳性的など内的方面から試みられた時、光秀は必ず自己を信長の上に置いてゐるに相違な

民衆の叛臣

かつた。——これが、この一事が彼れを日本叛逆史上の一人の著名な人物とせしめた所以で、そこに彼れの真正の、偽らざる大きな價値が発見せられるのであつた。さうした自覺に基づいた叛逆は、いつの世にも容れられる場合が少かつた。後世から叛臣視せられたやうに、同時代の人々にも光秀は不倶戴天の叛臣として視られ、彼れの身の上に憐愍の情をかけるものがなかつた。廷臣も、市民も、武士も、農民も、一般の民衆は悉く彼れを嫌忌し、呪咀し、迫害して、遂に彼れをして名もなき一農民の竹槍に死なしめるに至つたのであつた。

周圍悉く光秀に悖反す

筒井順慶すら、女壻の細川忠興すら、自分に與しないのを發見した時、光秀は悲愴な悔恨と憂懼とに囚へられたであらう。四周の知己は皆彼れにまで敵であつた。名の知れぬ民衆すらも彼れには恐るべき悖反者であつた。彼れの股肱と頼んでゐる近臣すらも、絶對的に彼れの行動を是認してはゐなかつた。叛旗を翻す時、彼れは明智左馬助、明智次右衛門、藤田傳五、齋藤内藏佐等に意中を打ち明けたら、誰一人彼れを諫めぬものはなかつた。たゞ一旦言ひ出して若干の耳がそれを聞いたとすれば、いつかそれが洩れる虞がある故、已むなく一同は承認して、本能寺夜襲の暴舉に加はつたまで、あつた。

山崎の會戰

光秀士兵に殺さる

更に恐るべき一大勁敵が光秀の前に現はれた。それは中國にゐた秀吉が急に毛利氏と和して東上したことであつた。秀吉の大兵は、六月十二日には早くも攝津の天神馬場まで進出して來た。接戦はもう目睫の間に迫つた。十三日の曙に、秀吉は天神馬場を出發し、兵を三道に分つて京街道を北進した。光秀は齋藤内藏佐らをして山崎附近で邀撃せしめたが、戰破れて潰走したので、三千騎を以て勝龍寺城に入つたが、これまた攻圍せられて危かつた。そこで光秀は坂本城に入るつもりで、城を出て小栗柄といふ村を通過する時、土民の爲めに殺された。これを京童は「天罰」といひ、またその遽だしい一幕を人々は稱して「光秀の三日天下」といふ。嵐に花の散るよりもより遽だしい出來事であつた。

明智左馬助の自殺

安土にゐた明智左馬助は、山崎の難を救ふ爲めに大津まで出動したが、堀秀政の兵に沮まれて進むことが出來ず、止むなく舟に乗つて坂本城に入つた。ところが十五日になつて、光秀が死んだといふことを知り、一族を殺した上火を天主に放つて自殺した。これでこの亂は全く平定して、民衆の人氣は悉く秀吉の身に集つた。

(一・二・三)『信長公記』卷十五參照。

(四)『年代略記』及び『續史墨抄』卷五十參照。

- (五)『當代記』及び『老人雜話』卷下參照。
- (六・七)『惟任退治記』。
- (八)『老人雜話』卷下。
- (九)同上、及び『惟任退治記』參照。
- (一〇)『名將言行錄』參照。
- (一一・一二)『信長公記』卷十五。
- (一三)『備前老人物語』參照。
- (一四)『老人雜話』上卷。——但し『川角太閤記』に依ると、秀吉は天下統一後この事を聞いて、紹巴が叛逆者に與したことを責めたので、紹巴は江州三井寺へ引籠つて謹慎の意を表してゐたが、後に赦されて再び召し出されたといふ記事がある。紹巴は明らかに光秀に叛心のあることを知つてゐたに相違ない。
- (一五)『老人雜話』上卷。
- (一六)『川角太閤記』卷一參照。
- (一七)『備前老人物語』參照。
- (一八)『惟任退治記』及び『總見院殿追善記』所載落首。——「主の首きるより早くうたるは惟任ばつをあたるなりけり。」

第三節 信長の追善

秀吉は光秀を討つて主君の讐を復してから、忘れ形見の信孝と共に安土に行き、そこで信雄と會見して、共同作戰の下に美濃、尾張を徇へ、清洲城に赴いて前田玄以が岐阜から連れ歸つて警護してゐた三法師に謁した。それと殆ど同時に、柴田勝家、瀧川一益、森長可などの諸將が、凶報に接して續々と清洲に集つて來た。六月十八日には會議が開かれて、織田家の後繼者を定むることとなつたが、いづれも手前にかまけた議論をして、或者は信雄を、或者は信孝を立てようとした。しかし二人とも一旦出でて他家を繼いだものであり、正當の後繼者は、當然、嫡子信忠の子たる三法師であらねばならぬといふことで、三法師は岐阜に移つて信孝の輔佐を受け、信雄は清洲に居つて發祥の地を鎮守することに定まつた。京都の政治は、柴田、羽柴、丹羽、池田の四氏が交代して吏を六條に派遣してその局に當らしめることにし、論功行賞は、惟任光秀の闕所と信長の遺領とをそれに充てることにし、秀吉は山城を、勝家は長濱を得、諸將またそれ／＼得る所があつたが、秀吉は總てを宿將たる勝家に讓步して、敢て自ら貪らうとはしなかつた。そこにこの英雄の未來の大計畫が宿つてゐるのであつた。

三法師を後嗣とす

秀吉從五位
上左近衛少
將に叙す

この會議の終つた後、秀吉は上洛して本能寺に至り、信長の討死した跡を訪ねて法會を營まうとしたが、血縁者や宿將達に遠慮してその志を遂げず^{三〇}に^{三二}た。朝廷では秀吉の勳功を嘉みされて、これに位官を授けられる御沙汰があつたけれど、秀吉は辭退してそれを受けなかつたが、遂に十月三日に至つて從五位上に叙し、左近衛少將に任じ、御沙汰書をすら賜はつた。

紫野大徳寺
の法會

秀吉は愈々心を決して、十一日から紫野大徳寺で信長の法會を營んだ。法會は大規模で、七日間に亘つて行はれ、朝廷は十三日に、信長を從一位贈太政大臣に陞敍する旨の宣命を賜はり、これを位牌の前で讀ませられた。信長の法號は總見院殿贈大相國一品泰巖居士といひ、その位牌は新たに寄進建立せらる、總見院に安置すること、なり、秀吉はその營繕費として銀子千枚、卵塔用として銀子廿五枚、膳料として銀子百三十五枚を獻じ、また田地五十石を寄進した。俗間にはこの法會について、秀吉と勝家ら舊臣とが争を開いたやうに言ひ傳へてゐるけれど、それは根柢のない假作物語であつて、勝家や一益やは、この法會には列りさへもしなかつた。かうした事實の闡明は歴史の劇的分子を消散せしめる恨があるけれど、事實の爲めの事實たる歴史に在つては、それは已むを得ないことであつた。

信長の人格

その慈悲性

この法會は極めて莊嚴に、靜肅に、眞面目に執り行はれて、參會者は何れも悲しき追懐に新しい涙を誘つた。有難い宣命の讀み上げられた時には、聲を呑んで泣いたものもあつたらう。涙の中から故人の生立ち、性格、功業などを思ひ泛べたものも多かつたらう。——信長の人格は解き難い一つの謎であつた。一般に信長は峻嚴で、時としては残忍であつたやうに考へられてゐるけれど、それは其最期があつた悲しい幕で閉ぢられたからであらう。彼れが残忍であるやうに見えたのは彼れが餘りに嚴正であつたからであつた。春の雨の草木をうるほしてそれに生命を與へるやうな、しつとりとした慈悲の心が彼れの胸に宿つてゐたとは、ほのかながらも彼れの施政方針に露れてゐた。若し彼れにさうした心がなかつたならば——世人が一般に考へてゐるやうに、「鳴かねば殺す杜鵑」と云ふやうな短氣の性質であつたならば、どんなに非凡の才能を懐いてゐても、信長はとてもあれだけの成功をすることが出来なかつたに相違ない。あらゆる人の成功の影には、多數の名を知られた、また名を知られない英雄があつて、それらがその人を助成し、支持するのが常であるが、原則としてさうした助成者、支持者は、残忍酷薄の人には決して集つて來なかつた。少くともそれらを有してゐる主將は、父性と母性とを兼有した、恩愛の情の厚い人格者であらねばならなかつた。信長が慘酷

嚴肅と輕快

殘忍なばかりでなかつたことは、その死後二人の追腹を切つたものがあつたのを見てもそれと推せられた。

一體信長は生眞面目であつた。眞面目過ぎるほど眞面目であつた。しかしその半面には、輕い、突梯な分子をも持つてゐた。嚴肅は常に輕快の背面にあつた。これらの二つは相反した性質を持つて居りながら、また常に同一の人物の胸の裡に宿つてゐた。まじめ臭つた、苦蟲を噛みつぶしたやうな、むづかしやの信長は、少年の時から「大うつけ」の分子を持つてゐたが、それが壯年時代にまでも残つてゐた。そこに信長が笑ひ倒れたといふ珍らしい一例がある。若狹の武田家から使者の來た時、信長麾下に放狂の聞えの高かつた市橋下總守は、そつと使者を覗いて見ると、大廣間に威儀を繕つて控へてゐた。下總守は「如何さま仕付方知り顔で、見たくもない奴だ」と、廣間へ飛び出して、使者の前へ仰向きに倒れて、二本の足を使者の方に向け、片手でぼん／＼と陰囊を叩いて、「如何に御使者、これ程の餅はどれ程召し上るか」と云つた。その事を後で聞いて、信長は笑ひ倒れたと云ふ言傳がある。信長にも矢張り、滑稽を滑稽として感ずる樂觀的分子があつた。魚が水と空氣との二つで生きてゐる如く、人類は嚴肅と輕快との二つに生きねばならなかつた。信長の神經質的な、眉間に八の字の皺を描い

明察と巨魁性

てゐた顔も、時によつては破れて微笑を印したのであつた。

人に縋りつかれ、敬ひ慕はれるほどの人はぼんやりした性格の所有者であつた。即ちぼんやりといふものは、巨魁性の資格の一つであつた。然るに、信長は年が長ずると共にそれが消えて、漸々と明察の人になつた。そこに信長の長所があると共に、また大きな缺點も横はつてゐた。光秀のやうな小さい、狭い量見のものから、嫉み、怨まれたのは、一つはこの心的傾向に基づいてゐたのであつた。しかしながら、信長が短時間の間に、あれだけの大事業を成し遂げたのは、全く彼れの叡智明察が部下の人々を理解し、適材を適所に置くことが出来た爲めであつた。彼れは自分に屬してゐるものは、大名から一部將に至るまで、悉くその爲人を知つてゐた。そこに著しい一例がある。信長が將軍足利義昭を宇治の横島に攻めた時、五月の霖雨は宇治川を漲らして、とても徒渉が出来さうにもなかつた。信長は馬を河岸に立て、「昔の梶原佐々木も鬼神ではなかつた。誰かある、先陣せよ。」と云ひも終らぬのに、上の瀬では馬を激流に乗り入れた者があつた。信長はそれを見て、「あれは必ず、梶川彌三郎であらう」と云つた。けに信長の推量の如く、先頭第一は博奕好きの梶川彌三郎であつた。かうした風に、信長は部下の人格を理解し、適所に適材を用ひるといふ方針を取つた。秀吉が信長に

梶川彌三郎

趣味の人と
しての彼れ

用ひられたのも、矢張り彼れの明察の賜であつた。博奕の常習を持つてゐる梶川を知つてゐた信長は、先陣の冒險を企てる梶川をも知つてゐる筈であつた。

信長は趣味を解する人であつた。一體彼れの一門には、公卿に接したものが多く、従つて和歌を詠み、蹴鞠をさへ試みた人もあつたほどであつた。さうした家庭に育つた信長であるから、素より趣味教育を受けない筈がなかつた。天澤和尚が武田信玄の問に答へて語つたといひ傳へられる内容は、少年時代に於ける信長の趣味教育をほめかして餘りあるものであつた。それに依ると、信長は武道の外には別に深い數寄もなかつたとあるけれど、舞と小謠とは可也な趣味を持つてゐた。信長は時に臨んでよく小謠を歌つたが、十八番の舞は、たゞ「敦盛」一番であつた。天文二十一年五月十八日、駿河の今川義元が攻め寄せて來た時、彼れが立上つて舞つたのも矢張りこの「敦盛」であつた。「人間五十年、化天の内をくらぶれば、夢幻の如くなり。一度生を得て滅せぬもの、有るべきか」。——何といふ男らしい文句であらう！ 死の前に微笑するを覺悟する英雄でなければ、その眞味を理解することの出來ないやうなこの小謠が、進取的な、勇氣に満ちた、敗けじ魂の尾張男の代表者、信長の青い心をそつたのであつた。謠は可也な番數を習つたと見えて、鷺津丸根の城の陥つたといふ報告の來た

舞と小謠と
能

時には、謠を三番までも謠つた。彼れが城を京都の武衛陣に築いて將軍を招いた時、慶賀の志を表す爲めに能樂を催し、自分で小鼓を拵つたといふ記録が残つてゐる。この趣味は晩年に至るに及んで益々濃厚となり、家康を安土城に招いた時にも、幸若八郎九郎太夫に舞を舞はせ、梅若太夫に能をさせた。そして彼れの能と舞との見納めになつてしまつた。

能と舞とはそれらの日に於ける武家の娛樂の重要なものであつた。鎌倉時代に發達した田樂、猿樂は、室町時代に入つても引き続き流行したが、田樂はたゞ春日、日光などの大社の神事にその痕跡を残すのみで、猿樂のみが次第に盛んになつた。それらの日に、猿樂の諸座は、大社の神事に従つた。外山、結崎、坂戸、圓満井の大和四座は、春日の神事に従ひ、山階、下坂、比叡の近江三座は、日吉の神事に従つたが、大和の四座は、實に今日の寶生、觀世、金剛、金春の遠祖となつたものであつた。この前にも、河内に新座、攝津に法成寺座、丹波に本座などがあつたが、何處の社でも神事に猿樂の技を行ふほどの大社では、座を定め員を置いて、その數を「能の太夫」と呼んだ。應永の頃大和の國に猿樂の天才結崎次郎清次といふものが現はれたので、足利義滿はそれを召し抱へて同朋となし、名を觀阿彌と呼ばしめたが、その子の元清もまた名人

能樂の沿革

親阿彌と世阿彌

で、名を世阿彌と呼んだ。親世の稱はこれから起つたのであつた。この兩天才は田樂、曲舞などを加味して猿樂の能の舞態を定め、同時に多数の新曲を作つて謠曲といふ新しい聲樂を興した。作者は二人の外に僧の一体があり、『田村』、『高砂』、『唐船』な

謡曲



〔合歌番一十七〕舞曲

どは、その當時作られたものであつた。曲節は野曲と平家とを加味して時代の好尚に適はしめ、伴奏樂として横笛、大鼓、小鼓、太鼓などを選んだ。これらの天才によつて、復興された猿樂は、名稱こそ昔の儘であつたけれども、内容は全く變質して滑稽の趣を失ひ、頗る嚴肅な、人情の機微を穿つやうなものとなつてゐた。今の狂言は猿樂の中の可笑味を旨としたものが、それから分離されて獨立的に残つたものであつた。世阿彌の子音阿彌、孫蓮阿彌は、共に將軍義政の寵を受けた。その頃は最早や今日の四座が成立して、親世、實生を上掛り、金春、金剛を下掛りと呼んでゐたが、かうした隆盛を見るに至つたのは、全く義滿がそれを武家の式樂と定め、

幸若舞

一代に一度は京都に出でて技を演ぜしむるなど、特別保護の政策を執つたからであつた。猿樂一座の役者には、能太夫、脇太夫、狂言太夫を始め、各種の樂器についてそれ／＼の太夫が定まつて居り、舞臺の構造もまた形式が定められてゐた。舞には幸若舞、曲舞などがあり、幸若舞は義政の頃から武家、公卿などの間に流行した。幼名を幸若丸と云つた舞踊の天才桃井直詮がそれを始めた爲めに、かうした名稱が起つたのであつた。その頃には、小唄が今様に代つて流行



〔合歌番一十七〕取撰相

し、一般民衆の間にも可也に廣く行はれてゐた。

これらの藝術について、信長は兎も角も鑑賞の力を有し、享樂の力を有してゐた。信長は或意味に於いて多能多藝であつた。同時代の武士の間に行はれた茶の湯についても、信長は矢張り可也の興味を懐いてゐた。彼れは骨董癖を持つてゐた。彼れが堺に往つた時、その富裕な商人達の持つてゐた器具類を集めたのは有名な話であつた。

茶と湯と骨董癖

しかし、これらよりも、もつと信長を喜ばしたものは相撲であつたらしかつた。彼れは屢々相撲を見て、日の暮れるのも知らないことがあつた。天正六年八月十五日、彼れが安土で興行した相撲は實に盛大なものであつた。この時安土に召出された相撲取は、近江の國は勿論京都からも來て、その總數が千五百人に上り、辰の刻から始まつて酉の刻に終つたといふ。奉行には津田信澄、堀久太郎などの名將が任せられ、行司は木瀬藏春庵、同太郎太夫が當り、小相撲五番打、大相撲三番打が終つた後、奉行であつた永田刑部少輔と阿閉孫五郎との二人が信長の前で格闘をした。阿閉は骨格力量共に優れてゐたが、永田の爲めに負かされてしまつた。まことにたはいもない遊戯であつた。かうした信長の好尚の中にも、彼れの善い側、落着いた側、慘酷でない側、せつちかでない側の性格が表現せられるのであつた。

相撲について信長の性格の一面を表現する面白い物語があつた。——それは信長が極めて吝嗇であつたといふことである。即ち相撲取が三番打をしても、彼れはその褒美に焼栗一つしか與へなかつたといふことである。彼れは實際吝嗇であつた。近畿を裁定して領國が非常に殖ゑても、そこには自分の一門或は部下のものを封し、舊領主の家と面目とを保たせるやうなことをしなかつた。秀吉はよく信長の心持を知つてゐたの

で、北部近江の長濱に封ぜられた時、「私には子がございませぬ、恐れ多いことですが、お次様を養子に致して、それに長濱十萬石を譲りたうございます」と云つた。信長は非常に喜んで、「では、お前は何うするつもりか」と聞いたら、「私は御朱印を戴いたら、二月三月で西國の二三箇國を討ち取つて來ます」と豪語した。これから播磨出征の舉が起つたといふ説がある。かうした吝嗇は、全く誇大な傳説ではなく、事實であつたと思はれる。それが本當の吝嗇であつたか、或は節儉であつたかは分らない。けれども、艱難を経験した人、貧苦を経験した人は、その艱難であつた時、貧苦であつた時を追懐するのが常であるから、勢ひ人目には吝嗇と映するほどの節儉を行はねばならなかつた。殊に信長のやうな大計畫を懷いて、長い競争に於いて勝たうとする努力主義、奮闘主義、明日主義の英雄に於いては、殆ど益のない、虚榮に過ぎない、何等の効果を奏しないやうな物質の消費を肯ずる筈がなかつた。これもまた、信長が人によく云はれない點であると同時に、彼れをして長足の進歩を見出さしめた一大動因でもあつた。

事實を舉げて、こま／＼と信長を批評したのは煩に過ぎた。古い心理學者が企てた如く、人の心理作用が智、情、意の三つに分たれるものとして、信長のそれらを百分

比例で表はせば、智五十、意四十、情十といふやうな數字を當て嵌めることも出来る。しかし、意志などは所詮高潮な感情の持續に過ぎぬもの、信長が苦を苦とせずして、目的の彼岸に達しようとした努力の如きも、矢張りさうしなければならぬといふ烈しい感情の連續したものに過ぎないのであつた。また信長の氣質について云へば、彼れは神經質であつたが、同時に膽汁質でもあり、一種神經質的膽汁質といふやうな氣質を持つてゐた。たゞ彼れに見出されないのは粘液質的分子であつたか、それも實は少年の日には可也多量に持つてゐたから、いくら年を老つてもそれが全くなつてしまつた譯ではあるまいと思はれる。何にしても、信長が光秀に弑せられた爲めに、同時代の人々も後代の人々も、彼れを實際以上に殘忍酷薄の人物と考へてゐるのは掩ふべからざる事實で、それは信長に取つて大きな冤罪であつた。

- (一)『川角太閤記』卷二參照。
- (二)『總見院殿追善記』。
- (三)『晴豐公記』參照。
- (四)『惟任退治記』。
- (五)『繪本大閤記』第四編卷十一『織田家舊臣争焼香願列』。
- (六・七)『老人雜話』上卷。

こゝにいふべきも言ふべきに
 殘忍酷薄も認めざるは
 はまらぬか

人はハレのみを生まる
 ものに及ぶ事と曰ふキリト
 是を至りに人が十中九中といは

(八)『言繼卿記』卷六、天文二年七月十七日の條。——「三郎庭にて一足鞠あり、皆異體也。同月廿三日の條。——「今日三郎亭にて和歌會有之。その三郎といふのは信長の父信秀のことである。同八月廿一日の條には、織田右近(光清)の歌として「行かへり名殘の程に打そへて、雨もつらさの旅は忘れじ」といふのが載つてゐる。

- (九)『信長公記』卷首參照。
- (一〇)同上。——「此時信長敦盛の舞を遊し候。『人間五十年……』とて蝶ふけ、具足よこせよと被仰、御物具召され、たちながら御食を参り、御甲をめし候て、御出陣なされ」。
- (一一)『老人雜話』上卷參照。
- (一二)『信長公記』卷十五。
- (一三)『歌舞音樂略史』下卷、九、一〇頁參照。
- (一四)『俳優考』及び『内外諸作者考』參照。
- (一五)『觀世系圖』參照。
- (一六)『糾河原勳進申樂記』參照。
- (一七)『兵家茶話』卷十一參照。
- (一八)『信長公記』卷三、元龜元年三月五日の條參照。
- (一九)同上、卷十一。
- (二〇)『老人雜話』卷下參照。

第四節 信長の施政方針

安土城は富
力と武力の
象徴

安土城は或意味に於いて、高潮時に於ける信長の富力と武力とを表現する一つの大きな代表的記念物であつた。西へくと進んで行く信長の第一次の計畫が既に成つて、久しく夢想してゐた京都の町に彼れの族は翻され、近畿の大名は全く彼れの命令通りに動くやうになつた時にそれが出来た。それから東へ、北へ、或は南へ、或はもつと西へゆくべき彼れの第二次、第三次、第四次の計畫を立てるべき機会が来た時にそれが出来た。それを小ぼけな那古野の城に比べて見た時、信長は自己の偉大なる發展に驚かざるを得なかつたであらう。けれど、限りなき、高き、遠き彼れの理想の城郭に比ぶれば、それは、尙ほ、狭く、小さく、憐れなものであつたであらう。大小は所詮比較に過ぎなかつた。相對的に觀れば大きかつた安土の城も、絶對的には言ふに足らぬほどの小さいものであつた。信長の大きな野心、大きな慾望は、彼れをして安土城に安んぜしめなかつた。

信長政權を
收む

信長は安土の城が竣工すると、其處を自分の居城として、岐阜城には子の信忠を居らしめた。かうして日本を中央で二つに切斷し、さて兵を東西に派して、六十餘州を

信長の官位
累進

自分の旗下に置かうとしたのであつた。顧みれば信長が政權を名實二つながら完全に收めたのは、將軍義昭が横島から河内に逃れた時であつた。室町幕府の解體によつて、その時日本はそれに代るべき何等かの統治形式を要求した。しかし傳統を重んずる我邦では、天下に號令するほどのものは、祖先を皇室から發した四姓——源平藤橘に限られてゐた。藤原氏は直接に朝廷に仕へて門葉は繁孳したけれども、亂世を裁定するほどの人物に缺けてゐた。橘氏は殆ど血筋が絶えるほどに衰へてゐた。源氏たる足利氏の政府に代るべきものは、當然平氏であらねばならなかつた。信長は、それ故に、藤原氏であつたけれども夙に自ら平氏と稱して、他日天下に號令するのに都合のよい素地を造つてゐた。曾て義昭から管領の職に補せられようとした時、それを辭退したのも、實は自分で將軍のやうな統治者の地位を得る心があつたからであつた。彼れは天正二年三月には從三位に叙し、參議に任じ、足利義滿、及び義政の例に倣うて、東大寺所藏の蘭奢待を切り取らんことを奏請して許可せられた。これは非常な名譽であつて、將軍と同じほどの勢力のあつたことを示すものであつた。長祿役の後には、信長の聲名は天下に振ひ、朝廷は直ちに彼れを權大納言、右近衛大將に任じ、その子の信忠らを始め、家臣の柴田勝家等もまたそれ／＼叙任せられた。かうした高い官位を得ても、彼れ及

び彼れの周圍は、依然尾張の百姓侍に過ぎなかつた。そこで信長はその將士に命じて、西國の豪族の姓を冒さしめた。その後、信長は天正四年十一月内大臣に、五年十一月右大臣に陞叙し、その勢は朝日の東に昇るが如く輝かしかつた。

普通ならば信長は、足利氏の後を嗣いで將軍に補任さるべきであつたが、彼れの胸中には新形式の統治方法が宿つてゐて、強ひて將軍となる必要がなかつた。即ち彼は朝廷の官僚の一員として、天下に號令しようといふ素志であつた。この志の蔭には、彼れの神道主義、愛國主義と結びついた勤王主義が閃めいてゐた。それだから、或史家の如きは、信長の時代を以て近世の天皇政治の胚子の宿つた時と論じてゐる。また久しく日本にゐて、最もよく日本の歴史を了解してゐるキリヤム・グリッフィスは信長を評して、「彼れの目的は皇室を恢弘してその尊嚴を興復するものであつた。彼れは源氏の血統のものでなければ任せられなかつた將軍の位地を望まなかつた。けれど内大臣としてミカドの名に於いて國政を管理した。」と云つてゐる。この觀方には誤りがなかつた。信長は確かに主權の所在を知つて、天皇の名に於いて政治を行はうとしたものに相違なかつた。信長は一般に武家政治家として、頼朝や、尊氏のやうに思はれてゐるけれど、この點に於いて彼等とは區別せられねばならなかつた。彼れの政治形式は、また其後

新形式の統治

グリッフィスの信長評

朝廷に對する態度

繼者たる秀吉によつて踏襲せられ、政治史上から觀て安土桃山時代といふ一時代を劃せしめたことは、我邦の歴史の上で頗る注目すべきものであつた。

信長の朝廷に對する態度は、全く眞面目であつた。勿論、そこにはいくらかの不純な分子もあつたらうけれど、朝廷をたゞ手段に使はうとするものとは格段の距離があつた。信長は位階の進められる毎に、朝廷に對する供御を増し、廢れた諸々の儀式を復興し、その既に忘れられたものは公卿をして之を研究習熟せしめた。加茂祭の競馬は行はれ、節會は興され、祭事は行はれ、長らくの間埋没してゐた神泉苑の池は浚濬せられて、東寺では舊例に従つて天下泰平を祈ることになつた。信長はまた洛中洛外の寺社領、公卿領を復舊して、貧窮のどん底にあつた廷臣の生活を賑はし、兵亂の爲めに荒廢してゐた社寺の面目を還元せしめた。これらの日に於ける朝廷、公卿、社寺の經濟的基礎は、全くその領地からの所得であつたが、それが大名や武士の爲めに押領せられたので、公卿は生活を支へることが出來ず、社寺は堂塔が荒廢し、天皇さへも、はじめに、川舎の一武士にも若かぬやうな生活状態を見らるゝに至つたのであつたが、信長



信長花押(『書文内坪』)

民本分子

この努力は、應仁以來、無秩序に陥つた社會の秩序を回復し、官民共に緊縮した生活を營むことが出来るやうになつた。

信長の政治には、若干の民本的な分子が見出された。武家政治は全く專擅横暴、些しも民衆の人格を認めない暴君の政治であつた。けれども、信長は民衆の休戚に關心して、社會一般の安寧と秩序とを維持することに努めた。元龜四年、彼れが京都に入つて足利氏に代つて新政を布いた時、所司代たる村井貞勝に諭示した條目(六)は、彼れの政治理想を窺ふことの出来るものであつた。その第一及び第二項は、商工を招集して荒廢した京都に復興の息を呼吸させようとしたものであり、第三項は慈悲心の發露である社會救済に關するものであり、第四項は工藝を獎勵して、生産を増加させようとするもの、第五項は神道佛教以外に儒學を保護して、社會の倫理的基礎を確立し、民衆の道徳的觀念を向上させようとしたものである。これらの中には、いふまでもなく民心を籠絡しようとする幾分のデマゴジクな要素を含んでゐるけれど、眞に民衆の生活を安易に導いて、その能率を發揮せしめようとしたことは、疑ふべからざる事實であつた。かうした愛民思想は、天正三年に彼れが越前國に公布した「掟條々」に於いても窺はれる。

愛民思想

信長は農民の生活状態を知ることにも努め、鷹野に托して屢々村落を視察した。或年、それは何時の頃であるか分らぬけれど、尾張にゐた頃の事、唯ひとり詫しい出立で、



（合歌番一十七）賣字文一

鷹を据ゑつ、海東郡の在所々々を通ると、年老つた女の悲しんでゐるものに逢つた。どうした譯かと聞くと、「先祖から所持してゐた田畑を、名主に押領せられたので、今は食ふ物もなくなりました。腹が空けば涙も出て参ります」との答に、信長は心竊かに政治の正しく行はれてゐないことを知り、「これは全く予の罪だ」と呟きつつ、城に歸つて丹羽長秀を召出し、事情を話してその處分をなさしめた。長秀は直ぐその村へ往つて故老を呼集め、様子を尋ねて先規の如く沙汰したので、老婦は涙を流して悦んだといふ傳説がある。

今一つこれに似た傳説らしい事實談が書き記されてゐる。——信長が岐阜から上洛

する時、京都から歸城する時、必ず經過せねばならなかつた美濃と近江との國境に、山中といふ小さい山里があつた。雨の降る日は雨に浴されて、風の吹く日は風に打たれて、いつも其處に片輪者が食を乞うてゐた。天正三年六月廿六日、上洛の途中信長はそれを見て不便に思ひ、「總じて乞食は住所不定のものだが、この者は何時も此處にばかりゐる。何か仔細があるのではないか」と馬を控へさして里人に尋ねた。里人は畏まつて、「因果は恐ろしいものでございます。先祖の者が常盤御前を此處で殺しましたので、その報いで、もごさいませう、代々あの通りの片輪者が生れます」と答へた。信長は所持の木綿二十反を里人に與へ、「この半分で小屋をさしかけ、あの片輪者を飢死せぬやうにして遣はせ」と命じた。勇猛剛毅——時としては残忍酷薄のやうに見える信長にも、かうした優しい慈悲の情があつた。この情が知らず識らず法令の上には現はれて、民衆の生活を幾分でも安定に導くことが出来たのであつた。

かうした信長の政治的功業は、その軍事的成功に掩はれて多く光を失つてゐる。彼れの政治的功業の中で、最も顯著な一つは道路の修築であつた。所謂「戰國時代」に在つては、群雄が地方に割據して、手々にその領地の安固を計つた爲め、關所を設けて、道路を四塞し、時としては交通を遮斷することすらあつた。平和の曙光がさし初めた

平和的施設

關所、道路、
橋梁の修築街路樹とク
インカンク
ス

信長の富力

甲斐の經濟
的狀態

天正二年の末、信長はかうした不便から民衆を救ふ爲めに、關所の撤廢、道路の修築を計畫して、坂井文介、高野藤藏、篠岡八右衛門、山口太郎兵衛の四人を奉行としたが、工事は進捗して翌年正月中には竣工した。峻しい路は平坦となり、路面の岩石は切り取られ、道の幅は三間平均に造られ、その左右兩側には杉や柳を栽ゑ、在所々々の老人や幼者にそれへ水を灌がしめ、河々には舟橋を架け渡して、一々徒渉する面倒をなくした。又あらゆる關所は撤せられ、夫役は免ぜられて、久しく荒廢に歸してゐた交通は回復せられ、旅行、運搬は殆ど意の如くになつた。世に一里塚の制は、慶長年代に家康が始めたもの、如く言ひ傳へてゐるけれど、それは矢張り信長の街路樹から胚胎したものであつた。事によると、これは西歐のクインカンクスに影響せられてゐるかも知れない。いづれにしても、かうした新試に信長の頭腦が非凡であり、殊に行政的才能に富んでゐたことが知られた。

信長にかうした政治的成功、軍事的成功を齎らしたものは、恐らく彼れの富力であつたらう。それらの日に於ける經濟狀態は、今日からこれを手取るやうに観るとは出來ないけれども、一般に生産率が減少し、或は生産は饒多であつても分配が都合よく行かず、富が局所に停滯して、民衆は概して生活の困難を感じてゐたらしい。甲斐一

國の例ではあるけれども、連年饑饉が續いて餓死者多く、偶ま豊年が來ても金融が逼迫して米穀その他必要の物資を得ることが出来なかつた。^(二二)物資は一般に缺乏して、分國內では絶対權力を有してゐる大名も、その徴發には餘程苦心したらしく、時としては借用の證書を差し入れて一時それを借り入れる形式を取つた^(二三)こともあつた。

かうした時代に、信長は先づ尾張の富に養はれ、後次第に發展して覇を天下に唱へるやうになつても、富は矢張り彼れを周匝して、豊富な軍用金を供給した。天正十年正月、伊勢の神官上部太夫が、神宮が三百年來正遷宮を行はないから、是非とも勸進を願ひたいと申し出た時、その費額を問うたら、「千貫あつたら宜しうございます、後は勸進で事が足りませう」と答へた。信長は首を横に振つて、「一昨年八幡宮御造營の時、三百貫要るといつてゐたら實は千貫要つた。此度は千貫といふから三千貫は費らう」と云つて、三千貫を寄進することにしたが、その時森蘭丸を使者として岐阜に赴かしめ、その土藏に納めてある鳥目一萬六千貫の中から支出せしめたといふ記載がある。^(二四)この一事を見ても、信長の經濟がどんなに豊かであつたか分る。また從來、砂金の僨貨幣に代用してゐたものを貨幣にしたのも信長であつたらしい。その年代について明確な記録は残つてゐないけれども、多分天正三年^(二五)より前であつたに相違なかつた。

岐阜城の鳥目一萬六千貫

金貨の創始

天正三年十月、奥州の伊達輝宗から名馬と鷹とを贈つて來た時、使者に遠來の勞を犒うて黄金二枚^(二六)を與へた。翌年十一月、内大臣に任ぜられた時には、朝廷へ黄金二百枚^(二七)を獻じ、五年七月、近衛信基(信尹)が元服した時には、金子五十枚^(二八)を祝儀として贈つてゐる。かうした風に部下の將士、公卿、朝廷への頒與奉獻の多額であつたと、安土城の壯觀などを比べ合はせると、信長を大にしたものが富力であつたことを否定する譯には行かぬ。

(一) 明智光秀は惟任氏を、丹羽長秀は惟住氏を、塙九郎左衛門は原田氏を冒した。かうした改姓は、一は高き官位に適せしめる爲めであつたけれど、他面、西國の民衆の耳に親しい豪族の舊姓を冒すことによつて、西國を征服する上にあるくの便宜を得ようとしたのであつたに相違ない。

(二・三) 『大臣補任』(『史籍集覽』第廿四册所收)

(四) 徳富猪一郎氏著『近世日本國民史』(織田氏時代、前篇、卷頭)参照。

(五) W. E. Griffiths: "Japan in History, Folk-lore and Art," p. 154.

(六) 『信長記』卷六『室町殿重れて御謀叛の事』参照。

一、京中地子錢、永代令^ニ赦免^一畢。若、從^ニ公家寺社方^一、地子錢の内、收納有來る分者、相計、替地を以、可^レ致^ニ沙汰^一事。

一、諸役免許之事。

- 一、鏖空孤獨の者、見計、扶持方可令下行之事。
- 一、天下一の號を取者、何の道にても、大切なる事也。
- 但京中諸名人として、内評議有て、可相定事。
- 一、儒者之學に心を碎き、國家を正さんと深く志を勵す者、或、忠孝義烈の者、尤大切な事に候條、下行等、他に異りて可相計、又其器の廣狹、能尋問、可告知之事。
- 右條々相計、可申付者也。

元龜四年七月吉日

信長

(七)『信長公記』卷八參照。

(八)『信長公記』卷五『御鷹野の事』參照。

(九)『信長公記』卷八參照。

(一〇)同上(天正三年乙亥)參照。

(一一)街路樹の起原は、はつきりと分らないけれど、北條泰時がこれを始めたといふ説がある。

(一二)『妙法寺記』、天文三年、六年、七年、十年、十一年、十三年、十五年等の條を見ると、飢饉つゞき、疫病つゞきに、民衆の疲憊してゐたことが知られる。

(一三)長淵玉泉寺文書。——北條氏直朱印狀。

依天下之御弓矢達、當寺之鐘、御借用に候。速に可有違上候。御世上御靜謐之上、鑄立て可有御寄進間、爲先□御證文、其時節可有被遂披露旨、被仰出者也。仍如件。

天正十六年(戊子)正月五日

長淵玉泉寺

(一四)『信長公記』卷十五參照。

(一五)私の考では、金貨が稍と定まつた形を持ち始めたのは、元龜の頃からであつた。そのことは元龜四年の日付ある『下京出入之帳』の記事で十分に證明せられる。

(一六)同上、卷八、天正三年十月十九日の條。

(一七)同上、卷九、天正四年十一月廿一日の條。

(一八)同上、卷十、天正五年七月十二日の條。